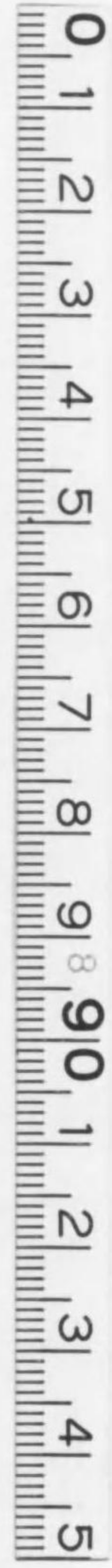


328-378



1200601393817



始



26. 3. 25

328-378

外 1951
L



梨集

第三卷

大正
4. 8. 20
購求

8
11
21
21

例言

本卷には伏見天皇より後村上天皇にいたる歴代の御製を謹輯し、これに添ふるに伏見天皇中宮永福門院後醍醐天皇中宮後京極院の御歌を以てせり。

本卷に収載せる伏見院御集、伏見院御百首、伏見院御詠草、後伏見院御製集、後伏見院御詠草、後伏見院御詠草百首、後二條院御集、愚藻、後二條院御百首、花園院御集の九種は、いづれも信憑すべき古寫本を謄寫校合せるものにして、其他の後醍醐後村上兩帝の御製、永福門院後京極院兩中宮の御歌、及び各御集の拾遺はすべて本會にて謹撰せるものなり。

伏見院御集、伏見院御百首、伏見院御詠草三種の原本は圖書寮の所藏なり。然して其原本、伏見院御集は伏見院御百首と題し、伏見院御百首はかへりて伏見院御集と題せり。されども世に傳ふる伏見院御百首はその後者にして、前者は詠百首和歌詠三十首和歌等を輯録せるものにして、寧ろ御集と申すべきものなれば、本書にては右の如くこれを改めたり。伏見院御詠草は御製の重複せるも

あり、歌題の缺けたりとおぼしきも見ゆれども、一に原本のまゝとし、いさゝかも私意を加へず。

後伏見院御製集、後伏見院御詠草、後伏見院御詠草百首、またいづれも圖書寮の蔵本に據る。然して其原本、後伏見院御製は伏見院御製と題せり。然るに其内容を檢するに、他の集に載せたる伏見院の御製は本集中に見出されずして、かへりて後伏見院御詠草百首中の、冬里、昨日今日とやまの雪、除夜、さだめなき世とは思へど、等の御製の、本集冬部に出でたるを見るのみならず、本集の春部のみを、別に後伏見院御製と題して傳へたる一本、圖書寮所藏中に在るを發見せり。なほ本集の巻頭に「正安三年春よみ侍りし」と詞書ありて「われのみぞ時うしなへる山かげや垣根の草も春にあへども」といふ御製を載せたるが、これまた正安三年正月二十一日に御讓位ありし後伏見院の御述懐として、殊にふさはしかるべきが。如上の管見にもとづき、姑く本集を後伏見院御製集として收めたり。

後二條院御集、愚藻、後二條院御百首、また圖書寮本に據る。愚藻の原本は嘉元三年九月の奥書ありて、頗る善本なり。御百首はいづれも殘闕にして、完本なく、現に存するもの七十四首に過ぎず。

花園院御集には二本あり。歌數一は二百四十九首、一は百六十五首。然して歌數少きかたの歌は、悉く他の多きかたのうちにおいて、排列の順序も兩者ほゞ相似たり。然して前者は圖書寮の所藏にして、其奥に此御集以甘露寺亞相之本於灯下馳禿筆校合畢、天文八年九月二十二日、左衛門督藤言繼とあり。後者は、圖書寮内閣文庫ともに藏す。然るに續群書類從第四百二十五卷には、この後者を光嚴院御集として收めたり。類從以外未だ光嚴院御集とせるものを知らずと雖も、かく題せるはいさゝか據るところなきにあらず。そはこの兩本いづれにも、風雅集に載せたる光嚴院の御歌の混ぜるを見ればなり。されどもまた當時の撰集たる玉葉、續千載、續後拾遺、新千載、新拾遺、新後拾遺等に載せたる花園院の御製は數多、この集中に見ゆれども、これ等の撰集に載せたる光嚴院の御歌は

さらに見えず。されば、本集を以て直に光嚴院御製とせるの非なるは明白なり。按ずるに時代を同じうし給へる花園光嚴兩院の御製は、はやくより紛れたるものありしなるべく、隨て此御集中にも混入せるなるべし。さればいま本書には、其歌數多き言繼癩の校合本を收め、其中光嚴院の御歌として風雅集にいでたるものは、特に六號活字を用ひて、他と甄別し易からしめたり。

大正四年八月上旬

古谷知新謹識

御製集 第三卷 目錄

伏見院御集	1—20
詠百首和歌	1
詠百首和歌	1—8
詠三十首和歌(嘉元元年)	3—6
伏見院御百首	7—11
伏見院御詠草	12—16
春	12—15
秋	16—17
伏見院御集拾遺	18—20
中宮鐙子御歌	21—25

後伏見院御製集……………一七三—一七八

次第不同……………一七三

春歌……………一七三

秋歌……………一七三

冬歌……………一七三

後伏見院御詠草……………一七九

後伏見院御詠草百首……………一八五

後伏見院御集拾遺……………一八七

後二條院御集 藻……………一八七—一九一

春……………一八七

夏……………一八七

秋……………一八七

冬……………一九〇

戀……………一九一

雜……………一九一

後二條院御百首(現存七十四首)……………一九一

後二條院御集拾遺……………一九五

花園院御集……………一九五—二〇六

春……………一九五

夏……………一九五

秋……………一九五

冬……………一九五

戀……………一九五

雜……………一九五

花園院御集拾遺……………一九七

後醍醐天皇御製……………一九七

御製集第三卷 目錄

中宮藤子御歌……………四

後村上天皇御製……………四三

御製集第三卷 目錄終

御製集第三卷



伏見院御集

詠百首和歌

春二十首

立春

今日ははやそらも日影ものどけきは春きぬと思ふ心よりかも
子 日

あらたまの春の初音の今日ぞとは手にとる松の色に見えけり

伏見院御集

霞

風寒み春としもなき世の色に山のかすみも立ちやかぬらむ

鶯

聞く人の心をはるにもよほして時知り顔にうぐひすのなく

若菜

春あさき雪の消え間にすくなくて若菜みじかき春日野のはら

残雪

冬にあまる寒きころの残りてや春の雪とはなるにはいにあるらむ

梅

ひらけそむる梅をはじめの色にして數多の花もこれよりぞ咲く

柳

なびけども吹く音はせぬ春風の柳に見ゆるをちのかはざし

早蕨

かくて世にふる野の蕨をりふしも知らでぞ過ぐす物うかる身は

櫻

櫻色に雲もかすみもうつりけり花のさかりのきさらぎのやま

春雨

夜もすがら草のみどりを染めてけりあさけの庭の春雨のいろ

春駒

草深き野原に遊ぶ駒みれば世につながるわが身かなしも

歸雁

秋とてもいさ白雲の春のかりさしもわかれのさだめなき世に

喚子鳥

春やまのかすみに迷ふ呼子鳥友よぶならしゆきかへりなく

苗代

山川のながれをわけてせく末に幾なはしろの種をまくらむ

堇花

草深みあれたる宿にこととへばふるき垣ほにすみれ摘むなり
杜若

かきつばた池のみぎはを咲きめぐり水の色さへはるふかき頃
藤

花のあとほみどりになれる木蔭よりかかるや藤の色もなつかし
款冬

春の色のとまるとなしに山吹の花もてせける井手のしがらみ
三月盡

花鳥もなるとなしのすさびにてまた春つくる今日もきにけり

夏十五首

更衣

なれて後かはるはこれもあはれなりかりの衣の色とおもへど

卯花

なべて世の卯月を時と咲けばにやこと名をからぬ花にはあるらむ

葵

神垣や今日のまつりにかざすてふ時にあふひの名こそかれせね

郭公

語らはむ人こそなけれ時鳥われもうき世に音をばたつとも

菖蒲

あやめ草なにかこの世の濁江にしひてこころのひかれしもせむ

早苗

傾くる田子の小笠のいくならびおなじ心にとるさなへかなり

照射

五月闇はやまをわけてともす火にうきめをみねの鹿ぞかなしき

五月雨

をちかたの山の端たえて今日いくかおなじ雲なる五月雨の空
廬 橋

吹きすさぶゆふべの風に露おちて村雨おもきのきのたちばな
螢 火

飛ぶ螢もえつつゆけどよそに見るかげは涼しき物にぞありける
蚊遣火

月をいとふ里のつづきか軒ごとに煙ぞならぶ蚊やり火のやど
蓮

おつと見る池のはちすの白露は浮葉のたまとまたなりにけり
氷 室

あだにのみ消ゆと思ひし雪こほり氷室にのこる姿をぞみる
泉

夏知らぬこころやみえむせきいるる清水涼しきやどの氣色に

六月 祓

みそぎする河邊涼しく吹く風にぬさもとりあへず秋や立つらむ

秋二十首

立 秋

今日しやがて何のうれへのあるとなみ秋とし聞くに物ぞ侘しき

七 夕

雲井にてながめ馴れにしそのかみの秋もこひしき星合のそら

萩

葉をきよみ露のひかりは涼しくて今朝花みゆる庭のはぎはらひ

女郎花

名ばかりや人はめでける女郎花をらで過ぐべき姿ならぬを

薄

いでそむる尾花が穂すゑ短くてなびかす風ぞ庭にすくなき

刈 萱

夕ぐれや庭静なるかるかやの穂すゑの露はかせもみださず

蘭

袖かけて露ぞ色なるふちばかま紐とくころの野邊のあきかせ

萩

尋ねいる宿のけしきはあれはてて軒より高き庭のをぎはら

雁

初雁のそらにこゑする夕ぐれに軒端も秋のをぎのうはかせ

鹿

分けつくす野原しの原おしなべてのがれぬ秋と鹿や鳴くらむ

露

思ひみだす心こそなほはかなけれあしたの露のあだしこの世を

霧

谷深み朝けの空はおそくみえて夕ははやききりのやまかけ

槿 花

朝がほよなべての花のひとさかりそれだにあだの色ならずやは

駒 迎

見しごとく思ひこそやれ今宵かも雲井の月に駒ひくらしも

月

雲霧はひかりばかりをへだつとも月の心はちりもけがれじ

擣 衣

長月や身にしむ風の夜をかさねうつやきぬたの聲いそぐなり

蟲

夜すがらの思をうれへかはすらし諸聲になく野邊のむしの音

菊

秋深き庭のまがきの霜がれにひとりさかりのしらぎくのはな

紅葉

秋の色も染めかはるべき時しあれば時雨もふりて木木もみぢぬ

九月盡

枯れまさる草木を時の姿にてあきてふ名にも今日しわかれぬ

冬十五首

初冬

昨日よりも今朝は嵐のはげしきや冬にかはれるしるしなるらむ

時雨

ねざめする板屋の間の村時雨降るも過ぐるもさだかにぞ聞く

霜

おきて見る朝けの軒は霜しろみまがふや雪のいろとみるまで

霰

今日もただ雲さえくらし寒き日の風のすさびにちる霰かな

雪

降るほどはくもりかすめる雪の色を朝日にみかく遠の山の端

寒蘆

霜さむき難波のあしの冬枯に風もたまらぬこやのやへぶき

千鳥

おきべには波の音してみぎには千鳥つまよぶ住吉のうら

水鳥

こほりとくる池の水鳥うきて世に住みがたしとや思ひ知るらむ

氷

寒くなる水の心のむすばほれ冬はこほりとなるにやあるらむ

網代

あじろ木にいざよふ波のよるよるは心やさわぐ宇治のはし姫

神樂

かご山やさかき葉白くおく霜のこころとけける神あそびかな

鷹狩

朝風に寒き野原をかりゆけばこころも手さえてあられちりかふ

炭竈

うづもれぬ煙を見せて雪のうちもそことはしるき小野の炭竈

爐火

庭の雪はすだれへだつる間の中にまだおく深きうづみ火のもと

歳暮

いたづらのながめの月日移りきていそがぬ宿も年やくれぬる

戀十首

初戀

知られじなよその浦路に漕ぐ舟のほのみし波を袖にかくとは

忍戀

ことわりの浮名にまけて今日までは人のつつむに任せてぞ經る

不逢戀

深く思ふわが心までをちぎりにてむなしき人に身をやかへてむ

初逢戀

なげきつるあはれ多くの年月にかへてはかなき夜はのひととき

後朝戀

わかれてもわかるとはなし君にそふ心は身にもまだかへらねば

遇不會戀

戀ひしとも今更人にいひがたみわれさへうとくなるぞ悲しき

旅 戀

思ひよらぬ旅のかりねの一夜しもつねにまさりて妹ぞ戀しき

思

なれすぐる月日にそへて思ひまさる人の哀のきはぞ知られぬ

片 思

思へども人のなさけは人をわけば我が哀をばわれのみぞしる

恨

ためしなくつらき限やこのきはと思ひしうへのうさもありけり

雜二十首

曉

この頃のねざめになれてさ夜深き鳥の初音をかならずぞ聞く

松

頼むかげのみどりはなほも常磐なればこやの山の古き松が枝

竹

あはれなり世のうきふしは知りながらさすがつれなき庭の吳竹

鶴

和歌の浦やむれゐるたづも音をぞなくさりにし友の數を戀ひつつ

苔

かくてしもしばしの身をばやどしてむ岩根のこの苔の筵に

山

春はまづかすみをわけし八幡山見しよに神もこころへだつな

河

人の世はとまらぬ波のはやせ川ゆきてかへらぬはてぞ悲しき

野

あだし野の草葉にかかる白露のただ消えぬまの身にこそありけれ

關

逢坂や關のわらやの軒の月むかしのかげをとどめてやすむ

橋

おく山の谷のかけ橋こけ深み世わたる道はさぞなあやふき

海路

浮き沈み世をうみわたるあま舟の行末知らぬ身にこそありけれ

別

またと見ぬならひの更にかなしきは馴れて別れし百敷のやど

旅

露にしぼり嵐にほしてたび衣野邊も山路もいくかわけきぬ

山家

山里の庭の柴垣しばしだにありてかたきはうき世なりけり

田家

はるかなる門田の末は山たえて稻葉にかかる入日をぞ見る

懷舊

數數にのこれる玉の聲はあれどその世の人のとまれるはなし

夢

まよふうちは現とみるも夢ならば嬉しきゆめの現なれかし

無常

はかなくも身をいつまでと定めてか後とは物を思ふなるらむ

述懷

筆のあとに我が心をばとどめおけどあはれを誰れか残しても見む

祝

あめつちのやはらぐ國のことわざのさかりにとめる敷島の道

詠百首和歌

春二十首

立 春

睦月立つあしたむかへて諸人のいはふ心やみなかよふらし

早春鶯

春きては幾日も経ぬをうぐひすののどけき聲にはやも鳴くかな

山 霞

春がすみたなびく暮を見渡せば四方の山邊ぞうすくなりゆく

海邊霞

霞む日の波路のどけき夕なぎにあまた行きかふ浦のつりぶね

餘寒霞

風ませに雪ふりあるる今日の日は春しもなほぞさえまさりける

子 日

子の日にや今日は出でつる諸人の小松が原に引きつれてゆく

澤若菜

春淺き雪げの水に袖ぬれて澤田のわか菜今日ぞ摘みつる

野早蕨

いたづらに野邊の蕨のをりふしも知らぬわが身の春ぞ物うき

窓 梅

吹く風の夜ふかき窓に匂はずば梅のありかは知られざらまし

路 梅

道の邊やたれぬしならぬ梅の花往來のひとのかざしとぞなる

河邊柳

山遠きむかへの河のかは岸になびきてたてるやなぎひともと

夕春雨

雲ふかき空はけさよりくもりつづき夕暮わかぬはるさめのうち

春月朧

曇るとてうらみし秋の月かげにかすむそこ路のあはれとはなる

歸雁幽

消えまさる翅もはては見えずなりぬ霞める山を越ゆるかりがね

栽花

われ見すばかたみともなれ植ゑそふる宿のさくらは行末の雲

折花

さくら花みやこのつとのためばかり一枝ゆるせ春のやまもり

落花

散りぬなり惜むによらぬ人の世のわかれば花ものがれやはする

籬歎冬

梢にははなもあとなしやまぶきのまがきに春のいろを残して

池藤

春ふかき色にやうつさいにぞうつろふ紫のふち咲くやどのいけのさざなみ

三月盡

春はけふ今日も夕の今の身にかざる名残をいかにながめむ

夏十首

墻卯花

かこひすつる賤が園生の垣根までなさけぞ見ゆる卯の花の頃

簷新樹

さしかはす軒の緑の夕こかげまだ夏あさきいろぞすすしき

待郭公

二度とききかさねばやほととぎす初音のちの今日の一こゑ

江五月雨

あやめおふる沼の入江の五月雨にあまるや水のゆく方もなし

夏夜月

すすむとてすだれをまけばうたた寐の袖まで白き軒の月かげ

叢間螢

とぶ螢草葉をやくと見えながらひかりはなほぞ涼しかりける

村夕立

雲はやみと山にみつる夕立はふもと晴れゆく里のひとむら

杜 蟬

つづき立つ杜のしげみの夕木蔭ゆけども同じせみのもろごゑ

夕納涼

風おろすゆふ山かげの松の風しばしすすみて夏ぞわするる

秋二十首

初秋風

風やつぐる心やおもふいつしかの秋にうれふる暮のながめは〇

七夕契

あまの川もみちの橋の秋よりや色かはらじと契りそめけむ

庭 萩

過ぎてゆくゆふべの庭の秋風をしたひがほなる萩のうへかな

野 萩

宮城野の木の下道のゆきすりに袖にいろなす萩のしらつゆ

原 薄

花すすき草の袂もつゆおもしろあしたの原の霧のあさあけ

浅茅露

ふるさとやあれ行く庭の浅茅原つゆふかしとて誰れか拂はむ

朝野分

今朝もなほ雨よこざりて風もやまず村雲さわぎ千草みだれて

秋夕

うれへそふ秋とてなにかかこたましただ村雲の夕ぐれのそら

蟲聲滋

草のものは蟲の音ならぬ方もなし露わけてゆく秋のよの野邊

雲外雁

秋風に雲もうき立つゆふぐれの空にぞわたるかりのひとつら

遠聞鹿

聲のみぞかすかに通ふさをしかのおのが鳴く野は霧に隠れて

待月

月はなほ山のあなたの空や遠きまだみねくらき松風のおと

見月

思ひみれば住みこしかたも行末もともにきはなき秋の夜の月

惜月

いりはてむ後もしばしの短夜をのこすもおなじあたら夜の月

曙山霧

こすゑ深ききりの雫は雨とおちてあけぼのくらき軒の山かけ

里擣衣

たがひまやねすときかする里つづききぬたの音ぞ數多聞ゆる

菊久盛

咲き匂ふおなじかざりの色ながら日數ぞうつる庭のしらぎく

紅葉淺

しぐれそはむ梢の色を残しおきてまづ下染のつゆのひといろ

紅葉漸脆

散りそむる後はいくかの色もあらし嵐をませぬ木の葉なりとも

暮 秋

しぐれはつる日數ほどなき長月のむなしき名にぞ秋は盡きぬる

冬十首

寢覺時雨

まきのやの寢覺のうちも幾時雨過ぎては音のまたきはふらむ

寒草霜

朝な朝な霜のふる野の冬枯にあきの千草のそのあともなし

夕 霰

夕ぐれや近き垣根の竹の葉をうつや霰のこぼれてぞちる

松 雪

白妙につもれる雪の一村を松に吹きなすやまおろしのかせ

竹 雪

隔てつる竹のかこひは折れふして庭につづける雪のやまもと

河上水

末うくる谷のかけひも絶えぬらし氷りてとまる山河のみづ

冬曉月

鐘のほどに夜深き霜のおきて見むあかつきがたの月ぞ寒けき

湊千鳥

波さわぐなごのみなどの浦風に入江の千鳥むれてたつなり

夜埋火

物おもふ知られぬ時やうつりぬる灰しろくなる夜のうづみ火

歳 暮

急ぐべき春のこころも知らぬ身は長閑におくる年のくれかな

戀二十首 御本一首四

寄月戀

あやにくにやどるか袖の夜半の月なみだありとは人につつむを

寄風戀

思ふ人袖にもせめてふれもせよ戀ひあまる日のくれのあき風

寄雲戀

あま雲のうきたる人を戀ひそめて絶えず心にかかるくれかな

寄雨戀

この暮は雨のさはりと思ひなして今日ばかりだに人をかこたじ

寄曉戀

今の名残後のたのみもいひもあへすやがて明けゆく心迷に

寄夕戀

契りなれし人の昔を思ひいでてひとり空しき夕をぞみる

寄夜戀

わびてぬるこよひの心うかれ行きて人の爲にも見えよとぞ思ふ

寄山戀

うきなかはただもろこしの吉野山したふ心やおくれじとする

寄野戀

身をすればえぞいはしろの野邊の松久しきこひに結びなれても

寄河戀

龍田川紅葉のにしきそれよりもわがうき中ぞなほ絶えぬべき

寄浦戀

世とともにしをるる袖の浦波のたちるに妹をかけてこそ思へ

寄木戀

幾夜われつれなき色にこひわびぬ涙しぐれのふるのかみすぎ

寄草戀

つひに人かれけるものを秋萩の下葉のいろを何うらみけむ

寄鳥戀

さしてとふ夕のとりのゆくかたもわれぞ泣く泣くひとり眺むる

寄蟲戀

つひにさて思消えなば夏蟲のもえこがれてのはてぞかひなき

寄衣戀

いつのまに涙の袖にあまりけむかはすほどなき夜半の手枕

寄書戀

言の葉のかはるとなしにかはりけむ心のかはる人のたまづさ

寄鐘戀

鐘の音もつきせぬあはれ忍ぶらしそのよのいまの暮の眺に

寄舟戀

わが方に心もよらぬあま舟はこと浦なみにへだたりぞゆく

雜二十首

曉山

星清くはれたるみねは靜にてまつかせ高きあかつきのやま

夕野

野邊とほき夕日のすゑの山本に一筋しろきけぶりをぞみる

夜雨

ともしなきいほりの軒の夜の雨ひとり心にききあまりぬる

窓灯

ひましらむ聞の光を待ちつけてこころときゆる窓のともし火

庭苔

八重とづる苔はいつものみどりにて春秋わかぬ庭のいろかな

江 蘆
いかにせむ入江にしげるよしあしも皆假の世と思ひなさずば
浦 舟

風をいたみおきつ白波たかしまのかとりの浦にとまる舟人
山家雲

山深きやどのすまひは朝夕の雲のたちゐを軒端にぞ見る
山家風

山里のゆふべは人もおとづれず嵐ぞわたるみねの檜はらに
田家鳥

ねざめするふしみの田井の曉に鳴の羽おとぞちかくきこゆる
閑居木

いたづらに花も紅葉もいくうつり月日も知らぬ宿のながめに
故郷草

あれまくの軒端の草の名にも思へむかしにもあらぬ宿の心を
旅 行

越えきつる山の幾重のへだてにて雲にあとなきふる里のそら
旅 宿

思ふかたのことかたならなむ友もがな草の枕のたびのまろねに
旅 泊

うちもねず浦のとまやの波枕よるよるひとりこころくだけで
述 懐

あらぬ身のあらぬ心になしてこそありうき世にはあり渡りけれ
往事夢

むば玉の夢てふものはなき人の二度あはむためにぞありける
神 祇

四方におよぶもとの誓のあまりより塵にもうつる光をぞみつ

釋教

照らしすむ心のつきの清ければ雲のさはりは目にもかからず

祝言

民やすく國をさまりて天地のうけやはらぐるこころをぞ知る

詠三十首和歌

嘉元元年

春五首

早春鶯

み雪降り世は寒けれどうぐひすの今朝なく聲の春にもある哉

朝霞

やや近き朝日の影もにほひかねぬ曙ふかきみねのかすみに

夕梅

梅の花したてる庭の夕づくひ暮れうつりゆく色ぞほどなき

庭春雨

庭の雨のきこゆる窓に寐覺して心しをるるはるのよすがら

見花

あはれ今は身をいたづらの眺してわが世ふりゆく花の下かげ

夏五首

聞郭公

聲よりも姿やしのぶほととぎす月なきよひのやみに鳴くなり

五月雨久

今日までは五月の日數さながらにをやまぬ雨の中に過ぎぬる

水邊螢

流れゆく水の心は涼しけれど螢の火をばけたすぞありける

遠夕立

風はやみ雲のひとむら峯こえて山みえそむる夕立のあと
樹陰納涼

秋ならぬただあき風の夕暮よ山かげふかきまつのひびきに

秋五首

草花露

なびきあへる花の末より露ちりて萩の葉しろき庭のあきかせ

深夜月

秋風の聞すさまじく吹くなべにふけて身にしむとこの月影

野鹿

鹿の音もはやるべせよ今日まではわくる道なき春日野の原

霧中雁

山深み朝霧はれぬ軒の空にわたるやかりのこゑぞまちかき

山紅葉

誘ひゆくさほ山嵐までしばしはその紅葉あき深きころ

冬五首

初冬時雨

染めおとす木木の木の葉を庭にしきて時雨の音に冬ぞきこゆる

河水

なつみ川かは音絶えてこほる夜に山かげ寒み（クイ）鳴ぞなくなる〇

浦千鳥

わが世にはあつめぬ和歌の浦千鳥むなしき名をや跡に残さむ〇

連日雪

降りおもるよなよなごとに折れそひて雪にしかる庭の吳竹

夜神樂

ほしうたふ聲や雲井にすみぬらむ空にもやがて影のさやけき

戀五首

忍 戀

忍べばとただその方にかこつにぞさらば顯れてみばやとも思ふ

不逢戀

一筋にかけはなれぬにたゆませてそこをつれなく過ぎむとやする

待 戀

類なき今宵のうさに思ひこりて明日ばかりだに待たれずもがな

遇不逢戀

そのままにそはまし見まじいたづらに惜しや逢あはれやはばやよその年月

恨 戀

われも人も恨みたちぬるかなれば今はさこそと哀なるかな

雜五首

曉 雲

明けぬべき空の氣色になりてしも雲はいろこきあかつきの山

夜 夢

思ふかたの夢はしばしの名残にて寐覺うれしき夜半のひと時

羈中煙

里やいづく野邊はるかなる旅のくれに夕山白くけぶり立つ見ゆ

山家嵐

山あらしの過ぎぬと思ふ夕暮におくれてさわぐ軒のまつが枝

社頭祝

石清水神ながれのナミイのながれをうけつぎて絶えずぞすまむ萬代までに

伏見院御百首

春二十首

のどかなる心にやがて知られけり今日たちかはる春のしるしは
匂ひ出づる霞のうちの朝づく日のどけきいろは春ぞこもれる
ながめやる夕日の山のうす霞かすみにすけるまつのむらだち
夕づく日のどかにかすむ山もとの竹のあなたにうぐひすの聲
もえそむる野邊の若菜の雪ませにつむ手もさむくこほる袖哉
山の端のかすみもしろくふる雪に春とはいはじさゆるあらしも
春もまだひとへの梅のしろたへに雪の下なるいろぞまがへる
くれなるの色ことに咲く梅の花しづやの軒にあまりなるまで
花はまだ柳のいとのおさみどりくる人あれなこのごろのはる

降りけりな音にはたてぬ春雨の見れば草葉のうへぞぬれゆく
山うすき霞のすゑのゆふづく日かたぶく峯をこゆるかりがね
山かせにかすみも雲もはらはれてみがける月は春としもなし
またれつる花こそ既に近からしこすゑの色のにほひそめぬる
おほ空の霞もいろにうつりけりよそまであまる花のかをりを
雲とのみよそより見つる色もみな花にわけなるはるの山ぶみ
櫻花あだにちるとてうらみじよ憂世のうちばかからでもまた
山嵐のあらく過ぎつるひとほり花のふぶきに空閉ぢぬなり
花にそめし心をやがてうつすとはいはでも深し山吹のいろ
うち霞み春ものふかきあけほの木だかき岸に咲けるふち波
春もはやあはれいく夜ぞありあけの月影細きよこ雲のそら

夏十五首

夏ごろもたちかへしててしこも忘れぬはわかれし春の花ぞめのそで

しのびねはふけてや聞くと時鳥いもねぬ夜半をかさねてぞ待つ
月はいま木の間はつかに見えそめて山ほととぎす一聲ぞ啼く
村雨は曇りのこもはてぬひとそそぎ晴れゆくそらに啼くほととぎす
虹の立つふもとの雲に雨過ぎて露もさながらとるさなへかな
月のもる軒端の風のひとふきにねやのおくまで匂ふたちばな
五月雨はしばしたえまを見るほとこもなほ雲深しをちこちの山
つれづれとあまるながめのつくづくと暮しかねたる五月雨の頃
檜の葉の高きこすゑに風を聞きていさごに白き月ぞすすしき
かくて見むそをだに秋の花のため草のみどりはよし深くとも
月もまだくらき夜がはの水の上に鶴舟のかがり影ぞほのめく
水の上にもえても消えぬ螢こそ風にうごかぬひかりなりけれ
あらくすぐる梢のかせのひとかたへよこざる雨にいな妻の影
鶯の飛ぶむかひの岸に瀧おちてすすしさふかきまつのした道

おほぬさやあさのゆふしでうち靡きみそぎ涼しき賀茂のかは風
秋二十首

秋はまだその色とだにわかなくになにぞ心にうかぶあはれは
あまつ星ゆきあふ夜半はわれさへに心空なるながめをぞする
袖の露もいかがくたくる萩の葉にそよやうれへの秋風のとき
常よりも心うつろふながめかなまだ夜のままの露のたまはぎ
かげよわみうつるとなしの秋の日にかりがね寒し薄雲のそら
さ夜深き枕の山のまつかせにたぐふを鹿のこゑもまぢかし
うけてむかふ心よりこそかなしけれ忘れて見ばや秋も夕も
見わたせば遙につづく小山田の色こきかたはかりそめにけり
秋かせはこすゑを拂ふ夕ぐれに雲もかからぬ山の端のつき
うれしくも月のあきしも長き夜よさてだにあかぬ眺とおもへば
みるままの姿ばかりか月はただこころの底にすみけるものを

人はたれか月よりほかのかげも見ずあれて幾夜の秋のふる里
秋ふかきありあけの月の影さむし淺茅いろづくはつしもの庭
月はまだ影見えそめぬ草むらの露にみだるるむしのこゑこゑ
ややにほふ朝日の影をみねにこめて霧に消えゆく秋の山の端
ころもうつなれもさこそは寒からしあかつき深き霜におきゐて
うつるなよ霜はおくとも菊の花つぎて咲くべき色しなければ
百舌鳥の鳴く山のすそ野の夕づく日色みえそむるはじの一本
たづねいる山より山のかさなればもみぢも深き色ぞそひける
秋もいまつれてやいぬる夕ぐれのあらしに早き雲のひとむら

冬十五首

かきくらし軒端の空はしぐるれどあらしの末に雲ぞはれゆく
山風にふるや木の葉のひと曇見すばしぐれにききまがへまし
わけてゆくあともすくなき道の邊の小笹が上に氷るあさしも

枯れはつる色こそかはれなほ秋の面影のこるをばなかるかや
 山河やあきの名残をなほとめてこほりにすける底のみぢ葉
 霜か雪かはだれに見ゆる庭の上^{こほれる}月のかけの寒けさ
 浦風に雪ふきませてなにはがたあれたる浪に千鳥なくなり
 冴えわぶるねざめの床の深き夜に聞くもさびしきをしの一聲
 竹の葉に嵐もさやくゆぐれの雲のゆくへにあられちるなり
 夜すがらのあらしのままの跡なれやむらうすき今朝の初雪
 ふりつもる雪の木の間の朝づく日花にかをりしはるのおも影
 降りはてて雲はむらむら氷る夜の月にみがける雪のとほやま
 みかりするかた野の原のおち草はかくる程につもる白ゆき
 すみがまの煙は下になびきつつ雪吹きかくる小野のやまかせ
 暮れてゆく年はわが身にそふものを思へばはての哀なるかな

戀二十首

吹く風のつてにもいかで知らせましかかる思のありとばかりも
 さてもその晴間やいつぞあま雲のみだれたちぬる戀もうらみも
 ひと知れぬ心ひとつのおもひより胸にけぶりのたたぬまもなし
 もらすなよ涙の露はしげくともひとをしのだの杜のことの葉
 こえてこそなほまどはるれ逢坂の關のあなたを何なげきむ
 今よりのとだえよましてうち橋の長き契もたのむとやおもふ
 あま人の玉もかりほす袖の浦にわれたちぬれぬ波のよるよる
 きぬぎぬになきぬらしつるころも手に露わけそふる道の篠原
 祈りこししるしやなにぞ日にそへてつらさのみこそ三輪の神杉
 にほどりの下のかよひちたえざらば浪の浮巢はうかれたりとも
 ひとりのみ臥猪のかるもかきつくしおもふ思に明けがたき床
 頼めねば待つともなしの夕ぐれにすがくやいかにささがにの絲
 むかはましあはれならまします鏡見なれし人のかげのとまらば

たのめつるくれをまつまの床の上にぬれて残れるつげのを枕
まちたへてはらはぬ床のすが筵なみだのしたによし朽ちもせよ
流れ出づる涙にそまるくれなるのやしほの衣あさしとはみじ
下紐のとけてもとけぬ心こそありしよりなほ結ほほれけれ
忘れじの契もいままやしらま弓わがひくかたにたのむばかりか
わがかたは思はぬ波にとまりすなあしまの小舟さぞ障るらむ
夕ぐれはさてもと思ふあはれより涙に匂ふいりあひのかね

雑十首

やまもとの鶏の初音もほのぼのとまだ雲ふかきあかつきの空
かかげてもほのほ短き灯のまどにしたたぬあめのよすがら
波白きうらわのまつの葉ごしよりかくれあらはれ見ゆる釣舟
うきふしもよしや世の中いく程となくさめて見る庭のくれ竹
鳥かへるふもとの林日はくれて軒端のやまにやどるしらくも

秋はつる田づらの庵はかたへよりひた引きすててもる人もなし
大方もいづくかかりの宿ならぬ旅とてなにかさのみかなしき
入りかかる日影は山のはつかにて里のつづきにけぶり立つ見ゆ
なほすべてくるしいとはしいくほどの命まつまのよとは思へど
君が代は千年のまつのいくたびを植ゑてもつきじ百敷のには

伏見院御詠草

春

幽情只愛洞中春集古

おのづからもとめぬ友は山陰にありけるものはな鳥のやど

野草山花又欲春

あはれなる野山の草木それだにも誰が教へたる春にかあるらむ〇

陰陰花浣月

軒ふかき花のかをりに空とちて木の間わづかにあくる月かげ

梅

花のなかに春をいそぐがうれしきに軒近くしも梅の咲きける

春夕

何となく春のひぐれぞあはれなる霞のきはにとりわたりつつ

春夜

梅かをり月うすがすむおぼろ夜に春のあはれぞおほくこもれる

春雨

ゆふぐもり雲にかすみの立ちそひて幾重かとづる春雨のそら

歸雁

それもいまだ忘るな雁の一つらよあき風たたむ夕ぐれのそら

花

百敷やはしのひだりの櫻花なれてながむるはるもへにけり

春曙

ほのぼのと峯のかすみは匂ひそめて軒端の花にあけつたふなり

春庭

空ははや色わかぬまでくれはてて庭に残れるはるさめのおと

暮春述志

年年のわかれもおなじ春ならばをしみなれぬるあはれをや思ふ
あはれなり知らで惜まぬ人の世よ春はひかすのあればこそあれ
春はせめておなじ時にもなぐさまむ又あはぬ世の人ぞかなしき
春を惜む今宵の友もつひにそれさり別るべき限はあるらむ
はるを惜む心にあはれつづききてなみだにほひて思ふことあり
見すならむ春までかねて悲しきはこころをそむる雲の上の花
岩木まで名残とならぬものもなし別にむけてはるをおもへば
まぎれすごし思ひもいれぬ悲しさよさしもあひ難き時の情を
花のあとの青葉にかはる色を見てもものうらめしみ春やゆくらむ
時をしたひ人を思ふもすべて世に別てふことぞかなしかりける
春はそれかならずかへる時もあらむ長きわかれば人の身ぞうき

かたちなき春の名残を思ひつけて惜みしたふぞせめてはかなき
散りはてて花はもとより残らぬを名のみ名残の春にぞありける
今いく夜かすみ残れる有明の月をなごりのはるのおほぞら
をしまれてとまるも何かしるしならむ春てふ色の形なければ

春歌中に

鶯は時はるとなけども梅が枝にゆきちりかかるはなはつれなし
のどかなるゆふべのながめはるにして音せぬ雨の暮ぞ淋しき
咲きそむる一木の花とみる程に四方の櫻もさかりにぞなる
よもやまに白雲みたり昨日今日花のさかりに匂ふなるべし
花の上はなほ色そひてゆふぐれの梢のそらぞ深くかすめる
いろいろの藤山吹の花ざかりなどしも春のくれにあふらむ

残雪

ひととせにただ一時の春にだになほさきだたぬ花ぞほどなきかなしき

ひととせはみな春ながら過ぎなむのどかに花の色を見るべく
山里の花に心をうつしとめてかへらむかたのいそがれぬかな

霞

かすみわたる遠つ山べの春のくれ何のもよほすあはれともなき

春夕

晴れはてぬ雨のなごりの雲なれやうすくかすめる夕暮のやま

花

櫻花にほひのうちにくはるのひとのなさをそめかもつらむ
をりふしは散るしもなほの情かな風のこすゑのゆふぐれの花の

暮春

待ちとらむいづくの春を急ぎてか惜むところにとまりしもせぬ
ながめしをる彌生のすゑの雨の中に花もなごりと散り亂れつつ

款冬

山吹の花のさかりを待つほどにはるの日数のすぎぬべきかな
花はちり春はかへれどあぢきなきわが身は何となる方もなし
いづかたにわれもと思ふ世の中をうたても春のひとりさる哉

對禁庭花言志

雲の上の花はかはらず匂ふともまた見む春はいさ知らぬ身を
思ふ故のなきにしもあらぬ名残をばあはれと思へ雲の上の春
春歌中に

この雨にふりめぐまれてまたれつる梢の花の明日やひらけむ

いなましものを一高麗

かくにほふ花しあらずばやすらはで春の山路はいなまし物を○

河邊柳

見るままに緑ぞまさるとほつ川岸のやなぎのはるさめのくれ

春風

散りぬべき花の心にしたがへばさそふ風のみのうきにしもなし

春曉

月影はねざめの床にのこりつつ花のかをりぞまどをあらそふ

三月盡日言志

春はげにきたりもさりもせぬものを何をかたちの今日の別ぞ○
わかるるも惜むもひとつ心よりさまざまになす今日の春哉
同じ春ののちもあるべき物ならばなにかは今日の別なるべき

花

あたらよのわが身のはての悲しさよ盛ほどなき花をみるにも

霞

のどかなる眺やほかにまさるらむ春はかすみの九重のうち
夕暮のひさしくあるとおぼえつるは霞む春日の長きなりけり

春月

あくがるる心も人はおもひやらじ霞める月のさよふかきそら
花

待ちをしみ雲井の花をながめてもあはれ十年の春は過ぎにき
櫻花まつとをしむといくたびの春のながめにあはむとかする
忘れじなやよひのなかば空すみて月さやかなる春のこよひを
めぐり逢はばまたもと頼む春なれど知り難き世の我れぞはかなき
かくてまためぐり逢はむもかたき世に今宵の春よげに惜むべし
今の友おなじ情のうちにしてまためぐりあふ春もやあるらむの
命ありて今宵にまたもめぐりあはば今の情をいかにしのばむ
いかなれや常の別の春よりもこころぼそさのこよひそひぬる
彌生の十日頃人人あまた歌よみ侍りし時
おしなべて池のあたりは青みわたり春深げなる色になりぬる
さかりなる汀の花のくれの色をこころとどめて今日ぞ眺むる

ひびき匂ふ霞のうちの入相のこゑもはるなるいまのゆふぐれ
花ははやさかり過ぎたるこすゑしも今日は情とながめなしぬる
かすみはつる夕の空を見るままにこころに深きあはれぞにほふ

三月盡夜述志

日にそへてさてあらまうき世の中に羨ましくもかへる春かな
恨むべき風のつらさを我れになして花ふみちらす宿のうぐひす
・ 正安四年世の中あらたまりし春花をみて

今年だにあくまで花にまかせてむ身をいたづらの春のいとまを
うつろひし雲井のやどのさくら花またかはる世の春ぞ程なき
思ひいでてなほこそしのべ諸人のさくらかざしし雲の上の春
春にかはる心はなしにあしびきの山のかすみの立つをしぞみる
いたづらに時しもわかぬ春の雪のすさまじき世に我れぞありふる
時知らぬ身はふるさとの雪の中に春めづらしきうぐひすの聲

なぞやこの梅てふ花のありそめて色香に人のこころのみとる
 うち霞み時のあはれやいまならむ月としもなき朧夜のはる
 うかるべき春の別にあはじとてさきだつ花もこころありけり
 いづかたのなごりかなほも勝るらむ花と春とおなじ別は
 うちなびく柳さくらのいろも春のさかりと見ゆるころ哉
 なべて皆みちゆき人の氣色まで花にのみあるきさらぎのころ
 思ひおく心の色も知らぬ人の花をかたみと見ざらむもうし
 霞む夜の木の間の空はおぼろにて花にかをれるはるの月かげ
 春のくれ空もなごりを惜みてや雲もしをれてあめの降るらむ
 静かなるながめもいとどかなしきは春もいまはの夕暮のあめ
 柳
 うちなびく氣色をみれば青柳の絲にし春はくるにぞありける
 春雨はみどりの絲に露ぬきてたまやなぎとはむべもいひけり

鶯

花

うぐひすの聲も匂ひてきこゆるは花のなかにてなければなるらむ

鶯

山陰の垣根は春にうとくあれやこぞみしままの雪ぞかはらぬ

鶯

かすみわたる山邊をみてや鶯のわがとききぬと谷を出づらむ

落花

山ざくらをしまぬ風のこころには誘ひちらすを情とやおもふ

春夕

晴れかかる雨のゆふべに風たちて柳のすゑは露こぼるなり

春野

春の色は霞のすゑのおく深みながめこめぬるきさらぎの野邊
 をちかたの柳の上に雨はれてまきしづかなるはるのやまもと

ともし火のひかりふけたる春の夜はおしあくる窓も月ぞ霞める
あけぼのやただかすみなる波の上はま近き舟ぞゆききをも見る
見えそむる木の間をあくる色にして花にとちたる窓のしののめ

秋

早秋

思ひかぬるもとのうれへに今よりの秋の心をなほやくはへむ

七夕

星あひは雲のうへにて目の前のわかれを人になげくころかな

夕

秋ふかみ尾花がすゑも霜がれぬゆふべの風はもの寒くして

朝

あさあけや雨の曇と見えつるはまだ霧晴れぬ空にぞありける

たちさわぎしばしぞはれぬ横雲のなごりの山の霧のむらむら

秋

秋風のたかき岡邊の柳かげなびくこすゑにゆふ日をぞみる

露 九月二十八日詠之

むすびかへむ淺茅が露の玉くしげふた夜あけなば冬のはつ霜

雁

この頃のうき世を秋の心しるや雲井のかりも音をぞともなふ

秋

片岡の梢のかせに一葉おちてあきなるくれのひぐらしのこゑ

月

草の露松のあらしもすめる夜の月よりなれるあはれとぞ思ふ

初秋

今よりのましての空よゆふぐれは秋ならでだにながめし物を

浦初秋

難波がたあしのいく夜もまだへぬに秋立ちぬとや風の涼しき

原初秋

秋にあくるあしたの原の風の音にやがてや露もこぼれそむらむ

初秋夜

たなばたの逢ふ夜近しとあまの川空にすすしき風わたるなり

初秋月

月の色雲のけしきもこのゆふべ秋になりぬと見えそめぬなり

里 秋嘉元三年詠之

はかなくてうき初秋のひとめぐり露をそへぬるふかくさの里

浅茅

秋たけて寒き浅茅がつゆの上にひかりふけたるありあけの月

葛

こぬ人を垣ほのまくすうらみかねおのれ枯れゆく秋のふる里

河 秋

ながめやるふしみの田の面するこめてあけぼの深き宇治の川霧

寄月秋

過ぎきつる月の秋だにほどもなしまして今よりゆくすゑの空

寄枕秋

ありあけのかたぶくかたの鐘の聲枕そばだてながめてぞきく

寄涙秋

草はつゆ袖はなみだのゆふまぐれ秋にしをれぬ世の色もなし

愁

よそになく蟲のうらみと聞くほどに我れもうれへの心にぞなる

秋 雨

吹きはらふ嵐の庭に音をさせて木の葉にかろき秋のむらさめ

秋ふかき霧のくもりのあさけより晴れもつづかぬ雨となりぬる
 枯れはつる草葉もなほぞしをれゆくさむき雨ふるあきのくれがた
 風まよふ野分の草の上あれてよこぎる雨はつゆもたまらず
 聞くままにくらき雨のみふりそひて人はおとせぬ秋のよの窓の

秋 月

身をあきのうれへをうつすよもの色に月もおちてや影の悲しき
 浮雲にむかふは早き月かげのはれ間のそらはのどかにぞすむ
 おきしめる夜寒の露の袖うすみひかりもおもき月のころもで
 秋の月はねざめ御本ノマの窓をすぎてまくらにおつるかげぞふけぬる
 庭くらくかたぶく月はかべにみちてなく蜚こゑふけにけり
 あげやする光をしける庭の月のかげとしもなくうすくなりゆく

秋 霧

秋のあさけ霧たちまがひふる雨にしられでぬる草の上かな

月

三日月のありあけのかげになるまでに秋の幾夜を眺めきぬらむ

蟲

蟲の聲のかれゆくきけばおしなべて見ぬ山までの秋ぞ知らるる

暮秋 月

秋に見むそのおもかげも今いく夜よをへて細きありあけの月

暮秋 朝

朝な朝な霜おく庭のささの葉の一夜にのこる秋ぞすくなき

月

山の端のいるかた近くみゆるかなまだ弓張のよひのまのつき

秋 階

人はこすはしにしたたる秋の雨を空しきとこに聞きあかす哉

秋 岡

秋風の寒き岡邊のやなぎかげすさまじき世のいろになりぬる

秋書

いくつらぞあけやらぬ空は見えわかで霧にかきけつ雁の玉章

黄

眞萩原枯葉まばらにちりすぎたれたる庭のあきのくれがた

月

昔とおもひきはむるはてもなし過ぎけむ空のあきのよの月

月明風又冷

はださむみ秋なる風のこよひかな月も身にしむ色にながめて

月

久方の空たりきよみあきらけき秋の月夜は見れどあかぬかも〇

秋聲

さびしげの秋のみやまのゆふぐれや梢にあらし雲にかりがね

秋夜

秋ならであきあはれなる眺かな月かげくもるむらさめのそら

秋曙

かげしげき木木のしづくに露おちて霧深き山のあけぼのの空

暮秋

もろこしの山を過ぎゆく秋なりとしたふ心のわれおくれめや

秋

秋風のこすゑにひびく夕暮に雲井のかりもこゑあはすなり
垣ほなるまぐさが下葉色かれぬ夜寒もよほすあきかせのころ
同じ秋の月はかはらずめぐりあへと去年にかはれる哀をぞ思ふ
あけぬやとねざめてきけば秋の夜のさもまだ深きかねの音哉
ゆふやみや月をおそしとながむれば袂にふれて秋風ぞ吹く

野月露深

伏見院御詠草

わけてゆく野原や遠くなりぬらし月かげおもる露のころもで

秋 鐘

いでそむる月はよそなる光にてまだのきくらき松かせのこゑ
かたぶかぬ月の光はよるながら鐘のこゑのみあけがたのそら

秋 窓

時雨にも風にもわきてもろかれやはやくそめちる櫺ののみちば
いつもわが寐覺の空にめぐりあへな窓にむかへる入方の月

秋 風

秋の雨の晴れゆくすゑに山みえて里あらはるるをちの村村
さぞなまた露も涙もさそはれぬあはれことしも秋風のそで

秋 日

ちらねどもまだきにさびし夕づく日さすや軒端の木木の秋風
かくてなほかはらぬ影もいつまでぞわがよ更けたる秋の燈火

秋 立 日

今日といへば何の憂のそふとなみ秋としきくぞただに侘しき
色そはむながめよいかに今よりの草木の上も秋たちぬなり
露をおきて涙ぞしるき今よりのうれへの袖のあきのゆふぐれ

寄 月 秋 正和二年

見なれぬる月はいづくもあきながらわが面影やあらずなりなむ
寄霜秋同

寄 浦 秋

枯れわたる霜のまがきの秋の草かはる姿はわれひとりかは

はるばると雲の波路のすゑはれて月の夜わたる須磨の浦ふね
 もの思ふいつもの空の雲風も秋なるくれのいろをそふなり
 鹿のこゑ蟲のうらみもうれへまさる秋にし心ひとりたへめや
 風の音の秋に吹き立つ夕よりころもでかけてつゆおちぬなり
 秋ならぬ心になしてながむともなほ雲風のあはれやあるらむ
 しかむしのうれへもからず秋はただ心よりして物ぞかなしき
 雲井にはかりがねわたる夕ぐれにむらさめまがふ軒の松かせ
 露のいろ月の光もむしのねも野邊にみちたる秋のさよなか

岡 秋

散りぬなり岡邊のやどのはじ紅葉山の木の葉は染め果てぬまに

浦 秋

あま人もねてやあかしの浦づたひ月に夜ふねの音ぞきこゆる

秋 蓬

いたづらにうき身よそぢの秋たけてわが世ふりぬる霜の蓬生

秋 葛

故郷や野邊ひとつなるあきかせに葛の葉白きゆふぐれには

蕭

露しろく月しづかにてさ夜ふくるよもぎが庭は秋風もなし

月

軒ふかき松の葉かげをいでやらでしばしはほかに月ぞさやけき

秋

しぐれゆく峯のこすゑの色ならで雲は夕日のそむるなりけり

月

初あきのうかりし月の面影もみとせをかけてまためぐりきぬ

秋 風

いつしかの草木のうへはかくもあらし心ぞたへぬ秋のはつ風

草花

秋ぞとて咲きそむる花は見えながらおのが時まつ庭のはぎ原

露

人の世ぞあはれはかなき草の上のつゆはきえても又結びけり

七夕重出

星合は雲のよそにて目の前のわかれを人になげくころかな

早秋重出

思ひかぬるもとのうれへに今よりの秋の心をなほやくはへむ

月

さよもふけ人も静まる時になりて月はひとりぞすみまさりける

月の庭は更けしづまれる秋の夜にきりぎりすひとり鳴き勝るなり

秋

山里のまがきの草もうちしをれ霧にしめれるあけぼののいろ

霧

しばしこそこすゑもそれと眺めつれ霧になりゆくをちの一村

雁

なきてくる雲井のかりの聲すなり霧はれぬまのけさのあさけに

秋夜

草村のくらすまがきのよひの庭に月まつむしの聲しきりなり

鳴

秋風の吹きすぎてゆく末みえて野澤の草にしぎたちぬなり

秋風

たへすなる秋の心を風にうけてふるる草木もなべてかなしき

伏見院御集拾遺

初春のころを新後撰集

春やとき霞やおそきけふもなほ昨日のままの嶺のしら雪

早春霞といふ事をよませ給うける玉葉集

春きぬと思ひなしぬる朝けより空も霞の色になりゆく

初春のころをよませ給うける風雅集

霞たち氷もとけぬあめつちのころも春をおしてうくれば

子日のころを新後撰集

春日野の子の日の松に契りおかむ神にひかれて千代ふべき身は

春の御歌の中に風雅集

夕ぐれの霞のきはに飛ぶ鳥のつばさも春の色にのどけき

伏見院御集拾遺

春の歌あまたよませ給ひける中に早春を風雅

春べとは思ふものから風ませにみ雪ちる日はいと寒けし

早春柳といふ事をよませ給ひける同

春の色は柳のうへに見えそめてかすむものから空ぞ寒けき

春の雪をよませ給うける續千載集

春とだにまだしら雪のふるさは嵐ぞさむきみよし野の山

正月のはじめつかた雨ふる日よませ給うける玉垂集

長閑にもやがてなりゆくけしきかな昨日の日影今日の春雨

梅をよませ給ひける風雅

道のべや竹吹く風の寒けきに春をませたる梅が香ぞする○

五十首の御歌の中に柳を同

いつはとはこころに時はわかなくにをちの柳のはるになるいろ

題しらす新拾遺集

故郷の軒端の梅よいく春の心をそむるつまとなりけむ
うき世にはよしなき梅の匂かな色に心はそめじと思ふに

梅夕薫の心をよませ給うける新後拾遺集

木の間より映る夕日の影ながら袖にぞあまる梅の下かせ

春日永仁五年歌合

暮れがたき春日をながみつくづくとよもの山邊の霞をぞ見る○

竹鶯を續千載集

玉しきのにはのくれ竹いく千代もかはらぬ春の鶯のこゑ

春の御歌金玉歌合

霞むてふ姿はみえず世の色ののどけき空の名にこそありけれ
はなやいかに春日うららに世はなりて山の霞に鳥のこゑこゑ
あかしかぬる寐覺の思つきもせずただ秋の夜のねやの春雨
末たるる柳の絲をつたふ雨のしづくも長き春の日ぐらし

山櫻さかりのうちにつさばやまつは久しきあたら日数を
花をながめ鶯のねをききなしてこと思なき春の日ぐらし
雨をやむ梢にあらき夕あらししづくも花も共におつなり
とまれかし春こそ限ありとても花は日数を定めやはする

海邊春望といふことを集玉葉

かすみゆく波路の舟もほのかなり松浦が沖の春のあけぼの

春の御歌の中に集風雅

あはれにもおのれうけてや霞むらむ誰がなす時の春ならなくに

春雨をよませ給うける集玉葉

山のはも消えていくへの夕霞かすめるはては雨になりぬる

待花といふところを詠ませ給うける同

知られずも心のそこや春になる時なるころと花のまたるる

五十首の御歌の中に同

山櫻この夜のまにや咲きぬらし朝けの霞いろにたなびく

題をさぐりて人人歌つかうまつりけるに春路

といふことを同

道のべやこのもと毎のやすらひに待つらむ花の宿やくれなむ

初見花といへる心をよませ給うける遺集後拾

咲きそむる外山の花の色みえてまどほにかかる嶺のしら雲

みこの宮と申しける時花の歌とてよませ給ひ

ける同

木のもとにながめなれても年ふりぬ春のみやまの花の白雪〇

花の御歌の中に集風雅

枝もなく咲きかさなれる花の色に梢もおもき春のあけぼの

題しらす同

花の上の暮れゆく空にひびききて聲に色あるいりあひの鐘

持明院に移り住ませ給ひて花の木どもあまた
植ゑそへられて三歳ばかりの後花咲きたるを

御覽じて風雅集

植ゑわたす我が世の花も春はへぬまして古木の昔をぞおもふ

花のころ北山に御幸あるべかりけるをとどま

らせ給ひて次の日遣はさせ給ひける同

頼めこし昨日の櫻ふりぬともとはばや明日の雪の木の本

位におましましたし時禁庭花盛久といふ事を人

人仕うまつりしついでに玉葉集

雲の上ここのがさねの宿の春あらしもしらぬ花ぞのとけき

霞間花といふことを詠ませ給うける新後拾遺集

櫻花さけるやいづこみよし野のよし野の山は霞みこめつつ

禁中盛花といへる心を續千載集

さくら花はやさかりなり百敷の大宮人は今かざすらし

題しらす新拾遺集

なれて見し雲居の花も世世ふりて面影かすむ九重のはる

花の御歌の中に新拾遺集

匂へどもそことも知らぬみ山べに花のしるべの風ぞ嬉しき

春風といふことを同

明日やいかに今日のながめもあかぬまの夕の花に風たちぬなり

春曙正安元年
五種歌合年

そことなき花のかをりにかすまれて春もの深きやどの曙

春夕同

あはれをばあすに残さぬくれなれや春つくる日の入相の空

春夜同

つくづくと見ぬ空までもかなしきはひとり聞く夜の軒の春雨

硯の蓋に櫻を入れて入道前太政大臣につかは

されける續集千載

散りまよふ面影をだにおもひやれ尋ねぬ宿の花のしら雪

寄風花といへる心をよませ給うける同

うつろふも心づからの花ならばさそふ嵐をいかが恨みむ

位におましましける時うへのをのことも庭花

盛久といふことを仕うまつりけるついでに新撰集後撰

よそよりも散らぬ日數やかさぬらむ我が九重の宿の櫻は

落花同

嵐ふく木のもとばかり埋れてよそにつもらぬ花のしらゆき

寄花春嘉元三年歌合

猶もこのうきよの色ぞ捨てがたき花のなさけの春になれても

曉庭落花といふことを新撰集後撰

こすゑには花もたまらず庭の面の櫻にうすき有明のかけ

花園院位におはしましたしける時朝親行幸の儀を

御覽せさせおはしましてよませ給うける新撰集千載

春にあふ老木の櫻ふりぬればあまた重なる御幸をぞみる

題しらす同

志賀の浦やよせくる浪も白妙に花吹きおろすひらの山風

春の御歌の中に玉葉集

忘れずよ御階の花の木の間より霞みてふけし雲の上の月

春曉月といへることを續集千載

月影を霞にこめて山の端のまだあけやらぬしののめの空

題しらす新撰集拾遺

われはいさなれも知らじな春の雁かへりあふべき秋の頼は

霞間月をよませ給うける新撰集後撰

伏見院御集拾遺

木のまもる影ともいはじよはの月霞むも同じ心づくしを

題しらす風雅

小夜ふかく月は霞みて水おつる木かげの池に蛙なくなり〇

彌生の末つかた梢あをみ渡りて雨ふりけるを

御覽じて玉葉

春とてや山時鳥なかざらむ青葉の木木のむらさめのやど

雨中三月盡といふことを詠ませ給うける同

飛ぶ鳥のおくりのつばさしをるらし雲路雨なる春の別に

位におましましける時うへのをのことも三首

の歌つかうまつりけるついでに暮春曉月とい

へることを種葉

行く春のなごりをさへはそへしはや月だにあるを有明の頃

暮春のころを風雅

かすみ渡るとほつ山邊の春の暮なにのもよほす哀ともなき

更衣の心をよませ給うける新後

たち更ふる名残や猶ものこるらむ花の香うすきせみの羽衣

四月一日頃雨ふりて花どもの散りみだれける

を御覽じてよませ給うける玉葉

をしやなほ櫻山吹ちりしをれはるなりぬべき今日の景色を

夕卯花を續千

月と見てよるもやこえむ夕ぐれの籬の山にさける卯の花

題しらす新後

人をわく初音ならじを時鳥我れにはなどか猶もつれなき

同續千

頼めおく時とはなしに時鳥ゆふべはわきて猶まさるらむ

三首の歌講せられ侍りし時待郭公玉葉

伏見院御集拾遺

なきぬべき夕暮ごとのあらましに聞かでなれぬる時鳥かな

郭公續千載集

つれなきを月にぞかこつ時鳥まつにむなしき有明のそら

夏の御歌の中に風雅集

時鳥なごりしばしのながめより鳴きつる嶺は雲あけぬなり

三十首の歌人人にめされけるついでに藤葉集

かきくらし雨はふれども時鳥雲ゐにたかきこゑはしをれぬ

夏の御歌金合玉歌

今とまつ夕ぐれごとのあらましにきかでなれぬる時鳥かな

夏の御歌の中に風雅集

月やいづる星の光のかはるかな涼しき風の夕やみのそら

涼みつる數多の宿も静りて夜ふけてしろき道のべの月〇

鳴く聲もたかきこずゑの蟬のはの薄き日影に秋ぞ近づく

名所の三十首の御歌の中に信太杜新拾遺集

夕立の名残久しきしづくかな信太の杜の千枝のしたつゆ

題しらす同

一方に木木の木の葉を吹き返し夕立おくる風ぞすすしき

夏の御歌金合玉歌

くれぬかや思ふながめのさながらに夕さびしき五月雨の空

百首の御歌の中に蓮を玉葉集

こぼれ落つる池の蓮の白露はうき葉の玉とまたなりにけり

三首の歌講せられ侍りしとき納涼を同

ほかにのみ夏をばしるや瀧つせのあたりは秋の村雨のこゑ

六月晦日題をさぐりて人人歌仕うまつりける

ついでに池邊納涼といふころを同

葦の葉に一夜の秋を吹きこして今日より涼し池のゆふ風

うへのをのこども三首の歌つかうまつりける
ついでに照射をよませ給うける新集千載

ともしする端山のほぐし夜もすがらもゆるや鹿の思なるらむ
樹陰夏月といふ事をよませ給うける同

久方の雲のいづくの影ならで木の間わけゆくみじかよの月
題しらす同

まだきより波のしがらみかけてけりみそぎ待つ間の賀茂の川風
夏雨仙洞五十番歌合

緑そふ庭の梢の色清みゆふぐれすすしいけの上のあめ
夏夜乾元二年五月歌合

ふけぬるかくらき砌の水の音に枕涼しきうたたねの床
夏岡永仁五年歌合

夏の日にすすみすらしも旅人のあまた立ちよる岡の松かげ

夏 杜 同

夕立のはれ行く雲のおひ風にまた雨おつるもりのしたかげ

立秋の心をよませ給うける種葉集

秋といへばやがて身にしむけしきかな思ひ入りても風は吹かじを

七夕の心をよませ給ひける新集後撰

秋毎にとだえもあらじ鶺鴒のわたせる橋のながきちぎりは

秋の歌あまたよませ給ひける風雅集

庭の面にゆふべの風は吹きみちて高き薄のすゑぞみだるる

見わたせば裾野の尾花ふきしきて夕暮はげし山おろしの風

萩風を 同

ここにのみあはれやとまる秋風の萩のうへこす夕暮の宿

秋の御歌の中に續千載集

ふく風のうきになしてやかこたまし夕はまさる秋の哀を

秋の御歌歌合玉

なびきかへり花の末よりつゆちりて萩の葉しろし庭の秋風
題しらす集風雅

秋風は遠き草葉をわたるなり夕日の影は野邊はるかにて
庭ふかき柳の枯葉ちりみちて垣ほあれたる秋風のやど
五十番の歌合に秋露をよませ給うける集玉葉
われもかなし草木も心いたむらし秋風ふれて露くだるころ〇

秋の御歌の中に同

山風にもろきひと葉はかつおちて梢秋なる日ぐらしのこゑ
山家秋夕といふことを詠ませ給うける同
みやこ人今とひこなむ獨きく軒端のすぎの秋かせのくれ
田家のこころを集風雅
はるかなる門田のすゑは山たえて稻葉にかかる入日をぞ見る

秋の御歌歌合玉

萩の上尾花が末もしづかにて秋かせみえぬゆふぐれの庭
袖の涙草葉の露の夕まぐれ秋にしをれぬよの色もなし
むかし今ゆくすゑかけて思ひ出でぬ今宵一夜の月の哀に
雲になく雁がねさむし長月やこのは色づくあきかせの暮
染めつくす梢にまじる松の色のひとりさめたる秋の山本
百首の御歌の中に集玉葉

題しらす同

雲たかき夕の空の秋かせにつらものどかに渡るかりがね
秋風のさむくしなれば朝霧の八重山こえて雁もきにけり
題しらす集風雅
むらさめに桐の葉落つる庭の面のゆふべの秋を問ふ人もがな

百首の御歌の中に集風雅

朝ぼらけ霧の晴間のたえだえにいくつら過ぎぬ天つ雁がね

秋の御歌の中に集風雅

打ちむれてあまとぶ雁のつばさまで夕に向ふ色ぞ悲しき

雁を同

つれてとぶ數多のつばさ横ざりて月の下行く夜はの雁がね

暮天雁正應二年三
十番歌合

越路より雲のいくへをわけすぎて都はくれぬあまつかりがね

題しらす新拾
遺集

雁がねは雲居がくれになきて來ぬ萩の下葉のつゆ寒きころ

永仁元年八月十五夜十首の歌の中に秋夕のこ

ころをよませ給うける集藤葉

ものごとに哀すすむる夕暮の秋のけしきにながめわびぬる

おなじ歌の中に秋浦といふことをよませたま

うける同

もしほやくけぶりひとつにたちそひて外よりふかき浦の秋霧

秋の御歌の中に集風

山風も時雨になれる秋の日にころもやうすきをちの旅人

秋の御歌の中に同

にほひしらみ月の近づく山の端の光によわるいなづまの影

いなづまを集玉葉

宵のまの村雲づたひ影見えて山の端めぐる秋のいなづま

秋の御歌の中に同

更け行けば蟲の聲のみ草にみちて分くる人なき秋の夜の野邊

叢端蟲怨といへる心を集後拾

草の原露のよすがに鳴く蟲の怨やなぞとたれに問はまし

秋の御歌の中に新拾
遺集

露ふかきまだ朝あけの草がくれ夜の間の蟲の聲ぞのこれる
故郷の籬の蟲やうらむらむ野への假寐の夜さむなるころ

五十首の御歌の中に夕月集玉葉

まだくれぬ空の光とみるほどにしられで月の影になりける

月夜秋といふことを同

露をみがく淺茅が月はしづかにて蟲の聲のみさ夜ふかき宿

八月十五夜月の十五首の歌人人によませさせ

給ひけるついでに同

更けぬともながむるほどは覺えぬに月より西の空ぞすくなき

曉 月同

明けぬるかわけつる跡に露しろし月のかへさの野邊の道芝

八月十五夜伏見に御幸ありて人人に月の歌よ

ませさせ給ひけるついでに集風雅

軒ちかき松原山のあきかせに夕ぐれきよく月いでにけり

月の十首の歌よませ給うける中に雲間待月と

いふことをよませ給うける新集千載

吹きはらふ嵐も月も待たれけりつらきへだての村雲の空

題しらす同

ほさでこそみるべかりけれ須磨の蟹の鹽たれわぶる袖の月影

月出山といふことを續後拾遺集

雲はらふあらしの空は嶺はれて松のかげなる山の端の月

永仁元年八月十五夜詠五首和歌のうちに月前

風内裏御會

影きよき月も身にしむ色そひぬ夜さむにかはる秋かせのころ

おなじ和歌の中に月前雁同

聞のうちにかたぶく月はさし入りてとをちの空にすぐる雁がね

おなじ和歌の中に月前鹿御内裏

鹿の音よいかかなしき月のすむいづくも秋の野原しの原

月前風といふことをよませ給うける新後拾遺集

むら雲も山の端遠くなり果てて月にのみ吹く峰のまつ風

嵐ふく峰のうき雲さそはれて心もそらにすめるつきかけ

月前露をよませ給うける同

更けぬるか露のやどりも夜寒にて浅茅が月に秋風ぞふく

山路月を同

たれにまた月より外はうれへましなれぬ山路の秋のころを

題しらす同

行く秋の末葉の浅茅露ばかりなほとむるありあけの月

秋の御歌金五歌合

窓しらむ軒端の空はあけそめて枕のうへにきゆる月影

月前露正徳二年三
十番歌合

袖をうすみ露おきとほす心地して月も身にしむ曉のとこ

擣衣驚夢といへるころを續千載集

おどろかす砧のおとにさよ衣かへすほどなきうたたねの夢

二品法親王覺助長月の末に長谷の山莊にまか

りて紅葉の枝を折りて奉りけるにこの一枝の

残りゆかしくこそとて賜はせける風集

色ふかき宿の紅葉の一枝にをりしる人のなさけをぞ見る

古き歌の詞にて歌よませ給ひける時「咲き匂ふ

らむ」といふことを新千載集

今よりや咲き匂ふらむさを鹿の聲きく小野の秋萩のはな

秋の御歌の中に新拾遺集

思へただ空しきはしに雨をおきて明け難きよの秋の心を

秋 雲 永仁五年歌合

うきて渡る夕の秋の村雲につばさをかはす天つかりがね

秋 雨 同

吹きさわぐ萩の上葉の風ませにまばらにおつる秋の村雨

野暮秋 正應二年三番歌合

野邊みればちかくいぬべき秋なれや千草の末も色さめぬらむ

暮秋蟲 風雅集

夕日うすき枯葉の淺茅したすきてそれかとよわき蟲の一聲

秋の御歌 金玉歌合

露ふかきまだあさかげの草がくれ夜のまの蟲の聲ぞのこれる

暮秋菊 千載集 といへるころを

霜ふかくうつろひ行くを秋の色のかざりと見する白菊の花

暮秋のころを 新集後撰

長月の末野の眞葛霜がれてかへらぬ秋をなほうらみつ

題しらす 後撰遺集拾

秋風の音羽の里のもみぢ葉に時雨ふりそふ冬は來にけり

霜さむき難波のあしの冬枯に風もたまらぬこやの八重ぶき

落葉深といふ事を人人によませ給ひけるついでに 風雅集

吹きわくる木の葉の下も木の葉にて庭見せかぬる山おろしの風

題しらす 新集遺集拾

浮きてゆく雲のたよりの村時雨ふるほともなくかつ晴れにけり

冬夕の心をよませ給ひける 風雅集

梢には夕あらし吹きて寒き日の雪げの雲にかりなきわたる

冬庭といふことを 同

おのづから垣根の草もあをむなり霜の下にも春や近づく

蟲聲欲枯といへる心をよませ給ひける新集千
初霜のをかべの眞葛うらみかねおのれかれゆく蟲の聲かな

弘安七年九月九日龜山院にて雛菊露芳といへ
ることを講せられけるに未だみこの宮と申し
ける時奉らせ給ひける同

咲き匂ふ菊のまがきのゆふ風に花の香やどす袖のしら露
冬の御歌金玉

嵐のみこたへぬ枝にふきすぎて木の葉のあとの山ぞ寂しき
雪もふり水も氷るや天地のさむきをうくるこころなるらむ
ふりつものよなよなごとに折れそひて雪にしかる庭の吳竹
うづもるる松の下枝やこれならむ岡べに近き雪のひとむら

題しらす新集千

今朝のあさけ寒きあらちの山おろしに初雪ふりぬ野への淺茅生

五十番の歌合に時雨をよませ給うける玉葉

夕暮の雲とびみだれあれて吹く嵐のうち玉葉に時雨をぞきく

五十番歌合に冬雪といふことを同

山あらしの杉の葉はらふ曙にむらむらなびく雪のしら雲

冬の御歌の中に雪を同

星きよき夜はの薄雪そら晴れて吹きとほす風を梢にぞきく

夕雪風雅

降りつもの色より月のかげになりて夕暮見えぬ庭のしら雪

正應二年十一月二十八日賀茂の臨時の祭の還

立待たせ給ふほど上達部殿上人あまたさぶら
ひて夜もすがら御歌合など有りける朝ぼらけ
雪さへ降りていとおもしろく侍りけるを同じ
五年のおなじ月日臨時の祭にて雪降りて侍り

ければおぼしめし出づる事ありて御硯の蓋に
雪を入れて淨妙寺關白そのころこもりゐて侍
りけるに遣はさせ給ひける風烈

めぐりあふ同じ月日は思ひいづや四年ふりにし雪の明ぼの

永仁五年五節のまゐりの日院の「面影も見る心

地する昔かな今日をとめ子が袖のしら雪」と申

させ給ひける御返し同

忍ぶらし少女が袖のしら雪もふりにし跡のけふのおも影

冬 里永仁五年
歌合

昨日けふ外山の雪げかせあれて寒くしぐるるしがらきの里〇

百首の御歌の中に歳暮玉章

年くるるけふの雪げのうすぐもりあすの霞やさきだちぬらむ

題しらす新集後

見せばやなくだけで思ふ涙ともよもしらたまのかかる袂を

寄弓戀といへるころを同

うき身にはつれなかりける梓弓いかなる方に心ひくらむ

戀のころを同

逢ふことをしらぬ頼みはかひなくて契ばかりに身をやかへてむ

題しらす同

忘れても訪はずもぞなる契りおきし暮ぞと人に驚かさばや
つらかりし心の秋も昔にて我が身に殘るくすのうらかせ

戀の御歌の中に同

逢ふことにかへし命のままならば人のつらさも又は歎かじ

同玉章

人ま求めかくとしもなき玉章を涙ながらぞおしつみぬる
風の音のきこえて過ぐる夕暮にわびつつあれど訪ふ人もなし

待戀のころを玉葉集

契りしを忘れぬ心そこにあれや頼まぬからにけふの久しき
暮しがたきけふのながめの心にてまたぬ幾日をいかで過ぎけむ
さのみやとけふの頼みに思ひなせば昨日のうさを今は嬉しき
今宵とへや後のいく夜はいくたびもよし偽にならばなるとも
雨夜戀といふことをあまたよませ給うける中

に同

夜の雨の音にたぐへる君なれや降りしまされば我が戀まさる
十首の歌合に寄月戀といふことをよませ給う

ける同

終夜こひ泣く袖に月はあれと見し面影はかよひしもこす

寄船戀同

浦がくれ入江にすつるわれ舟のわれぞ碎けて人は戀しき

戀の十首の御歌の中に同

人は知らじ心の底のあはれのみ慰めがたくなりまさるころ

寄夢戀同

あくがるる魂のゆくへよ戀しとも思はぬ夢にいりやかぬらむ

戀のころを同

あぢきなしありへじすべて浮世かな思ふ心に人はかなはず○

題を探りて三百首の歌人人つかうまつりける

に秋戀同

いづくにも秋の寢覺の夜寒ならばこひしき人も誰れか戀しき

戀命といふ事を人人によませ給うけるついで

に同

幾度の命にむかふ歎してうきはてしらぬ世を盡すらむ

五十番歌合に戀夕をよませ給うける同

堪へずならむ身をさへかけて悲しきはつらさを限る今の夕暮

恨戀のころを玉葉集

思ひとる身には今はの恨なるを及ばぬうへの慰めもうし

戀の御歌の中に同

あればある命もさすが限あれや又ひとときはの思そふころ
厭ふとも同じ世ばかり許さなむありてよそにも思ひやるべく
いきて世にありとばかりはきかるとも戀ひ忍ぶとは誰れか傳へむ
なれし世の名残もさすがありけむと忍ばれそめし頃も戀しき

絶戀の心を同

こぼれ落ちし人の涙をかきやりて我れも絞りし夜はぞ忘れぬ

百首の御歌の中に同

涙こぼれ心みだれていはれぬに恨のそこぞいとどくるしき

寄面影戀といふころをよませ給うける同

人の見する面影ならばいかばかり我が身にそふも嬉しからまし

戀の御歌の中に續千載集

せめてただ偽とだに思はばや頼めてふくるよはのつらさを

寄水戀といふことを續後拾遺集

いかにせむむすばぬさきに山河のくみて知らるる淺き契を

戀の御歌の中に同

あふことも知らぬたのみのはかなきはくらせる宵の夢の通路

寄關戀同

逢坂やたがため通ふ關路とて我が身よそなる名を留むらむ

題しらす同

あだにのみ移るはやすき月草のいろこそ人の心なりけれ

戀の歌あまたよませ給ひける中に風雅集

思ひ取り恨みはててもかひぞなき頼むれば又待たれのみして

とはすなる今よりかくや隔て行かむ今宵ばかりはさて飽かずとも
涙だに思ふが程はこぼれぬよあまりくだくるいまの心に
思ひ思ひ涙とまでになりぬるをあさくも人の慰むるかな
戀しさになりたつ中のながめには面影ならぬ草も木もなし

題しらす風集

かはりゆく昨日のあはれ今日の恨ひとに心のさだめなの世や

戀海といふことを同

伊勢の海なぎさに拾ふたまたまも袖ほすまなき物をこそ思へ

戀の御歌の中に同

それをだに思ひさまさじ戀しさのすすむまなる夕暮の空
思ふ人こよひの月をいかに見るやつねにしもあらぬ色に悲しき
鳥の行くゆふべの空よその夜には我れもいそぎし方はさだめき
猶も世にあるやとかくる人傳ようき身のうきを更に知れとや

面影のとまる名残よそれだにも人の許せる形見ならぬを
思ひくたすうさも哀もいくかへり世はあらぬ世の身はもとの身に

題しらす同

いとどこそ頼みどころもなくならめ憂きにはしばし思ひ定めじ
この暮にわが戀ひをれば寒き雁なきつつ行くは妹がりが行く
うきことをいかでなべてに思ひなさむ嬉しくとても幾程のよに

戀命を同

厭ふしもかこち顔にや思ひなさむつれなしとだにかけし命を

恨戀のころを同

思ひ連ねさもうかりけると思ふ後にまた戀しきぞ理もなき
ためしなくつらき限やこのきはと思ひし上の憂きもありけり

題しらす新集千載

かかりける報ぞつらき逢ふことのなきを契に思ひなしても

せめてただ消えぬとだにも知らせばや下の思にくゆる煙を
たちまがふ方こそなけれ富士のねやたえぬ思にくゆる煙は

初戀の心をよませ給ひける新千載集

知られじなよその浦路をこぐ船のほの見し浪を袖にかくとは

人人題を探りて歌つかうまつりける時長短と

いふことをよませ給うける同

あぢきなく一夜の夢の契ゆるさめぬ思の世をやつくさむ

寄橋戀同

面影は見しをかざりのとだえにて逢ふ夜空しき夢のうき橋

戀の歌とてよませ給うける同

つらしとも恨みしまでの夕暮は思ひよわらぬ昔なりけり

寄布戀といふことをよませ給うける新千載集

世とともに胸あひがたき我が戀のたぐひもつらきけふの細布

戀の御歌の中に同

おのづから又逢ふ契ありとてもなれしながらの世には返らじ

題しらす同

うかるべき身をしるうへの戀しさは何にか暫し思ひしづめむ

寄草戀を新千載集

色かはる心の秋の葛かづら恨をかけてつゆぞこぼるる

「人を恨みむ」といふ言葉をよませ給うける同

つらしとて人を恨みむことわりのなきにうき身の程ぞしらるる

寄涙待戀正應二年三

頼む下の心やよわるまつほどもやや過ぎぬがに涙そぼふる

寄夢絶戀同

おのづから思はぬ夢に入りくとも面影たえてたどりもやすらむ

戀形見正安元年

伏見院御集拾遺

夕暮の空を形見とむかへどもこひしき人のおもかげもなし

絶 戀 乾元二年
五月歌合

うきにたへてあれども人の許しがほにこひて聞かれむ身さへ耻し

寄月戀 嘉元三年
歌合

うらめしくつれなの月や泣きうれへ戀ひかこてども同じ影なる

寄夢戀 拾遺風體
和歌集

うつつにも思ひ合はせむ折はいつぞその夜の夢に見えし面影

戀の御歌 金王
歌合

いひがたみ心にくたすいく思こゑより人に知るみちもがな
忍妻まつとしすればあやにくに寝ぬ人しげみさよぞ更けゆく○
明けぬなりこりねや心さしもこそ待たじと千度思ひつるよを○
待ちわぶるその久しさの程よりはまだよひすぎぬ月ぞ嬉しき
あまりいかげ遠ざかる方になりやせむとしばし頼めば又ぞ悲しき

思ふとて思ひもせばのあらましにはかなやそれに哀そひぬる○
たえずなるげにそのきはの身とまでもさすがしらでや人のつれなき
明日しらぬうき世ばかりを歎かばや命をきはの中とさだめて
うきうらみ戀しきあはれいづかたにまさる思と心をぞ見る
しばしただうくとも人にしたがはで恨みのきける我れぞ悔しき
よしや人いかにもうかれそれによりて更にとかくは思はれぬ物を
變らじと頼むきはまで許しける我がはかなさぞいひてかひなき
永仁元年八月十五夜詠五首和歌の中に月前待

戀 御内裏
會裏

待ちわたるその久しさのほどよりはまだよひすぎぬ月ぞ嬉しき

おなじ和歌の中に月前恨戀 同

戀ひうらみうれへつくしてながむるにつれなの月の同じ光や

雜の御歌の中に風 玉葉
集

ひびきくる松のうれより吹きおちて草に聲やむ山の下かせ
題を探りて人人歌つかうまつりけるに關とい

ふことをよませ給ひける集風雅

逢坂やあかつきかけて鳴くとり集風雅の聲しろくなるせきの杉村

夕鐘を同

鐘のねをひとつ嵐にふきこめて夕暮しをるのきのまつかせ
並びたつ松のおもてはしづかにて嵐のおくに鐘ひびくなり
山の端のながめにあたる夕ぐれに聞かできこゆる入相の音

夕松といふことを同

いましもは嵐にまさる哀かな音せぬ松のゆふぐれのやま

庭松といふことを集玉葉

夕ぐれの松に吹きたつ山風に軒端くもらぬむらさめの空

松風を同

ぬるるか立ちやすらへば松蔭や風の聞かする雨にぞありける

六帖の題にて人人に歌よませさせ給ひけるつ

いでに山里集風雅

つくろはぬ岩木を庭の姿にてやどめづらしき山のおくかな

山家夕といふことを同

山かけや近き入相の聲くれてそとももの谷にしづむしらくも

山家の御歌の中に同

遠方の山は夕日のかげ晴れて軒端のくもは雨おとすなりり

山家鳥同

山陰や竹のあなたに入日おちて林のとり集風雅のこゑぞあらそふ

幽徑苔を集後拾

いかにして思ひいりけむ山深み跡なき庭の苔のかよひ路

旅の御歌の中に集新拾

松が根のあらしの枕ゆめ絶えて寐覺の山に月ぞかたぶく

羈中野といふことをよませ給ひける新拾遺集

露ふかき野邊の小笹のかり枕臥しなれぬ夜は夢も結ばす

萬葉集の詞にて詠ませ給うける御歌の中に「た

づ渡る見ゆ」といふことを新集千載

海原やおきこぎくれば夕潮の干潟の浦にたづわたるみゆの

題を探りて千首の歌人人によませさせ給ひけ

るついでに旅のころを玉葉集

足引の山松がねをまくらにてさぬる今宵は家ししのぼるの

雨中旅といふことをよませ給うける同

とまるべき方やいづこにありま山宿なき野邊の夕ぐれの雨

旅泊の心を同

舵まくら一夜ならぶる友船もあすのとまりやおのがうらうら

海 旅同

たちかへる月日やいつをまつら船ゆくへも波の千重に隔てて

名所の三十首の歌よませ給うける中に吹飯浦同

なくなかも雲居をこひて年ふりぬわが世ふけひの浦の友鶴

曉のころを同

月のいる枕の山は明けそめて軒端をわたるあかつきの雲

長き夜も早あけ方や近からしねざめの窓に月ぞめぐれる

題を探りて人人に歌よませさせ給ひけるに雨

中燈といふことを同

雨のおとの聞ゆる窓はさよふけてぬれぬにしめる燈火の影

雑 鐘永仁五年歌合

大方のゆふべにこもる世の色のあはれに匂ふいりあひの鐘

寄雲雜嘉元三年歌合

うきてふる身のはかなさも悲しきはただめのまへの夕暮の雲

雑の御歌 歌金玉
合五

こえてこそ幾重の峯としられけれ見しはなべてのよその山の端
やむまじき雨のけしきになるならし近き尾上も雲にきえゆく
遠近の夕日の山の色くれてすそ野をわたるうき雲のかげ
かざりいふ言葉の上はまよへどもはつれて人の心をぞ見る
なさけをも知る人なみの藻鹽草かきおくあとの數のみぞそふ

夜路といふことを 玉葉
集

更けぬるか過ぎゆく宿もしづまりて月の夜道にあふ人もなし

雑の御歌の中に 同

白雲はゆふべの山におりみだれなかば消えゆく峯の杉むら

題しらす 同

さ夜ふけて宿もる犬の聲たかし村しづかなる月のをちかた

一 溪雲鳥といふことを 同

雲鳥もかへるゆふべの山かせにそとももの谷のかげぞ暮れぬる

題を探りて人人歌つかうまつりしついでに鷺

を 同

田面より山もとさして行く鷺のちかしとみれば遙にぞとぶ

鷺 風雅
集 を

山もとの田面よりたつ白鷺の行くかた見れば森のひとむら

雑の御歌の中に 同

寺深き寐覺の山は明けもせで雨夜のかねの聲ぞしめれる
夜の雨に心はなりて思ひやる千里の寐覺ここに悲しも
浦かせは湊のあしに吹きしをり夕暮しろき波のうへの雨
愁なく樂もなしわがこころいとなまぬ世はあるに任せて

「待つとし聞かば」といふ詞をよませ給ひけるに 新千
載集

都人まつとし聞かばことづてよひとりいなばの峯のあらしに

うへのをのことも題をさぐりて歌つかうまつ

りけるついでに本末といへる事をよませ給う

ける新千載集

迷ひそめし心の末にひかれ來て本の悟にかへりかねぬる

月の十五首の歌人人によませさせ給ひけるに

雑月を風雅集

あはれさても何のすさびのながめしてわが世の月の影ふけぬらむ

五十首の御歌の中に夏草同

夏草のことしげき世にみだされて心の末は道もとほらす

寄花述懐のころを同

時すぎしふる木の櫻今は世に待つべき花の春もたのます

春の述懐のころを同

花鳥のなさけはうへのすさびにて心のうちの春ぞものうき

伏見にて人人題を探りて歌つかうまつりける

ついでに水郷同

伏見山あらたのおもの末晴れて霞まぬしもぞ春のゆふぐれ

題しらす遺後拾遺集

袖ぬらす涙に似たる時雨こそわが身世にふるたぐひなりけれ

寄船述懐を同

浮き沈み世をうみ渡るあま舟の行末しらぬ身にこそありけれ

述懐の御歌の中に玉葉集

いたづらに安きわが身ぞ耻しきくるしむ民のころ思へばり

寄海述懐の心をよませ給うける同

いせの海の蜚のうけ繩うけがたきこの身を又は沈めずもがな

雑の御歌の中に同

何しかも思ひみだるる露ふかき野べのをがやのただ假の世を

懐舊のころを玉葉集

なさけある昔の人は哀にてみぬわが友とおもはるるかな
惜むべく悲ぶべきは世の中に過ぎてまたこぬ月日なりけり〇

夢をよませ給うける同

夢はただぬる夜のうちの現にてさめぬる後の名にこそありけれ

文を題にてよませ給うける同

なさけみせて残せる文の玉のこゑ主をとどむる物にぞありける
する墨の色しみえすば水莖のながれての世の跡をとめめや

百首の御歌の中に風雅集

深く染めし心のはひ捨てかねぬまどひの前の色とみながら

題しらす同

天つ空照る日の下にありながら曇るころの隈をもためや〇

同新千載集

世を救ふ心のうちのなほざりに民の愁をなすぞかなしき〇

同新千載集

神やしる世の爲とてぞ身をも思ふ身の爲にして世をば祈らす〇

月前祝新後撰集

幾千世もかくこそは見めすむ月の影もくもらぬ秋の行末

寄國祝といふことをよませ給うける玉葉集

世世たえずつぎて久しく榮えなむ豊葦原のくにやすくして〇

東二條院七十ちにみたせ給ひける時よませ給

うける新後撰集

祝ひそむる今日をや千代の始とて契る齡の末ぞはるけき

圓光院入道前關白弘安八年四月さらに太政大

臣になりて侍りける時藤の花につけて遣はさ

れける續千載集

時すぎて更に花さく藤浪のたち榮えゆく今日にもあるかな

正應二年關白の詔かうぶりて五月五日藥玉に

そへて「いつか」と待ちし菖蒲も今よりぞ君が

千年をかけて仕へむ」と奏しける御返し同

あやめ草ひきくらべても仕ふべきためしは長き世にや残らむ

弘安八年三月從一位貞子に九十の賀給はせけ

るに「いまだみこの宮と申しける時よませ給ひ

ける新千載集

限なきよはひは「いまだ九十ぢなほ千代とほき春にもあるかな

永福門院入内のをり聞えさせ給ひける新千載集

雲の上に千代をめぐらむ始とてけふの日影もかくや久しき

神祇のころを新千載集

石清水にごらじとおもふわが心人こそしらね神はうくらむ

冬神祇といへることをよませ給ひける新千載集

天の戸のあけし昔をうつし來て神代にかへす朝倉のころ〇

河月といへる心を續千載集

五十鈴川たえぬ流の底きよみ神代かはらす澄めるつきかけ

釋教の御歌の中に玉葉集

さめぬまの迷のうちの心にて夢うつつとも何かわくべき

二月十五日涅槃の心をよませ給うける同

けふはこれなかばの春の夕霞きえし煙のなごりとや見む

龜山院かくれさせ給うてのち昭訓門院御ぐし

おろさせ給ひける時入道前太政大臣のもとに

遣はされける續千載集

今日かはる袖の色にも露きえじあはれや更におきどころなき

御讓位の日おまへの萩のわづかに咲きそめた
るを折らせ給ひて大納言三位里に侍りけるに
つかはさせ給ひける玉葉集

咲きやらぬ籬の萩の露をおきてわれぞうつろふ百しきの秋

花園院くらゐにおましましたしける時十月ばかり
持明院殿へ行幸あるべかりける前の日紅葉を
箱の蓋に入れて奉らせ給うける新拾遺集

色そへむ行幸をぞ待つもみち葉もふりぬる宿の庭のけしきに

竹林院入道左大臣いまだ右大將に侍りけるこ
ろ御製をあまたあそばしてたまはせける奥に同
かきとむるこの水莖の變らずばなからむあとの形見とも見よ

位におましましたしける時大納言三位きぬをぬぎ
置きて局へおりにけるが夕立のもりていたく

ぬれて侍りければ唐衣の袖におしつけて給は
せける玉葉集

包みける思やなにぞ唐衣よにもるまでの袖のしづくは
位の御時蓮華王院寶藏よりあしたづといふ筆
を出されて年久しくおかせ給へりけるに正安
三年の夏の頃法皇へ奉らせ給ふとて思召しつ
づけさせ給ひける同

雲居より年へて馴れし葦たづの歸るわかれに音をぞそへつる
遊義門院かくれさせ給ひてのち後深草院の御
忌日に法華堂へ御幸ありてよませ給うける同
こぞまではわけこし友も露と消えて獨しをるる深草の野邊

たまづさと申すしやうの琴後深草院に侍りけ
るを後には永福門院へ奉らせ給ふべきよし申

しおかせ給ひければかくれさせ給ひてのち御
忌などはててかの御琴を奉らせ給ふとて玉葉集

玉章のその玉の緒のたえしより今は形見のねにぞなかるる

龜山院うせさせ給ひにしころ去年の秋後深草

院うせさせ給ひしを又程なくあはれなる御こ

となど女房の中へ申しおくり侍るとて二年の

秋のあはれは深草や嵯峨野の露もまたきえぬ

なり」と前大納言爲兼が奉りける御返し同

まだほさぬこそこの袂の秋かけて消えそふ露もよそにやは思ふ

後深草院かくれさせ給うけるころ深草へ御幸

侍りけるに霧の深く立ちて侍りければ新集千載

消えはてし煙の末の面影もたちそふ霧のふかくさのやま

後深草院の御事おぼしめし出でて七月十六日

かぞふれば十年あまりの秋なれど面影ちかき月ぞかなしき
月のあかかりけるに詠ませ給うける新集拾遺

後深草院隠れたまひての又の年の春遊義門院

梅の花を折りて奉らせ給ふとて「故郷の軒端に

匂ふ花だにも物うき色に咲きすさびつつ」とよ

みて聞えあげける御返し風雅集

花はなほ春をも分くや時しらぬ身のみものうき頃のながめを

後深草院かくれ給ひて又の年の二月ばかり雨

降りけるに覺助法親王のもとにたまはせける同

露けさは昨日のままの涙にて秋をかけたるそでのほるさめ

秋の初つかた近くさぶらひたる人のみまかり

ければ同

彦星のあふてふ秋はうたてわれ人に別るる時にぞありける

後深草院七月にかくれ給ひての又の年の九月

龜山院うせ給ひにければ集風雅

消えつづきおくれぬ秋のあはれしらば先だつ昔の下や露けき

遊義門院かくれ給ひにける秋雁の鳴くを聞か

せ給ひて同

後れてもかついつまでと身をぞ思ふつらにわかるる秋の雁がね

室町院かくれ給ひて後持明院に御幸ありて紅

葉を御覽じてよませ給ひける同

心とめしかたみの色も哀なり人はふりにし宿のもみち葉

後深草院かくれ給ひての年神無月の初つ方圓

光院入道前關白のもとより文を奉るとて冬に

も程なくなりぬる事に思ひ咎めらるるよし申

して侍りけるを御返事のついでに同

おもへただ露の秋よりしをれ來て時雨にかかるそでの涙を

後深草院かくれ給ひての次の年の秋よませ給

ひける同

あだし色に心はそめじ山風におつる紅葉のほどもなき世に

位おりさせ給ひて後五節のころ去年をおぼし

いでてその折の關白兼忠に櫛を遣はし給ふと

て録増

少女子がさすや小櫛のそのかみを共になれにし時ぞ忘れぬ

正和二年九月の暮つかた賀茂に御籠らせ給ひ

けるころ同

長月や木の葉もいまだつれなきにしぐれぬ袖の色やかはらむ
わが身こそあらずなるとも秋のくれをしむ心はいつもかはらじ

伏見天皇中宮鐙子御歌

みねの雪谷の氷もとけなくに都のかたはかすみたなびく

早春霞といふことを玉葉集

題しらす

水

鶯ははや來なけどもみ雪ふる空には春のおそくもあるかな

餘寒のころを風雅集

朝嵐はそとの竹に吹きあれて山の霞も春さむきころ

春の御歌

水福門院
御自歌合

春とだに思ひもあへぬけさの朝け山の霞ははやたちにけり
外山には霞たなびくむべしこそ野澤の雪も下消えにけれ
猶さゆる夜はの雪げのうすぐもり晴れゆく月もまた霞みぬる

伏見天皇中宮御歌

窓の梅のかをりなつかし朝あけにねやながらきく鶯のこゑ

題しらす集水

雪ちりて朝風さむき道のべの柳のいろははるめきにけり〇

梅を集風雅

山本の里のつづきに咲く梅のひとへに世こそ春になりぬれ

春の御歌水福門院
御自歌合

あくがるる心ながらやさそはれむ梅さく軒の春の夕かせ

遠近の霞の色はふかけれど岸のやなぎぞ淺みどりなる

霞みわたりのどけき暮に河ぎしのやなぎ一本春風ぞふく

さえかへる嵐をさむみ足引の山のさくらも咲きやかねぬる

嘉元元年伏見院の三十首の歌の中に新拾遺集

時しもあれ嶺の霞はたなびけど猶山さむし雪のむらぎえ

春の御歌の中に集玉葉

猶さゆるあらしは雪をふきませて夕ぐれ寒き春雨のそら

遠近の山はさくらの花ざかり野べは霞にうぐひすのこゑ

過ぎうつる時と風とぞ恨めしき花の心は散らむともせじ〇

百首の御歌の中に同

峯の霞ふもとの草のうすみどり野山をかけて春めきにけり〇

題しらす集風雅

何となく庭の梢は霞みふけているかた晴るる山のはの月

春の御歌の中に同

何となき草の花さく野べの春雲にひばりの聲ものどけき〇

散りうける山の岩根の藤つつじ色にながるる谷川の水〇

春の御歌水福門院
御自歌合

遠近のうぐひすの音ものどかにて花のさきそふ宿の夕ぐれ

一木づつづぎて咲かなむ我が宿の花は見るほど久しかるべき

伏見天皇中宮御歌

春ごとにかはらぬ物か梅の匂さくらが色にうつるころは
 峯の霞ふもとの花に鳥のこゑ野山のはるはゆふべなりけり
 夕暮のかすみにつつむ山本の花とけぶりの里のむらむら
 夕づく日軒端の影はうつり消えて花の上にぞしばし残れる
 ながめやる霞のをちのはるの暮やなぎ櫻のいろぞこもれる
 枝かはす柳が末はなびけども盛の花はかせもよきけり
 吹きはらふ山の嵐のはげしきにおつる櫻はのどけかりけり
 散るとなみ花おちすさぶ夕暮の風ゆるき日のきさらぎの空
 あひ思はでうたて散りゆく花にしも何あちきなく心そむらむ
 あやにくに吹きたつ風のつらき哉あすまでよもの今日の櫻に
 残なく散らして庭の花の雪えだにをかへせ春のゆふかせ
 峯つづきくれて吹きたつ山風にさかぬ野べまで花ぞちりしく
 流れやらぬ花のしら浪たちかへり春をとどむる山川の水

明けがたき秋の寐覺もかくやありし草の庵のよはの春雨
 何となく寐覺の袂しほりわびおしあくる空もよはの春雨

夕花を集風雅

花の上にしほし移ろふ夕づく日入るともなしに影きえにけり

花の御歌の中に同

瀧つせや岩もと白くよる花は流るとすれどまたかへるなり

曆應二年の春花につけて西園寺より花園院に

奉らせ給うける新集拾遺

咲きちるも知る人もなき宿の花いつの春まで行幸まちけむ

花の御歌の中に集玉葉

木木の心花ちかからし昨日今日世はうすぐもり春雨のふる

折花といふ心を同

折りかざす道ゆき人のけしきにて世はみな花の盛をぞしる

曙花を玉葉集

山本の鳥の聲よりあけそめて花もむらむら色ぞ見えゆく
題しらす同

入相の聲する山のかげくれて花の木のままに月いでにけり
曆應二年の春花につけてたてまつらせ給ひけ

風雅集

時しらぬ宿の軒端の花ざかり君だにとへなまたたれをかはる〇

歸雁のころを續千載集

歸るさの道もやまよふ夕暮のかすむ雲居にきゆるかりがね

春の御歌永福門院御自歌合

入りがたの月影かすむ山のはに歸る雁さへほのかなる聲
この頃よ井手のわたりもかくやらむ山吹さきて蛙鳴くなり
うちいづる浪さへ色にうつろひぬ井手の川せの山吹のころ

行く春をしたひかねてぞ聞ゆなる青葉のなかの鶯のこゑ
岩がくれ咲けるつつじの人しれず残れる春の色もめづらし

夏の御歌の中に玉葉集

うすみどりまじるあふちの花みれば面影にたつ春の藤なみ

月前時鳥といふことを同

ほととぎす空に聲して卯の花の垣根もしろく月ぞいでぬる

夏の御歌永福門院御自歌合

神まつるうづきになれや榊葉にみしめはへたるあけの玉垣
卯の花の垣根の月のうす雲に山ほととぎす一こゑぞなく
月雪の色にぞまがふ卯の花の垣根つづきのたそがれの宿
早苗なびく外面の小田のむらさめに山時鳥こゑおとすなり〇
檜の葉にむらさめかかる山陰のくるる雲まにほととぎす鳴く

題しらす續千載集

伏見天皇中宮御歌

ほととぎす聲もたかねの横雲になきすててゆく曙のそら
かけしげき木の下闇のくらき夜に水の音して水鶏なくなり〇
三十首の御歌の中に夏鳥といふことを
集風雅

夏の御歌水福門合院
御自歌

小山田の早苗の色はすすしくて岡べこぐらき杉のひとむら
山本のけぶりの色も消えはてぬ遠里むらのさみだれの頃
五月雨のふるやの軒の絲水のくる人もなき暮ぞさびしき
五月雨のはるる雲間のよひの月軒のあまりの影ぞすくなき
夕立の雲も残らず空はれてすだれをのぼる宵のつきかけ
短夜はさし入る月の影をこめて枕の山ははやあけにけり
雨はるる梢の青葉いろそひて吹きたつ風は露はらふなり
なく蟬のこゑさへ涼し吹く風にむらさめまじる山の夕陰
旅人のあまた立ちよる夕木蔭山川きよみすすみ涼しも

夜の雨に竹の葉末はなびき伏して朝けの窓の風の涼しさ〇
夏ふかき草のしげみのしげくのみ思ふ思は道もとほらす
谷ふかき庵の軒のまつのかせ秋よりさきに秋をきくかな

中宮と申しける時五月五日菖蒲の根にそへて

遊義門院に奉られける新集後
集

かけて見よ君に心の深き江にひけるかひなきうきねなれども

題しらす集現
集

風の音もすすしくそよぐ吳竹のふしうきよはの月の影かな

同集水

吹く風もこよひは涼しみそぎする河瀬の波に秋やさきだつ

秋の御歌水福門合院
御自歌

いつしかと聞くに心ぞ愁ひそむる萩の上わたる秋の初風
何もなくかはるとなしの色さびて松も檜原も秋は見えけり

伏見天皇中宮御歌

彦星のあふ夜をちかく思ふより我れさへ空にながめをぞする
天の川年のわたりを待つよりも今日のくるるは猶や久しき
秋草の花のひもとくころしもあれ吹きな結びそ野べの夕風
宮城野やちぐさの上の秋の風なびくぞ花のすがたなりける
おきて見る朝けのまがき露しげし小萩がすゑの花になる頃
出でそむる尾花も萩も色ぞこきつゆの籬のけさのあけぼの

秋の御歌風雅

真萩ちる庭の秋風身にしみて夕日の影ぞかべにきえゆく
夕づく日岩根の苔に影きえて岡の柳はあきかせぞふく
風後草花といふことをよませ給うける玉葉
しをりつる風は籬にしづまりて小萩が上に雨そそぐなり

西園寺にてよませたまひける秋の御歌のうち
に同

尾花のみ庭になびきて秋風のひびきは峯のこすゑにぞきく

秋の御歌の中に同

うす霧のはるる朝けの庭みれば草にあまれる秋のしらつゆ
夕ぐれの庭すさまじき秋風に桐の葉おちてむらさめぞふる

秋の御歌本編門院
御自歌合

更くる夜の月と蟲とは何なれや光もこゑもひとつにぞすむ
道のべや垣根の蟲も聲ふけて月より外にゆく人もなし
庭しろく月もいでぬる宵のまの草の葉がくれきりぎりすなく
蟲の聲つゆの光もさよふけて霧にしめれる野べのつきかけ
聞かじ見じ影そふころの月の色にねざめ秋なる萩の上風
秋の夜の月は心にすみけるを雲るにのみと何思ひけむ
雨風は暮にやみぬる大空の雲まにはやきよはのつきかけ
秋風のひびきは峯にさよふけて影とほくなる入がたの月

伏見天皇中宮御歌

このまより月はたえだえ庭にもりて軒端にさわぐよはの松風
月にみかく露の光も清くしてよなよな涼し竹のあきかせ
よひすぎて月まだおそき山のはの雲にひかれる秋の稻妻
はるばるとわたるや雁の聲とほし雲に色ある西の山の端

雨中雁 玉葉集

秋の雨の物さむくふる夕ぐれの空にしをれて渡るかりがね

秋夜雨 同

ふりまさる雨夜の闇のきりぎりすたえだえになる聲も悲しき

題しらす 續千載集

うちむれて麓をくだる山人の行くさきくるる野べの夕霧の

秋夕を 玉葉集

風にきき雲にながむる夕暮の秋のうれへぞたえすなりゆく

秋の御歌の中に 新拾遺集

村雨のはるる夕日の影もりて木の下きよき露のいろかな

月の三十首の御歌の中に 玉葉集

空きよく月さしのぼる山の端にとまりて消ゆる雲の一むら

月の五十首の御歌の中に 同

秋風は軒端の松をしをる夜に月は雲居をのどかにぞゆく

中宮きさきに立ち侍りて西園寺におはしまし

けるころ行幸など侍りけるに八月十五夜月面

白かりければ中宮の御方へよみて奉らせ給う

ける 續千載集

こよひしもくもるの月の光そふ秋のみ山をおもひこそやれ

月の歌として 續後拾遺集

更けゆけば真木のを山に霧はれて月影きよし宇治の川波

月前蟲といふことを 風雅集

きりぎりす聲はいづくぞ草もなき白洲の庭のあきのよの月

題しらす風雅

村雲にかくれあらはれ行く月のはれも曇もあきぞ悲しき
吹きしをる風にしぐるる吳竹のふしながら見る庭の月影

秋の御歌の中に同

さすとなき日影は軒にうつろひて木の葉にかかる庭の村雨

三十首の御歌の中に秋山を同

山陰や夜の間のきりのしめりよりまだおちやまぬ木木の下露

秋朝のころを同

薄霧の朝けの梢色さびて蟲のねのこすもりのしたぐさ

題しらす風雅

草の末に花こそ見えね雲風も野分に似たるゆふぐれの雨
むら雀聲する竹にうつる日の影こそ秋のいろになりぬれ

同新千載集

露しげき草葉の上はしづかにてしたには蟲の聲ぞみだるる
秋霧のむらむらはるるたえ間よりぬれて色こき山のみぢば

秋の歌の中に同

色かはる山の下しばふみわけてしぐるる暮に鹿もなくなり

初雁のころを風雅

八重霧のたつ山本のはるばると田のものにおつる秋の雁がね

連夜擗衣を同

遠里の賤がさごろも秋風のさむき夜ごろを重ねてぞうつ

秋の御歌水福門合院

末高き籬の花はかたぶきて露おちつづくあめのゆふぐれ
何となく寐覺の袖もうるほひぬ明けやらぬ窓の秋の夜の雨
露しげき草の上より明けそめて霧の山べぞしばし夜ふかき

伏見天皇中宮御歌

秋風のこすゑをはらふ夕暮の雲にはづるる三日月のかけ
 その色とささぬ夕の悲しきは尾花がかせに薄ぐもの空
 さまざまにうき世を思ふ夕ぐれのそでと草葉といづれ露けき
 おしなべて紅葉ばちかくなりにつり夕日の山の秋の夕ぐれ
 しぐれつつ秋すさまじき岡のべの尾花にまじる櫛のひと本
 うちははらふ袖にも秋ぞすさまじき露霜かかる山の下みち
 嵐ふく岡べの秋はさむくして柞の紅葉ちりそめぬなり〇
 何となき山の木の葉はおちすさびしぐるる暮の秋ぞ悲しき
 とめがたき日数の秋をおもふよの月だに空を急がざらなむ
 色のこる花のまがきはまだ秋をはや霜しろしけさの朝明
 伏見院の三十首の歌の中に新拾遺集
 いづしかと冬をや告ぐる初時雨にはの木水福門院
御自歌台の葉に音づれてゆく

冬の御歌

浮雲は軒端の峯をこえかかりしばししぐれてまた過ぎぬなり
 枯れておつる木の葉の上にかかればや時雨の音ももろく聞ゆる
 さやかなる光もぬれて見ゆるかな時雨ののちの庭の月かけ
 もみち葉をさそひておろす山風にいふ木の錦庭にしくらむ
 ひとはらひはげしくおろす夕暮の嵐のすゑを木の葉にぞみる〇

題しらす風雅

もろくなる桐の枯葉は庭におちて嵐にまじるむら雨の音
 月の姿なほありあけの村雲にひとそそぎする時雨をぞ見る
 むらむらに小松まじれる冬枯の野べすさまじき夕暮の雨
 あれぬ日の夕の空はのどかにて柳の末も春ちかく見ゆ

冬雨を同

寒き雨は枯野の原にふりしめて山松風のおとだにもせず

冬雲を玉葉

伏見天皇中宮御歌

風の音のはげしく渡る梢よりむら雲さむき三日月のそら

題しらす玉葉集

河千鳥月夜をさむみいねすあれやねざむることに聲の聞ゆる〇〇

冬の御歌の中に同

月影は森のこすゑにかたぶきてうす雪白しありあけの庭

題しらす新集後撰

おのづから氷りのこれる程ばかりたえだえに行く山川の水

百番歌合に山雪を風雅集

鳥の聲松の嵐のおともせず山しづかなるゆきのゆふぐれ

題しらす新千載集

とけやらぬ池のみぎはの朝氷こほれるほどにつもる雪かな

伏見院の三十首の歌の中に新集古

笛竹のそのよは神も思ひいづや庭火の空にふけし夜の空

冬の御歌本編門合

朝日さす野原のをざさ霜きえて露としもなき光をぞみる
山本はまだ霧くらき曙のすそのは霜の色にしらめる
窓たたく嵐にさやぐ吳竹のよごとに雪をあすやとぞ待つ
村鳥の羽音してたつ朝明のみぎはのあしも雪ふりにけり
雪の色にややしらみゆく山のはの梢にきゆるありあけの月
朝戸あけの軒端に近く聞ゆなる梢のからす雪ふかきこゑ
宵のまま雪はひとへの色ながら薄雲はれて月ぞさやけき
雲はるる月は梢にふけすぎて積りもそはぬよはのうす雪
遠近の里のわたりぞしづかなるかよひたえたる雪のゆふ暮
浦風や雪のしら浪吹きはれてしばし霞める遠しまのまつ
とちわたる氷のひまをゆきなやみ常よりほそき山川の水
降る雪にしられぬ程に交る雨のくれゆく軒に音をたてぬる

伏見天皇中宮御歌

くもる夜の庭はむらむら霞にてまがきの竹は風はらふなり
天少女そでふる夜はの風寒み月を雲井におもひやるかな
あれぬ日のゆふべの空はのどかにて柳のすゑも春ちかく見ゆ

寄川戀 集玉重

涙川うきなばかりを流しても身はうたかたのまづや消えなむ
不言出戀のころを同

言はじ唯しらはさすがに思ひなすなぐさめにこそかかる頼を
待戀のころを同

おとせぬがうれしき折もありけるよ頼み定めて後の夕ぐれ
戀歌とて同

頼めねば人やはうきと思ひなせど今宵もつひに又明けにけり
題しらす同

常よりも哀なりつる名残しもつらき方さへ今日はそひぬる

今朝の名残はれぬ夕のながめより今宵もさてや思ひ明かさむ
思ひけるかさすが哀にと思ふよりうきに増りて涙ぞおつる
つらきをば更にもいはす人心あはれなるにも物をこそ思へ

寄雨戀を同

常よりも涙かきくらす折しもあれ草木をみるも雨のゆふ暮○

寄書戀をよませ給うける同

玉章にただひと筆とむかへども思ふところをとどめかねぬる

戀の歌の中に同

鳥の聲さへづりつくす春日影くらしがたみに物をこそ思へ
人やかはる我が心にや頼みまさるはかなき事も唯常にうき
弱りはつる今はの際の思にはうさも哀になるにぞありける

三十首の歌めされし時恨戀を同

かくばかりうきが上だに哀なる哀なりせばいかがあらまし

題しらす續千

いつまでかゆくへ定めぬ浮雲のうきてたちるに物を思はむ
同じ世を頼む方にはあらねどもなれし名残ぞ忘れかねぬる

後朝の戀のこころを同

別れてもまだ夜は深き鳥の音をひとり名残の床にきくかな

遇不逢戀を續後拾

かくばかりうきになりける契しもなどか哀と思ひそめけむ

戀の御歌風雅

さても我が思ふ思よ遂にいかにかひなきながめのみして
今日はもし人もや我れを思ひ出づる我れも常より人の戀しき
あやしくも心の中ぞみだれ行く物思ふ身とはなさじと思ふに
思ふ方に聞きし人まのひと言よさてもいかにといふ道もなし
嬉しとも一かたにやはながめらるるまつ夜に向ふ夕暮の空

暮れにけり天とぶ雲のゆききにも今宵いかにと傳へてしがな
頼めすてとはぬはさこそやすくとも待つ心をば思ひやらなむ
とはぬ哉とふべき物をいかにあれば昨日も今日も待たず來ぬらむ
馴るるまのあはれに遂にひかれ來て厭ひ難くぞ今はなりぬる
習あらばげにもしやとも頼ままし偽としも見えぬことの葉
大方の世は安げなし人はうし我が身いづくにしばし置かまし
たちかへりこれも夢にて又絶えはありしにまさる物や思はむ
厭ひをしみ我れのみ身をば憂ふれど戀ふなる果を知る人もなし
さまさまの我がなぐさめも事つきて今はと弱る程ぞ悲しき
遂にさても恨の中に過ぎにしを思ひいづるぞ思ひでもなき
よそなりし其の夜に人は歸れども身は改めぬ物をこそ思へ
題しらす同

とにかくに晴れぬ思にむきそめて憂きよりさきに物の悲しき

このくれの心もしらで徒によそにもあるか我が思ふひと
思ふ方によし唯すべて押しこめてさのみは人の心をば見じ
憂きも契つらきもちぎりよしさらば皆哀にや思ひなさまし
大方は頼むべくしもなき人の憂からぬにこそ思ひわびぬれ
晴れずのみ心に物を思ふまに萩の花さくあきも來にけり
すべて唯人になれじとこりぬるもいつの爲ぞと哀なる哉
今は早と思ひしことも幾へだて隔つるはては言の葉もなし
猶しばし此のひとふしは恨みはてじなじかと思ふ情もぞ見る
さらばとて恨をやめて見る中のうきつまづまに頼みかねぬる
見る人も物を思はぬ様なれば心のうちを誰れにうれへむ
人の捨てし哀をひとり身にとめて歎き残れるはてぞ久しき
忍待戀のこころを集風雅
包む中のかさねて聞かぬ契こそまつものからに頼みがたけれ

楨の戸を風のならすもあぢきなし人知れぬ夜のやや更くる程

歴夜待戀と云ふことを

我れも人もあはれつれなき夜な夜なに頼めも止まず待ちも弱らす

待空戀といふことを

いひし儘の今宵たがはぬ今宵にて又明日ならば嬉しからまし

待戀の心を

何となくこよひさへこそ待たれけれ逢はぬ昨日の心ならひに

戀曉といふことを

きぬぎぬを急ぐ別は夜ふかくてまた寢久しきあかつきの床

後朝戀を

その儘の夢の名残のさめぬまに又同じくは逢ひ見てしがな

寄雲戀

今しもあれ人のながめもかからじを消ゆるも惜しき雲の一村

五十番歌合に漸變戀を風雅集

かはりたつ人の心の色やなに恨みむとすればその節となき

觸物催戀といふ事を同

月のよは雲のゆふべも皆悲しその夜は逢はぬ時しなければ

絶戀の心を同

常よりも哀なりしを限にて此の世ながらはげにきてぞかし

戀の歌の中に新千載集

むすびけむ契はしらす下紐の解けてくやしき歎をやせむ

厭はるる身をあき風の吹きしより草葉の露ぞおくかたもなき

題しらす新拾遺集

人心あさきにまさる思川うきせにきえぬみづからもうし

同水鏡集

松が根のあらはれてこそいはすとも碎くる浪の心をばしれ

待戀といふことを水鏡集

思ひなれし我が心こそ哀なれたのまぬものを夕ぐれの空

戀の歌の中に同

思ひしる一節をだにみせかぬる心よわさぞ我れながらうき

戀の御歌水鏡門院
御自歌合

つつむかた人目もつねに忘るるを世にもぞもることよせもなし
この暮につつむ涙はとどめかねぬおさふる袖の下とほるまで
逢ふことはなぎさによするしき波の頻にぬる袖をみせばや
いつまでも命をかけて待つべきにながらへ難くなるぞ悲しき
蘆間わくる湊の小舟とにかくに障りやすさをこりす待つ哉
いつとしも頼めぬ暮の玉章に解けぬにおとるつらさこそそへ
またやもしと頼む心の今日さへよけさ別れきと思ふ物から
空しくは思ひはつべき今宵ともしらでや人のただあかすらむ

つひに今宵こすしもならむ後にこそつらき人とは思ひはてなめ
後をと頼まぬ中のたまさかに逢ふよは時のうつらすもがな
たまさかに逢ふは一夜の時のまにういも恨もいかにほるけむ
馴れしかたの哀ばかりは捨てずとも又逢ひ見ずば何にかはせむ
思ひ過すその折折の心をもいつあひみてかかかりしもせむ
つつみ暮す涙をゆるす時にして月をさだかに見るよはぞなき
涙にもあまりて人のつらき夜はなぐさめにみし月さへもうし
よはの残り契りがたやの疑にまだ深しともえこそいはれね
有りしよりも哀はそひて見しよりもうさは増るに思ひかねぬる
宵宵のゆめのゆくへのあやしさを我が思寝か人のころか
思ふてふことのはなくば今更に人の心にまよはざらまし
おのづからおなじ月をばながむとも思ふ思の我れにしも似じ
人戀ふる心はつねにあくがれてふるとばかりの世にはいつまで

うれしかりし昨日の暮の契こそ今日はずらさの數になりけれ
かけて待ちし月日を何に歎きけむ後またのまぬ歸るさの道
おなじ世を頼むかたにはあらねども馴れし名残を忘れかねぬる
かはさずば夜ごろかさなる唐衣かへすがへすも身をぞ恨むる
そのをりを限るとは猶思はぬをいかなるふしにいつ變りけむ
日數とは哀いつまでかぞへけむいく年月の中のへだてを
こひやまぬ身はことわりにかへれども忘るる人のうさは許さず
かぎりぞと命をかけてかこても厭ふ人には其のかひもなし
憂きはてをつれなやありてとばかりに向ふ夕ぞたえず悲しき
契りけり待ちけりあはれその時のことは残る水莖のあと
うかりしも哀なりしもあらぬ世の今になりては皆ぞ戀しき

曉のころを

玉葉集

さとざとの鳥の初音はきこゆれとまだ月たかき曉のそら

夜のころを玉葉

くらしき夜の山松かせはさわけども梢の空に星ぞのどけき〇
夜雨を同

明しかね窓くらしき夜の雨のおとに寝覺の心いくしをれわつ〇
山中雨といへることを同

山風のふきわたるかと聞くほどに檜原に雨のかかるなりけり
雑の御歌の中に同

みるままに山はきえゆく雨雲のかかりもしける横のひと本
心うつるなさけいづれとわきかねぬ花郭公月ゆきるとき

百首の御歌の中に同
さ夜ふかき軒ばの峯に月は入りて暗き檜原に嵐をぞきく

雑の御歌の中に風雅
かくしてぞ昨日もくれし山の端の入日のあとに鐘の聲聲

沈みはてぬ入日は浪の上にして汐干にきよきいその松原
雲を同

山あひにおりしづまれる白雲のしばしと見れば早きえにけり
題しらす續千載集

旅ごろもたつより袖はなみだにてむすぶ枕も野邊のゆふ露
くれはつるあらしの底にこたふなり宿とふ山の入相のかね
始なく迷ひそめける長き夜の夢をこのたびいかでさまさむ
天をとめ袖ふる夜半の風さむみ月を雲居におもひやるかな

伏見院三十首の歌の中に新集
ともし火の影とともにぞ消えぬべきこよひもさてや曉の床

題しらす新集千載
おのづから人も訪ひこぬ故郷は月も我が身もすむかひぞなき
山里の軒端に近き椎柴のしひてうき世にいつまでかへむ

伏見院の三十首の歌の中に新集拾遺

さやかなる月さへ疎くなりぬべし涙のほかにみるよなければ

題しらす集永

聞きわびぬねざめの窓はよふかくて檣の戸くらき曉の雨

懐舊の心をよませ給うける新集千載

來しかたを忍ぶ涙の玉くしげふたたび逢はぬ時ぞかなしき

同じころを集玉葉

すぎて行く月日をかへす物にあらば戀しき方を又も見てまし

釋教のころを同

かりそめに心の宿となれる身もあるもの顔になに思ふらむ〇

題しらす新集後撰

天の下をさまりぬらし三笠山あまねくあふぐ神のめぐみに

同集玉葉

物ごとにうれへにもるる色もなしすべて憂世をあきの夕暮

前大僧正道意曆應三年秋のころ攝津國神呪な

と云ふ山寺に籠り居侍りけるによみて遣はし

ける新集千載

數數にかたみ枯れぬる一つ松いつまでとてか朽ち残るらむ

たまづさと申すしやうの琴後深草院に侍りけ

るを後には永福門院へ奉らせ給ふべきよし申

しおかせ給ひければかくれさせ給ひてのち御

忌などはててかの御琴を奉らせ給ふとて「玉章

のその玉の緒のたえしより今は形見のねにぞ

なかるる」と伏見院のよませ給ひける御返し集玉葉

いにしへをかくる涙の玉づさのかたみの聲にねをぞそへぬる

後伏見院御ぐしおろさせ給ひて秋の初つ方「秋

伏見天皇中宮御歌

を待たで思ひたちにし苦衣今より露をいかで
ほさまししとよみて奉らせ給ひける御返し集風雅

思ひやる苦の衣の露かけてもとのなみだの袖や朽ちなむ

内侍都の外に住み侍りけるに御心地例ならざ

りける頃遣はされける同

忘れぬ昔語もおしこめてつひにさてやのそれぞ悲しき

後深草院の御服奉るとて集玉葉

思はざりしふちの袂の秋の露かかる契のあはれをぞしる

雑の御歌永福門院
御自歌合

山松の梢の空のしらむままにかべに消えゆく闇の月かけ

ひびきつる松の嵐の音もせず月さしのぼるゆふぐれの山

月も入り鐘も聲やむあけぐれの空しづかなる星の影かな

里とほく八聲の鳥はおとづれて月すみきよき有明のそら

月にははや遠島かげに傾きぬしばしとどめよ須磨のせきもり

大空の月よ何とて常ならむさしもすみうき此の世と思ふに

山川のただひとすちの流こそあまたの瀧におちわかれけれ〇

峰ふかき嵐のおとと聞くほどに谷の松にぞ吹きおろしぬる

谷川の底のひびきに通ふなり高きこすゑのまつかせの音

濡れまさる草葉の色にしられけりそそぐも見えぬ夕暮の雨

おく山の檜原が上に雨おちて雲ゐる谷にとりかへるなり〇

夕暮の山ぎは清く雨はれて雲おりかかる杉のむらだち

たちみだれ風にうきゆく雨雲になかば色こきゆふぐれの山〇

風たちてむらむらわたる雨雲のはる方より星いでにけり

別れゆく雲の絶間のみえてしも更にふりそふ夕ぐれの雨〇

折しもあれ遠里けぶり絶えはてて夕のながめ哀そふらむ

うちむれて麓にくだる山人のゆくさき暮るる野べのゆふ霧

竹の編戸かこふともなき柴の垣ものはかなげの賤が家居や○
山水のながれをみても住む人のころの塵をすすげとぞ思ふ
流れての末をも何か頼むべき飛鳥の川のアすしらぬよに
日にそへて都の空ぞ隔てまさる昨日の宿はけふのふるさと
心をも何かとどめむ露の命しばしおくまのかりのやどりに○
昔とは遠きをのみは何かいはむ近き昨日もけふはむかしを○
人のうへのはかなき事をきくにしも身は行末のよよのかねごと
目の前に見聞きし人のなき數をかぞへかぞへて我れもいつまで○
日にそへてうきふししげみ吳竹の世にへがたくもなりまさる哉
手すさびにつけおく墨も行末はたれかあはれとみづ莖の跡

竹向實俊が「雪ふりてさむきあしたにふみよめ
とせめらるるこそかなしうはあれ」とよみける
をきかせたまひておびき

ふみそむる和歌のこしちの鳥の跡になほもたえせぬ末ぞ見えける○

雪のあした實俊のもとへつかはされける同

さかゆべき宿のあるじのいくとせか絶えぬみゆきのあとを見るべき
けぬが上に降りつむ雪のなさけにも宿のあるじを待つと知らずや

鎌倉の二位康永の初の年卯月ばかりにかりの

子を十づつあまた重ねて藤につけて奉りける

に敷きたるその薄様に書かせたまへる同

鳥の子を十づつ十のかすよりも思ふ思はまさりこそせめ

後伏見院御製集

^正 平安三年春よみ侍りし歌の中に春草

われのみぞ時うしなへる山かげや垣根の草もはるにあへども

おなじころ春雨を

つくづくとながめてぞふる今はただ身をいたづらの宿の春雨

春天象

山さむきくものゆきげのうすぐもり春の心やうすみどりなる
きさらぎやかすめる空の春のかげうちちる花の下ものどけき

三月盡

明日よりは春てふ名こそかはりなめ憂身は時もあらためなくに
別れゆく春もその世や思ひつるなさけのうちををしみこしころ

早春

鳥のこゑ草木のこころおしなべて春にやはらぐ時はきにけり

若菜

はればまづ行きてをつまむ春日野や若菜もよほすけふの春雨

苗代

春雨のうるほひうけてこの頃は水ゆたかなる小田のなはしろ

霞

山かすむ春のゆふべのつくづくとすこしのどけき眺をぞする

この春は身をいたづらのながめゆゑ常より霞む空ぞのどけき

梅

梅よこれまづ春つぐる花にありてしかも匂のたぐひすくなき

花

咲きぬべき梢の花もあはれなりうき身のほかの春とながめて

春雨

春雨やこよひの空はくれぬともわが物思ははるべくもなし

庭春雨

春雨のふるきみどりの庭の苔かはらぬ色もときはわきけり

見花

人こそあれ春はつねなる花のいろを何かあだなる物としも見む

霞

思へどもわけ見ぬはるの霞のみまたへだてぬる春日野のはら

遠柳

ふりしむる雨のゆふべは静にてかすみのすゑに柳ひとむら

春雨

時にあふなべて草木のいろはあれど我が身ひとつのよその春雨

閑中花

今は我が身をいたづらのながめには軒のさくらの色も物うし

惜花

風誘ふやよひの花にながめてもうつる日數ぞとむるかたなき

名所鶯

咲きやらぬ花をまつとや吉野山かすみを出でぬ春のうぐひす

門柳

雨をもる柳のみどりすゑたれて門しづかなるはるのゆふぐれ

月前瀧

月影にみがきておつる瀧の上のみふねの山は雲もかからず

月前舟

秋の夜のなみしづかなる池の上はこぎ行く舟に月ぞしたがふ

月前田家

よそにして見るさへさびしともしなき田づらの庵の秋の月よは

月前神祇

秋の月てらすとならば五十鈴川きよきこころの底をかがみよ

秋風

秋かせは心のうちになかなくになどか我が身のかなしがるらむ

秋木

夕日残る梢の色の秋のくれうかぶなみだもそのこととなき

秋心

おしなべてありしにもあらぬながめして秋の心ぞ獨ものうき

秋神祇

神路山あふぐこころの行末をくもらすてらせあきのつきかげ

暮秋木

秋かせのさむきをかべの柳かげよわる夕日の色もたまらず

寄風暮秋

吹きまよふ嵐の木の葉いづかたに誘はれて行く秋とかも見む
寄夜暮秋

今日くれてこよひの時もまたふけぬあくるまつ間の秋ぞ程なき
待月

月はなほまだ峯ふかきはひのまの山かけくらしき松かせのおと
惜月

ふけまさるわがよの程ぞあはれなる傾く月のかげを見るにも
秋色

ふもとには薄霧たちてあささむき時雨のあとの山ぞいろづく
秋聲

夜さむなる月のねざめのをちかたにきぬた響きてさを鹿の聲
黄

かげよわき淺茅が上の夕づく日野原の秋はいろさびにけり

窓月

いましものねざめの時を知るならしまどにあだなる明方の月

旅月

草枕露ふかき野邊の夜半の袖にこと問ふ月もともにしをれて

懷舊月

月のみやはじめなき世の昔より今にかはらぬおなじおもかけ

九月

秋きぬとながめし庭に草かれて菊の花咲くころもきにけり

秋

吹き過ぐるなべて千種の秋かせも尾花がうへぞなごりさびしき

閑山月夜

鹿のこゑ松のかせさへ音やみぬふけすみまさる月のよのやま

野花秋深

野邊みれば夕日のかげも花のいろも物さびしかる秋のくれ方

月かたぶきぬ調萬葉

ねざめする窓より西の空きよみかりがね過ぎて月かたぶきぬ。

冬歌中に

御本ノママふりすこそなほ忍ばるれもしきや見しはむかしの雪の曙

夕あらし竹吹きはらひ寒き日のくるるこよひは雪降らむかも。

野邊寒きをさがが原のあさぼらけまだ霜はらふ旅びともなし

浦風に千鳥鳴くなるいそ枕なみをかたく夜半のうきねに

たまもひくをとめの姿代代へてもおもかけ近き雲の上のつき

千鳥

友千鳥むれて鳴くなるこゑ高みゆふたつ波のあらいそべに

冬歌中に

代代ふりてなほぞ忘れぬ九重にみしやをとめの袖のしらゆき

雪や降る霜やおくらし冬の夜のふくればうすきねやの衣手

歳暮歌中に

心にはむかはぬはるやむかひつる年くれはつるよもの氣色ぞ

冬歌中に

くちなしの木の葉をしける庭の面にさすや入日の影もわかれず

冬歌

霜白きかりたのあせをわたるうしの數多つれゆく冬のあさあけ

さきだちて誰れか山路を尋ねけむ駒のあとある野邊のしらゆき

冬山曉

さえひびくみやまあらしにみがかれて梢にさむき有明のつき

冬野夕

枯れたてる色もすがたもかすかなる尾花が上のふゆの夕ぐれ

冬日

雪げにやあれくもる空の雲間よりもるる日影もはやかたぶきぬ

冬 煙

立ちすさむ煙のすゑもさだかにて雪にまちかきをちの山もと

冬 枕

夢さむる浮寐の舟のよるのとこまくらのなみに千鳥たつなり

除夜述志

とめがたく過ぎゆくままの月日とて今年もけふにまたぞくれぬる
白雪のふりぬるとしの今日ことにつもるなさけはなほぞかはらぬ

寄火戀

なには女のたくやあし火の夜とともにこがれぞ渡る君に戀ふとて

戀

つらからぬ我が身とや思ふうきふしも唯さながらにくたしすぐすを
思ふてふなべてなさけのいつしにかはる誠をいかで知らせむ

なにのあはれなさけも知らぬ世をみるにましてさこそその行末もうし

悔 戀

かはらじと頼むきはまでゆるしけり我がはかなさぞいひてかひなき

絶 戀

思ひくらす世はさまさまの名残とてうさも哀も身にぞとまれる

寄月戀

恨みかこち戀ひしをられて大空の月もうれへの色にしむなり○

曉 戀

よなよなはあくるをきはに待ちくらす限はいつも曉のかね

寄月戀

しばしこそ月のあはれになすとてもさのみの涙人やとがめむ

寄月稀戀

さそひける月のなさけのこよひなくば妹がよがれをなほ重ねまし

寄月契戀

こののちにまち見む契よしや今はのこる御本ノマの月のよはもいく程

夜戀

時やいつ心のうちはまだよひのしばしの床もとりの音ぞする

戀

せかれつづなみだとまではまだおちで心にむせぶ程ぞくるしき
さすがなほありふるうちの契しもくやしきことの數ぞ添ひゆく
うつるかたの人よさしも深からじ頼まれはつるあはれまでには
ぬしやあらぬ昔にかはることのはのあとのみ同じ人のたまづさ
恨みつなしばしのうさぞ身をもしりし餘りてつらき人の氣色に
かはりこしうさも昔になりはててもとのあはれに又かへりけり

旅泊

かぢ枕一夜ならぶるとも舟もあすのとまりはおのがうらうら

懷舊

いつしかの昔となるもあはれなりわかれば近き日數なれども

雜

けちがたき幾世のつみにひかれてかほのぼの宿をいでがてにする

鐘

をちかたにひびきそめぬと聞く御本ノマほちかき入相も聲そひぬらし

雜地儀

いにしへの風はへだつる和歌の浦にたちみだれゆく波の音哉

雜雜物

言の葉をとどむるふでのあとにはありと情を知りて誰れしかも見む

雨夜思

何をうれへ何を聞くとともになかりけりただ雨の夜になれる思は

夜山

峯近み軒端もわかすくらき夜のやまのひびきは松かせならし〇
身心

世にむけて身をばさすがにおくとすれど心ぞ人に遠ざかりゆく〇
夕山

木蔭には清水ながれてゆふ山やこすゑをきけば風ぞすすしき
夕浦

浪の上はそことも見えすくれはてて浦浦しるきあまのいさり火の
硯

昔こふるなみだもあまる思ふことは硯の水のかきもやられす
衣

われのみぞ涙はたえぬ藤衣ひとはたもとの露もほせども
夢中述懐

むば玉の夢こそあはれなき人をこの世ながらに又もみせけれ

田家

眺めやる門田の末に山はれて夕日のこれるをちのまつばら〇
故郷

水のながれやどの木立も物ふりて住みなす人のなさけをぞ知る

春

をち方の霞になびく青柳のいとこそはるに世はなりにけれ
花

夜の雨今日のかせにや櫻花なべてあまねく咲きすすむらむ
持明院にて

花はまだ咲きととのほぬ梢ながら春をさかりの頃の宿かな
軒ちかき八重の櫻のこすゑしもこと木にすすむ情をぞ見る
持明院にうつりる侍りしころ

かげしげき軒端のこすゑ色くれてみやこともなき風の音かな
 雨のくれ入相のこゑもしづめるは眺のすゑにくもやかさなる
 宿しめて今こそさらにすみそむれふりにしあとのにはの池水
 夏ふかきみぎはの木立ものふりて池にのぞめるかげぞ涼しき
 みどりなる木の下しばに露見えて夕のあめのいろぞすすしき
 ふりすすむ夕の池の雨のうちに鳴くやかはづの聲ぞそひゆく
 春

昨日今日春とや空の霞むらむ物思ふ身はときもしらぬを
 歳中立春

年をこめて春はきぬなり今やはも世もやはらげる時にしなるらむ
 勤

陌上暮煙籠柳眼

庭前春雨發花唇

參籠石清水之時當座十首

早春

この春は氷とともに石清水神のこころもまづとけぬらむ
 霞

立ちかへりふるとせわけぬやはた山霞隔てし峯のかよひ路
 鶯

おのが時いたれる春のしるしとてはとの峯にも鶯ぞなく
 春雪

神垣やつぎてふりぬるあとなれば春のみゆきもよよを重ねぬ
 梅

なつかしき神のみ垣のあたりしもかをりことなる梅が香ぞする
 花

たのもしな神の恵のかれぬゆゑにみやまの花もかくぞひらくる

述 懷

世をまもる神の心をかへりみておろかにたらぬ身をぞ恐るる〇

釋 教

ひとたびのうたてまどひの心よりへだてぬ奥にさはりをぞなす

神 祇

そのかたちその草木までまたくして神の心はなほさかりなり〇

祝

跡たれて神のてらせる日の本の國のかためはひさにつきせじ

春 歌

早春雨

宮内省
歌合

草木みな春のころをうけぬらし時なる雨のふりしうるへば

春 木

時にあひて咲くにしあれば柳櫻いろそふ色は春にぞありける

春 草

草青きはるのまがきの夕ぐれに梢もしらぬはなぞちりくる

春 里

山吹の花咲くころになりぬれば井手の里こそおもひやられるれ

春 情

かくしこそ年のいくよをすぐとしも覚えぬ春にまたながめしつ

夕 花

風の音花のかをりもひとつにてのどかにひびくいりあひの鐘〇

霞

遠方や霞のいろのくれそひてながめのすゑは山もわかれず
とほやまの明けはなれゆくしののめに麓にしづむ霞をぞみる

柳

谷ごしのむかひの岸の川柳こすゑぞなみのそこにひたれる
伏見にて

伏見山かすむ田の面になくたづの聲のどかなる春の日ぐらし
今しもあれたのもの暮のさびしきに野飼の牛の歸るをぞ見る
鶯

うぐひすのまだ春若き初ごゑに花かすみまでいろにこもれる
花

いとまあある春をのどけみ百敷やさくらかざしし昔をぞ思ふ
立春

ゆきかへるまたあらたまの春きぬと思ふにやがて立つ霞かな
春

いくかすみ立つきしかたを思ひこめぬ彌生の空のはるに眺めて
春月

月影も花のこすゑにかをりあひてなべておぼろの春のおほ空
春朝

咲きまさる夜の間の花の朝ぼらけ今日のさかりを誰れに見せまし
春野

二月のはるけき野邊の朝ぼらけかすめる末はいつくともなし
春水

面影ぞその世の春にかはりぬる花ちりしきし庭のいけみづ
鶯

うぐひすのまづ鳴く今朝の初聲に春をきかするはじめなりけり
霞

睦月よりやよひの末の空までの春にわたるはかすみなりけり
暮春

さかりなる軒の一木のおそざくらこれのみ春の色ぞのこれる

花に見しこすゑのさかり過ぎはてて庭に春あるつつじ山吹
 春とほきなごりにたててむかふうちは皆その色の哀をぞなす
 ちるとすれど時ある花はまたも咲かむ我が身ぞしらぬ春は悲しき
 すぐとなく彌生もなかばいたづらまたこの春もくれむとすなり○

霞

見るままにとやまの峯のきえゆくは霞の深くなるにやあるらむ

花

春の時となりぬと思へばまだ咲かぬ花も心にかかるなりけり
 昨日今日はなや咲くらむ吉野山かかれる雲のいろにみえゆく
 咲きやすると待ちつつあれば櫻ばなけさ降る雨に綻びにけり
 立ちこむる雲もかすみも花の色のひとつ匂になれるあけぼの
 あけ白む外山の雲のほのと花になりゆくかをりをぞ見る
 よしやただ軒の一木のさくら花外のこすゑにこころうつさじ

たぐひなき花のにはひに大方のはるさへ時のなさけとぞなる
 ながめこし雲井の櫻としふりてわが身ものうき春ぞへにける
 あとしたひいかで惜まむ山櫻ちるをならひのはるのくれがた
 春はなほ日數もあるをさくら花うたてのこりの色もとどめぬ

春

睦月たつけさ初春の朝がすみはせものどけきそらのいろかな

遅櫻

風にもるる青葉がくれのおそざくら残るとなしの色ぞさびしき

欸冬

春深き青葉の庭のゆふかげに木のしたてれるやまぶきのいろ○

藤

岸たかき梢にかかる藤なみはみなぞこふかく色ぞうつろふ

春夕

夕ぐれや山邊のどかに霞む日のこすゑにとほきうぐひすの聲
かすみくもりいりぬと見つる夕日影花の上にぞしばしうつろふ
ながめつる夕の空のいろくれて音をのこせるのきのはるさめ

古木花稀

ふりにける幾世の春をしたふらむ朽木に咲けるはなのひと房

早春霞

春にこそ世はなりぬらめ時わかぬながめの空もまた霞むなり

雪中鶯

雪さむきかきほの竹のうへにしも春ときこゆるうぐひすの聲

春衣

春風は衣手とほし身にしみて雪ちるそらはかすむともなし

山花

二月やはな咲く山をわきてこそ霞もはるのいろに立ちけれ

暮春有懐

うき世にはとまらじとする色ならばをしむをあだに花や思はむ

別朋

のどかにて明日とも物をたのまめや作日の人も今日は別れぬ

思歸

和田の原かへる波にもことづてむ都こひしみわれしをれぬと

村

有明の月はこすゑにかたぶきて鳥鳴きつづくさとのひとむら〇

山

三笠山あふぐ春日もくもりなきこころの底はてらし見るらむ

榮枯

時過ぎしふる木の櫻いまは世に待つべき花の春もたのます

南北

梅の花おなじ一木も枝をわけて咲きちる色のことにぞありける

早春

けふしふるはつ春雨にうるほひて花も早くや咲かむとすらむ

春雨

水の面のあやおる今朝のはるさめに花の錦もほころびやせむ
春雨のふるき柳の淺みどりわづかにときのいろぞみえける
つくづくとのどけき宿の雨のうち人こそみえね春はくれども
花とりも見えず聞えぬ雨のうちのながめの春に物ぞわびしき

春

梅が枝よまづ咲くだにもなさけあるにならぶ花なき匂なるらむ
静なる宿のながめの友なれやしづくおちそふのきのはるさめ
夕ぐれは目に見ぬ雨のふりそひてみどり色そふにはの若ぐさ
霞たち鶯なきてよのいろもはるめきわたるころにもあるかな

春日

くれがたき春日をながみつくづくと四方の山べの霞むをぞみる

高低

ねにかへりくもにいてふ花鳥の名残もいまのはるのくれ方

五色を四季にわたして當座によみ侍りしに

青春

常よりも庭の柳のあさみどりぬれて色そふはるさめのそら

黄春

ちりはてし櫻にかはる山吹はあらぬいろこそなさけなりけれ

赤春

時にあふやよひの園の桃のはな今日折りえたる色に咲くなり

白春

思ふかなわれもながめの春ふりぬ花はましてのやどの昔を

黒 春

つれてわたる霞の空の夕がらす凄きながめは今にぞありける

暮 春 雨

花はしをれ青葉は色のまさるかな彌生のすゑの雨の日ぐらし

暮 春

春深き池のみぎはの草のなかにおのれさかりと見ゆる山ぶき
おのれ咲く花もあれどもなべて世は青葉ぞ時の色になりぬる

遠 樹

雨になるながめの末に消えはてぬ霞のしたの木木のひとむら

霞

霞のみいつもかはらぬ色にあれや草木は春のすゑも見ゆるを

秋 歌

原 初 秋

秋にあくるあしたの原の風の音にやがてや露もこぼれ初むらむ

浦 初 秋

難波がた蘆のいくよもまだへぬに秋立ちぬとや風のすすしき

早 秋 月

秋にむかふ月をし見ればわが思いろそひゆかむ時ぞかなしき

秋 歌 中 に

山風にもろき一葉はかつおちて梢あきなるひぐらしのこゑ
ひぐらしの聲する山の夕かげに木の葉きほひて秋風ぞ吹く
秋風にせみ鳴く山のゆふづく日そめぬこすゑの色も寂しき

關 月

さよふかき不破の關屋の軒まよりあれたる月ぞ都はるけき

秋野

この秋や神のこころの末とみむまだわけそめぬ春日野のはら

江月

秋風は入江のあしにおとづれて夜ふけてしろき波の上のつき

秋

わけいらむあさぢが庭のあとやいづく蟲の音ならぬ通路もなし

きく

あはれげにうつり行きける日數かな菊咲くころの秋も近づく

秋

時しありて秋になりゆく世の色に心のそのうれへぞつよき〇

見し友もわが身もかはるあらぬ世をもとの哀は月のみやしる
うれへかねただ大空のながめして又秋かせにあふぞかなしき

月のてり蟲のうらむる秋よたれ見ず聞かぬよのある事もがな

誘はるる月のしるべにへだてはてしよその雲井に心をぞやる

長月やきく咲くころをながめてもなほ九重のあきぞさびしき

朝ざりのしめりに花のいろ添ひてまがき露なる秋のしのめ

昨日今日梢もたへずそめぞゆくいろにもよほす秋のしぐれに

山居

山ひびく松かせひとり聲すみてややしづかなる庭のつきかげ

しぐれゆくこずゑの色の秋のくれそめぬ心ぞそでにつれなき

對月言志

月影のうかりし秋もわすられずあはれ三年のあきのこのころ

おもひなす千里のほかほとほけれど一つながめの月ぞけ近き

見しものを雲の上人ともなひてみ垣のつきのあきのよなよな

秋歌中に

うづら鳴きくれば行く野邊の秋風に夕日のをばな末ぞかけろふ
むさし野や尾花吹き分くる秋風に袖みえてゆく遠のたびびと
百くさの錦をしける野邊なればはたおる蟲はむべも鳴きけり

稻妻

おそく出づる月のしるべか宵の間の山の端ひかる稻妻のかけ
よひの間の村雲づたひかけみえて山の端めぐる秋のいなづま
にほひ白み月のちかづく山の端のひかりによわる稻妻のかけ

秋露

われもかなし草木も心いたむらし秋かせふれて露くだるころ〇
草木みな露をふくめりわれひとり秋につれなき袖ならめやは
千種みだれ花のいろいろちりしをれ野分の風の跡ぞ荒れたる
亂れあふちぐさの末は露にふしてまだよる近きあけぼのの庭
秋といへば草木つゆけみ吹く風の身にしむ時は物ぞかなしき

あきの日のうへにくだれる色みれば心もよわく物ぞかなしき
秋の夜のねざめの窓やふけぬらむすだれをのぼる有明の月
秋はこれもろきあはれの時にあれや草木の露も人のなみだも
百敷のうちに住みこしそのかみの友とはいまもあきのつき影
あきはぎの下葉枯れゆく庭みればものすさまじく心さびしき
しぐれつつ霧さへ晴れぬ山陰のこすゑの色は今朝ぞ染むらむ

秋衣

夕されば衣手とほし秋風のさむくし吹くにこころかなしも〇

秋山

霧たちてしぐるる頃のあさなあさな山の紅葉ぞいろまさりゆく

秋空

秋風に雲たなびきてあかつきの清きみ空につきてりまさる〇

秋水

岩ふるる水おと清くひびきつつながれにやどる月ぞ更けぬる

秋

月のいろ蟲のうらみも憂そふさかりの秋にあふぞかなしき

秋山居

雫とも雨ともわかずやま陰や霧ふかきやどのあきのしののめ
枯れてかはる本草の上のそれならで染めぬ夕日も色ぞ秋なる
枯れわたる野邊の尾花のすゑ寒み風すさまじき秋のくれがた

露

いづくよりむすびかおけば夕暮の草はかならず露のみゆらむ

九月

脚本缺字
□ □

都にはたえてもきかぬあはれかな寐覺のよるのさを鹿のこゑ

紅葉

秋深みしぐるる山の朝な朝なこすゑの色ぞそめまさりゆく

秋

おきて見る朝けのまがき露しげみすがた清けきはなのいろいろ
秋はただいりたつままの氣色よりなさけおく脚本ノマふか山陰のやど

九月盡

木も草もうれへの秋の色そひぬこころに深きなごりよりして
秋にむかふ心のそこやあらすらむ草木の色は明日もありとも
また歸る月日なりとも今くるる秋のわかれの惜しからずやは
待ちわたる逢ふせを近みあまの川月のみふねや秋いそぐらむ

秋

秋深き夜さむのねやの月の袖つゆもなみだもしぼりかさねて

秋月

いつまでの眺ぞあはれふけすぐるわがよの月のゆくすゑの秋

秋露

涙もろきうれへの袖のつゆよりは草木の秋もなほぞしをれぬ

秋 木

かげ寒き岡邊の夕日さしよわりもろきやなぎの秋風のいろ△

秋 風

草の庭は秋風しきてむらむらの霧のそらにはかりぞすぐなる

秋 露

萩の上のつゆのひかりはなほ見えてまがきわかれぬ草の下蔭

寄 月 秋

秋ふくるよもぎが庭の露さむみきりぎりす鳴く月よかなしも

夕 月

くれはてぬ山の端早く出で初めて松の木蔭につきぞやすらふ

田 家 月

この秋はまだとひも見ず伏見山すみこし庵を月にゆづりて

暮 秋

草の下にむし鳴く野邊の秋のくれ色にもをしみねにも暮ひぬ

頼みがたき我が身にしあればこの秋の名残も常の哀とや思ふ

きりたちわたり

かりがねの鳴きて越えゆく山見れば霧立ちわたり梢いろづく

秋 月

秋も今はなごりのあはれ色そひぬ月も夜寒になりまさるころ

秋 燈

ともし火はかかげつくせど秋の夜の長きおもひぞ猶餘りぬる

秋 舟

難波がたゆきかふ舟もかつきえぬ浦近くたつあきのあさぎり

秋

秋の雨のこぼれすさめる草村のまれなる花につゆぞあまれる

ながめ向ふいく折折の秋の月うれへてもみつ慰みもしつ
なきうれへともぞあかすきりぎりす秋も夜寒のおなじ枕に
雲になくかりがね高しおきの風浅茅がつゆのあきのゆふぐれ
秋ふかきねざめの窓のさびしきにもろくもそよぐ萩の音かな

朝秋

秋ぎりのたてるあさけの山見ればこすゑむらむら薄紅葉せり

秋日

秋の日のうつろふ山の色くれてこすゑさびたるひぐらしの聲

秋嵐

世をあきの色にわが身もたへわびぬ四方の嵐の木の葉吹く頃
きりやたつ煙やなびく白妙にひとむらきゆるをちのやまもと

秋虹

秋の雨のひと村わたる夕ぐれの雲間にたゆるにじのかけはし

秋霽

あたりまでよりくる雲のかげもなし月ひとりすむ秋の大ぞら

暮秋日

枯れわたる尾花の夕日ほのかにも残るや秋のかげぞすくなき

秋里

わけなれてゆききかさぬる野邊の露ことしも秋のふか草の里

秋枕

もの思ふねざめの月もかげよわし夜をなが月の老のまくらに

初秋七月一日

けふを待ちて色の木の葉も落ちそめぬ初秋風の吹きかはる日に

初秋夕

思ひそはむ秋とはけふの夕ぐれをなれがほにおく袖の露かな

秋九月一日

しぐるるか今日長月にうつる日のものくもる空の暮ぞわびしき

秋植物

風たえぬくれしもさびし庭の面のちぐさゆるがぬ花の末末

秋動物

かりがねの雲井にきなく夕暮に秋のころぞ我れもうかるる
月のいろもうれへかねたる寐覺かな蟲の音ちかき夜半の枕に
風高き岡邊のやなぎかげすぎてかりがね寒しあきのゆふぐれ
秋の色もあすはあらしの山かげに残る紅葉をかたみとや見む

暮秋霜

惜みしたふ今宵ばかりの袖のしもおきてや秋のいなむとすらむ
月

庭の蟲野原のを鹿つねよりもこよひの月になきまさるなり

雙貫題歌中に松竹

秋風のおとはあまたのあはれなれや松にひびくも竹にそよぐも

月

戀ひしのぶ雲井の月よ見し世にはわが面影もかはるのちまで

冬歌

霜

おきこほるよはきの砌の霜の上にふけてさえしむ庭のつきかけ

窓

池の風もあかつき寒く吹くならしあし邊にさゆるをしの一聲

雑

月に鳴くやもめ鴉のよるの聲われもねざめて聞きうかれつも

冬風

吹きあるる今宵のかせにききぞ思ふあけなむ庭の面影のゆき

冬 雨

色もなき草木しをれてつくづくと雨すさまじき冬の日ぐらし

冬 山

降りつもる山路は雪のところにてほかよりもまづ跡は絶えぬる

冬 鳥

霜寒きあさけをいたみかりがねは軒端のうへに鳴きおちぬなり

冬 月

ふけ寒き月のさえしむ庭の上にあれるもわかぬよはのうす雪

冬 煙

眺めやる雪ははてなき山もとに埋み残せるけぶりをぞみる

冬 路

とひとはれ思ぞたゆる山ふかみ道とちはつるゆきの日數に

冬 鳥

まだしろき霜のあさけの軒近くなきおつる雁の聲ぞさむけき

冬 竹

つもりける夜のまの竹の雪をれて頼むかきほぞ野邊ひとつなる

雪

消えぬまの幾日の道をとぢぬらむ雪にこもれるみ山べの里

雲

世はさむくさえこそまされふる雪のみぞれになれる夕暮の空

十 月

神無月木の葉ちりはてくさかれて野山さびしき頃にもある哉

時 雨

しぐれやすき空を見るこそあはれなれ涙もろくぞ落つると思へば

冬 路

あさあけの梢のひかげにほひそめて雪おちかかるもりの下道

冬衣

やまあゐのをみの衣に雪ちりし雲井の庭ぞおもかげにたつ

冬無常

朝日まつ小篠が霜のきえぬまを世世ふるこもと頼むべき身か

冬神祇

もと柏神のすごもにふりそそぎしろきくろきのみきたてまつる

冬祝

霜の後みどりをそふる冬のまつの千歳を契るいろぞひさしき

除夜嘉元二年

秋もすぎ年もくるなりまださめぬ夢のわかれば昨日と思ふに
とほざかるその月日のみしたはれて今年の暮ぞいと悲しき
まぎれすぎし昔の年の暮だにありのどけき今をさて過さめや
春またぬわが故郷の年のくれまぎれぬあはれひとりしぞ思ふ

今日といへばいつも哀は習なれど今年に似たるのどけさはなし
さだめなき世とは思へどこよひごとの變らぬ情ひさにとしへぬ
さらにこそ人の別はかなしけれいつもの年のくれにあふにも
さぞなありしこよひよいかに事繁みまぎれかすらむ百敷の内
今日はおきぬ明日より後の年の暮も身やいたづらにと豫て悲しき

年暮

今日くるる年は春とて明日きなむ老のわが身ぞかへる日もなき

枯野

枯れたてる姿ばかりはそれながらその色となき尾花かるかや

冬

雪あられあれすさぶ空の夕暮にさむき日かげぞ軒にうつれる
つもるらむ降るらむ風をききあかし心にふかきやすがらの雪
夜半のままの霜はさながらこほりしみて寒き朝けの道の篠原

北窓雪中

窓さむきあさけの雪にながむればそとの山ぞ軒にま近き

思 歸 文集題
重山

和田の原かへる波にもことつてむ都こひしみわれしをれぬと。

千鳥

浦千鳥ともよびかはすこゑすなりいそやの波のよるの枕に

冬 杉

山おろしに雪の木末はひま見えて軒端はれゆく杉のしたかげ

野 霜

花よましてかれはだになき宮城野の霜のふるえのはぎの一村

冬

山かげや秋をおくりし庭の面にまだ霜しらぬきくのいろかな

寒林帯夕陽

散りはてし梢の跡の夕づく日さそはぬいろぞ木木に残れる

雪中村居

里つづきおなじ深さにつもればや雪にをれゆく竹のむらむら

冬 月

夜半の雪の晴れぬる空の雲間より寒くさやけき月のかげかな

冬

めぐりゆく雲にしたがふ村しぐれいく里かけて冬を告ぐらむ
うき世には誰れも心をとどめじなあらしの前の冬のみちば
しばしこそ草木もそれとわかれつれ雪の姿にふりうづみぬる

冬 里

昨日今日とやまの雪げ風あれて寒くしぐるるしがらきの里

朝 霞

明くるより霞うち散り今日の日は常より寒くあれむとやする

枯 野 嘉元二年冬の頃

霜をへて秋におくれし草はあれど我れぞなげきのかかる世もなき

雪

白雪のふるきなさけを思ふにもまづなきあとの忍ばるるかな

千鳥

さゆる夜の川邊の千鳥なれよりも我れぞうきねは繁くなかる

歳暮

うき夢の昨日のなごりさめぬまに月日やへぬる年もくるなり

夕雪

山の雪のつもりしづまる夕ぐれの日影に見えてをちこちの峯

曉寒月

かげさむき有明の月もさえしみてみぎりに氷るあかつきの霜

河音高し

萬葉

鳴く千鳥こゑはしきりて更くる夜の河音高し月きよくして

五色を四季にわたして當座によみ侍りし歌

青 冬

草も木もなべてひとつの霜枯に苔のみどりぞ冬もしられぬ

黄 冬

冬枯のかきほのあさち朝な朝な霜に朽ちゆく色ぞさびしき

赤 冬

ふけぬるかのかのこり少く消えゆきて夜寒知らるるねやの埋火

白 冬

猶ぞやまぬ夜のまばかりの雪にだに軒端の竹は早折れぬなり

黒 冬

いたづらにあはれ四十ちの霜を経てわが黒髪ぞ色かはりゆく

冬夜人倫

この頃はあまつ少女の袖の霜ふりてもしのぶ雲の上のつき

冬聲

千鳥なき月よさえたる曉にこほらぬかはの音ぞさむけき

冬鳥

聞くにうれへ見るに心ぞあくがるる千鳥しばなき月冴ゆる夜をり

朝霜

朝寒きかきほの小篠うへ白み夜の間のしもぞこほりのこれる

夕雪

降りくだる色より月のかげになりて夕暮見えぬ庭のしらゆき

冬

見し世こそへだてはてぬれ九重やふりにし庭のゆきの夜の月

十二月長講堂不斷法華經轉讀の程に雪ふる日

春をまつ梢のゆきも色ぞそふみのりのはなの紐をとくころ

冬雲

夕ぐれの雲とびみだれあれて吹く嵐のうちに時雨をぞ聞く

冬木

ふり晴るる空とも見えす山深きあらしの木木のゆきの下道

寄雪風

雲風のあるる夕におちそめてよのまにたまるにはのしら雪

水鳥

さすがまた棄てがたき世やをし鳥のうきながら猶音をば鳴くらむ

除夜嘉元元年

思ひいづるその世も今の哀かな事しげかりしももしきのうち
へだてこし昔おぼゆるなさけ哉年くるる夜のももし火のもと
別れこし時とともににもめぐりあひて憂世に似たる今宵なる哉

落葉

冬がれの草葉が上にちる木の葉さびしきにはのかざりなりけり。

歳暮

さらでだに惜む程なき年のくれの日數のうちを春になしぬる

冬月

かげ更けてすさましき身のたぐひ哉霜の庭なるありあけの月

白冬

ふりはててなほ忘れぬは昔見しをとめの袖のよなよなのしも

冬雨

冬がれのあさちかるかや伏ししをれあけ寒き日の夕暮の庭

冬星

夜は寒み雪ふりはるるあかつきの嵐にみかく星のかげかな

ゆきとなみと

白妙の色もわかれすさき波や雪吹きまするひらのやまかせ

冬蟲

故郷の霜のまがきの草のもとにむしの聲さへ枯れ残りける

管絃

聞くからにおもひぞいづる神あそび雲井にさえし琴笛のねも

冬夜

つねよりもまどの吳竹音はげしあられまじれるよはの嵐に

いと早くくれぬる年かおくりすぐす月日の程も思ほえなくに

あはれまた今年も今日にくれつきて四十ちにおよぶ春ぞ近づく

十月一日雨ふり侍りしに

今日はこれ冬のはじめと思へども時雨にも似ぬひぐらしの雨

雪

寒くなる冬の心の空にみちて雪ともなりてふるにやあるらむ

降りやらぬおなじゆきげの今日幾日重る雲はそらにこほりて

冬 日

あれくらしさえたる空の雲間よりいりがたの日の影ぞさしくる

冬 煙

賤がすむ村の煙のすゑまでもこころ細くぞとしはくれぬる

雪

へだてつる園生の竹は折れふしてそともにつづく峯のしらゆき

たづねくる人のなさけもあとたえて都ともなき雪のふるさと

冬 植物

おきて見る軒端の霜のしろ妙にこすゑもさむき冬のあさあけ

冬 夜

冴えとほる冬の心ぞ知られぬるふくればうすき床のさむしろ

歳

後はいさ今日のみやはと思ひ思ひさても幾とせの今宵にか逢ふ
またのこよひこのままにしもあらしなれば今の哀に猶色ぞ添ふ
いたづらの身には急がぬ春なれば年おくる夜のいまぞのとけき

山家風

冬されば庭のしば垣ひまをあらみ嵐のかせもふせぎわびぬる

後伏見院御詠草

春

春もきぬ鶯なきぬかすみたちぬ時はかくこそうつりゆくめれ
春に咲く花もあまたの名こそあるに櫻ぞ時のなさけをばなす
花をながめうぐひすの音をきくならでこと思なき春のやま里
色にそむ心となしのすさびゆる花にながめのはるぞふりぬる

寄夕春

池の上に春雨はるる夕ぐれのみぎはのはなにいり日さすなり

寄衣春

かをりうつる月と花とのひとつ夜に衣手せばきうたた寐の床

春残二日

後伏見院御詠草

あけばまた別の春をあすといひて今日に勝らむ名残をぞ思ふ
春残一日

今日くれぬ霞むゆふべの空よこれふたたびとだに春とては見じ
暮 春

花の後のみぎはの木蔭みどりふかみまたひといろの池の山吹
残りある春の日數をおきながら花こそうたてうつり出でぬれ

早 春

みふゆつき春たちくらし天の戸のあくるあさけに霞たなびく
おしなべて波もかすみものどけきに海山かけて春やたちぬる
なほみゆきふるさとさむし吉野山みねの霞ははるにたてども

にほひのこれる古調

梅が香をさそひて過ぐる春風にとまるにほひぞ袖にひさしき
花になりける同

雲かをる立田の春のあさぼらけ露のそめしはきのふと思ふに

霞

霞のみまづたなびきてなべて世の春をのどけき氣色にぞなす

春 蟲

咲きみてる春の園生の花のうへにとびかふ蝶の色まがふなり

藤

ゆく春もここにやすらへ暮れかかるみぎはの木木の藤の下蔭

遠

くらしがたみもの思ふ日のすさびには遠き山邊の霞をぞみる

花前歎

さだめなき人のうき世にくらぶれば風まつ花はなほそのどけき

早春有懐

いとどしきうれへぞはれぬ今年また霞むはるべに逢ひぬと思へば

早春霞

時わかぬながめのうちも春になれや今年も空の霞むをぞみる

路梅

色も香もやすらふ袖にうつりけり山陰てれるむめのしたみち

夜歸雁

別路のたがうきなかのたぐひとてあくる夜またぬ春の雁がね

折花

いたづらに折るもかひなし櫻花かくれぬ老のはるのかざしは

春

梅が香は月影ながらかをりあひておぼろにあくる窓のしののめ

柳

春にあひて柳のまゆはのふれども愁のこころわれぞものうき

春衣

過ぎぬれどにほひばかりはとまりけり梅咲く道のはるの衣手

春枕

あけぼのや雲井の雁のこゑながら月もまくらにかすみきえつつ

春心

春もいさやわかぬ心に花とりのあたらなさけの見えきかるらむ

春望

はてもなき霞のすゑのいく野山ところやかはる春はかはらじ

春雨

うからまし花のさかりのころなくば風さへそへるけふの春雨

山吹

故郷は花のころさへほどなくてまた山吹のさかりをぞみる

暮春

春もあらむ花も咲きなむ世の中に後を知らぬは身にこそありけれ

さきゆくみれば

櫻花咲きゆくみればわが身のみ春にはうとき物にぞありける

春風

道のべや竹吹く風はさむけきに春をませたる梅の香ぞする○

春雪

いたづらに愁はつもる春の雪のすさまじき世にふるぞものうき

春野

松をひき若菜を摘むとこのごろの春をときなる春日野のはら

春色

霞てふすがたはみえずおほ空ののどけきいろぞ春にはありける

春

霞む日のゆふべのどけき山ぎはにわたるや鳥のはるかにぞゆく

風吹けばおつるさくらのあだにのみとまらぬ色のあはれ世の中

こゑの色ののどけきからに鶯のはるをやおのがときとさだめし

雨中柳

玉をぬくやなぎのみどり絲たれて枝にながるる春雨のつゆ

春

寐られねばききこそあかせつくづくとももの思ふ夜の春雨の音

早春

山みれば霞たなびくむべしはや春なるときに世はなりぬらし

鶯

花はまだ咲かぬ梢もうぐひすの聲にぞ春のいろはありける

残雪

春きてもつぎてなほふる雪のうちに春の日数の程ぞちかづく

春月

春の夜の竹吹く風はなほさえて雪にかすまぬ庭の月かげ

花

さすがあはれ花咲く春のいく眺あすとはすててまたぬ身ながら

暮 春

夏を待つ青葉のころすすむらしむなしき枝の花のあとより〇

霞

ゆふ霞なほ立ち添ふやそれとなき山の色だにきえはつるまで

春 雪

風さむみ空にみだるるあわ雪はまだき櫻のちるにぞありける

躑 躅

櫻咲く山下照れるいはつつじこころわくべき色までもなし

桃

嵯峨野なる賤が園生の桃のはな今日をりえたるなさけとぞなる

津

もしほやくなにはのみつの朝ぼらけ煙をそへてかすむ春かな

花

尋ぬべきほかのさかりや過ぎぬらむやどの櫻のあかぬながめに
おぼえずも櫻咲きちるひかすまでまたこの春のうつりけるかな
ふる里の老木のさくらそれよりもながむる身こそ後またのまね
見しひとにふたたびあはぬ櫻ばな年にかはらぬはるはあれども
とめがたき人の世なれやさそひたつ嵐のまへのはなをみるにも

春 曉 月

いりやらぬ月はかすみて山の端の空ほのかなる春のあけぼの

花

櫻花咲きちるうちのころとして日かげのどけきやよひきさらぎ

春

月いづる峯の空にぞ春の夜のふかきかすみのほどもみえける

春雨の名残くもれるゆふぐれに梅もやなぎもいろぞまされる
あわ雪はしひてふれども梅の花おのが時とてなほ咲きにけり
春がすみ霞むはるべとなるからに心さへこそのとけかりけれ
あけ匂ふ外山の空はのどかにて雲とかすみのいろもわかれず
霞むらむみやこのかたの空やいづこ山邊は雪のふる里のはる

柳

庭の面のやなぎにつたふ春雨のふるにもものうき世にこそありけれ

鶯

山かげの垣根を宿とさだめてや竹をはなれすうぐひすのなく

夕 鶯

なきくらす鶯の音をきくからに今日のころはわれものどけき

雨中藤

ぬれまさるみぎはの梢色はえて雨ぞかかれる池のふちなみ

春植物

をちかたや花のほかにも春ぞみゆる霞のしたの竹のひとむら

春動物

つれづれのながめの宿にわれぞきく長き春日のうぐひすの聲
風寒み竹の上には雪ふれどかきねは春とうぐひすぞなく

春

遠方や霞をはるのけしきにて柳さくらのいろぞこもれる

蕨

きさらぎや長き春日の手すさびにをりつくしぬる野邊の早蕨

呼子鳥

なきわびぬやよひのくれの呼子鳥よべどかへらぬ春の別路

馬

百敷に見し世こそなほ忍ばるれみぎりをわたる春のあを馬

霞

なぞやわが心ひとつのすさまじき世はかすみたち春になれども〇

梅

春きても枝にこもれる白雪に軒端の梅は咲きかわぶらむ

花

春をあさみ寒きこすゑの花やいづら面影みせて雪はちれども
あるじしも春をばわかぬふる里の花はことしも時を知りけり

藤

藤のはな咲けるみぎはは紫のいろにそめたる浪ぞたちける

馬

としどしは百敷にしてみしものをみぎりをわたる春のあを馬

春日

鶯ののどけき音のみ聞えきてつねより今日はくれぞかねぬる

春露

春雨のふるもしられぬ夕暮のやなぎのすゑに露ぞすがれる

鏡

日數のみかつうつりゆく春の色の花のかがみは見てもかひなし

春

花はいま咲きととのへり夜の雨の木木のうるひやあまねかるらし〇
わがこころ花にも今はそますあれなこの世の春はそむきぬる身ぞ〇
とふ人のなさけぞみえぬ花のいろもわれも老木のふるさとのほる〇
おぼえずもわが世の春ぞたけにける花うぐひすのときのすさびに
をしむとてとまることなき眼の前のうき世のいろは花ものがれず

春浦

浦とほみ霞むなるらし波の上にゆくや小舟の末はきえゆく

春たつ日

けふといへば何のしるしもみえなくに霞ぞ春のたつにはありける
やよひ

ちりちらすやよひの花の春の風しづごころなき眺をぞする〇
春のはて

とどまらぬ別を花にさきだてて残る日數もけふぞつきぬる
夕花

ながめくらす軒端の花のゆふあらし今日の名残やあすの白雪
嶺花

櫻花にほへる嶺のあさづく日いろもひかりもひとつにぞなる
谷花

谷あひの木蔭のやどのさくら花しばしは風もさそはざりけり
山家花

あはれたが告げける春ぞ山ふかきいほりの軒の花のひともとの

折花

折りてこそかくともみせめ櫻花木のもとをとふ人しなれば
春

春日かげかすみくらしして鶯の花にさへづるやどぞのとけき
知らぬ世の人のなさけもかくこそと花に昔の春ぞしたしき

三首

早春

あらたまる今は春べと思ふより世はみな時の色にみえけり
霞

世のけしき春てふことにかはらぬは同じ霞やたちかへるらむ
鶯

うぐひすのこゑよりかけてやはらぎぬ時のこころも人の心も

圖書寮本奥書

右後伏見院御詠草也以御自筆之一卷寫留之
七十八歳翁於燈下染老筆可耻可耻
享保辛亥夏

後伏見院御詠草百首

冬夜

まきのやの寐覺のしぐれおと近みぬれぬばかりの夜半の手枕

寒樹

星清き霜夜のこすゑ風こして朽葉のおとぞにはにきこゆる

庭落葉

山かげやかきほさびしきゆふぐれの嵐にめぐる庭のもみぢば

冬

月の宮によはさえとほるあかつきの霜に夜深きとののいつ聲

冬色

つもるとも夜半のみ雪はみえなくに庭の色のみさだかにぞなる

後伏見院御詠草百首

冬 池

みぎは近き葦間わけゆく鴨の羽の色もまがはぬ冬枯のいけ

冬 里

昨日今日とやまの雪げ風あれて寒くしぐるるしがらきの里の

冬 雨

寒き日のまだかさならぬこの頃はこほらぬ雪や雨となるらむ

冬 猿

月さむみふかき霜夜のあけがたにこすゑに叫ぶさるのひと聲

冬 夜

庭さゆるひかりのほかはうすく見えて月にまけたる夜半の白雪の

冬 竹

かきくらすあさけの雪のをちかたに霞みてうすき竹の一村

冬 庭

おのづから垣根の草も青むめり霜のしたにも春やちかづく

冬

ひととせは霞のはるをはじめにて雪の空にぞながめつきぬる

雪中霰

苔の上は雪にうづめる夕ぐれにふるや霰のおとぞきこえぬ

歳暮霜

日影さす草葉の上のあさ霜ののこりなくなるとしのくれかな

冬 朝

霜おきて寒きあさけにながむればやどの梢ぞきりにくもれる

冬 雲

山あらしの杉の葉はらふあけほのにむらむらなびく雪の白雲の

夜 雪

降りかすむ空にひかりはつたはりて月にあまぎる夜半の白雪

朝雪

谷かげや軒のたるひもとけなくに山のみ雪は朝日さすなり

雪

山ふかみみねの朝日の色やにほふ梢ひかれるゆきの下みち

水鳥

夜をさむみ霜おくならしみぎはなる葦邊の鴨もわびてなくなり

冬

霜枯の野邊にまじれる小篠原かへぬいろしも冬にさびしき

枯野

枯れたてる姿ばかりはそれながらその色となき尾花かるかや

冬庭

ふけ寒き月のさえしむ庭の上に降れるもわかぬ庭のうすゆきのうすゆき〇

冬朝

まだしろき霜のあさけの軒近くなきおつる雁のこゑぞ寒けき

冬山

ゆふ山や檜原があらしおとたえてをりをり高き雪をれのこゑ

寄雪月

山陰やむかしのなさけさぞなあはれ我れも友ほしき雪の月夜に

寄雪草

埋みはてぬ枯葉がしたに庭みればだだひとへなる淺茅生の雪

雪中山家

空はるるみねの日かげはさしもこす雪にしかるる谷陰の軒

曉寒月

かげ寒みありあけの月もさえしみて砌にこほるあかつきの霜

冬

神無月木の葉ちりはて草かれて野山さびしき頃にもあるかな

清瀧川

冬さむみこほりにけらし清瀧やかはせのなみの聲ぞすくなき
をしほ山

大原やをしほの松はしぐれかねてせめて色づく山の下くさ
あらし山

今朝のあさけ寒きあらしの山おろしに初雪ふりぬ野邊の浅茅生
片野

はらひわびぬ片野のくれのかり衣ひもゆふこりの霜の下芝
雪

朝あけのこすゑの日影匂ひそめて雪おちかかる森のしたみち
つもるらむ降るらむ風をききあかし心にふかき夜すがらの雪〇

春雨のみどりをなしし色もすぎてまたも時雨の木の葉そむなり
時雨

冬 朝

よひのまの霜はさながらこほりして寒きあさけの道の篠原
寒 草

花にまして枯葉だになき宮城野のしものふる枝の萩のひと村
冬 月

月のおもを夜半の嵐やはらふらむ冴えすみとほる空にもあるかな
冬

夜はの風にあられ交れる音そひてつねより寒きねやのひとり寝
あすか風さむく吹くなる冬の夜に川おとたえてこほりすらしも

雪降る日北山の家にまかりて
雪のうちにこととふあとも年ふりぬ都のきたの山陰のやど
冬

雪もくんだり水もこほるやあめつちの寒さをうくる心なるらむ

夕

梢にはゆふあらし吹きて寒き日の雪げの雲に雁なきわたる。

落葉

くちなしの木の葉をしける庭の面にうつる夕日の色もわかれず

冬庭

山の雪は嶺白妙にみえながら庭のあさちはいろもかくれず

冬旅

ささの葉に霜おく野邊の寒き夜にまそでをりしき獨かもねむ。

冬山

空はれて雪さやかなる夕山にひかりをそへて月ぞいでぬる

冬

冬やくる木木のこの葉もふる里のながめにつもる月日をぞ思ふ

寒草

おきてゆく我れよりさきのあとぞなき朝ふむ野邊の道芝の霜
冬

おきてみる軒端の霜の白妙にこすゑもさむき冬のあさあけ
雪上月

月やみがく雪やこほれるふくるままに光みえゆく冬の夜の庭
路雪

わけきつる山路は雪のうちふればかへさの跡やまた埋みぬる
竹雪

くれ竹のはだれの雪はうすくして垣ほ寒けき今朝のあさ風
閑居雪

尋ねくる人のなさけもあとたえてみやこともなき雪のふる里
除夜述志

年くれてあれたる空の雪あられふるにつけてはすさまじの世や

わがこころあやにくにこそ長閑なれ年の暮とて誰れいそぐらむ
いたづらの身にはいそがぬ春なれば年おくる夜の今ぞのとけき
おほかたも過ぐる月日はをしむべしましてきはまる一年のくれ
あはれそひぬ戀しき人も過ぐる時も又ひととせを隔つと思ふに

冬 夕

ながめつもる日頃の雪の庭の色もさらにさびしき宿のゆふぐれ
千 鳥

河千鳥ふけたる空になきわたり月すめる夜にこころさへすむ

夜時雨

涙こそまくらのもとにこぼれぬれ夜半の時雨のねや過ぐる後

冬の歌の中

冬の夜のあらしのおとははげしきをわが寐覺にはのどかにぞきく

除夜述志

年といひて送り迎ふるいとなみの何ぞこれさへ安げなの世や
おなじとも同じ月日のいくめぐりさすがかはらぬ哀をぞ思ふ
すさまじき心のそこの年の暮はるにむかはむほどぞはるけき
さむきゆふべに詞高

窓近き竹にあらしはふきしきて寒きゆふべにあられうち散るの

除夜言志

わが心ものうながらも春にあはばはなや霞をまたやながめむ
筆のあとも年とともにや積りぬるかはらぬ今日の情と思へば
いつまでかわが目のまへに惜みすぎむ月日のゆくとの人の別と
さだめなき世とは思へどけふごとのおなじ情ぞ年にかはらぬ

冬 光

いりがたの嶺の夕日にみがかれてこほれる山の雪ぞひかれる
雪

朝な朝なとやまに見えし白雪は今日わが宿にふりにけらしも

氷

人心こほりかさぬる冬川のうちとけがたき世にこそありけれ

冬月

世世へてもとよのあかりのころときけば面影近き雲の上の月

歳暮

送りきつる數多の年のけふの暮またいくたびにあはむとすらむ

霰

白妙の玉かとみえてふるあられさえたるゆきの姿なるらし

雪

よひの風のふけてしづまる冬の夜の闇もさやけき庭の雪かな

霜

朝ごとの霜の色のみかさなれど雪にはならぬ淺茅生のうへ

寄雪鳥

村すすめとまりやいづこ降る雪にねぐらの林竹をれぬなり

冬雜物

まきのこす曆のおくもいまいくか心ぼそくぞ年はくれぬる

冬草

まがきなる枯葉の草は霜おきて小篠がうへはあられたまぢる

除夜言志

あはれこの月日はやくゆく水のかへらぬ年をまたおくりぬる
またやいさ今年の今日の今宵まではかはらぬ情とどめきぬれど
おどろかでただ明け暮すうちながらまた一年もゆめにすぎぬる
今宵しもこのろの中はのどけきを誰が急ぐなる春にかあるらむ
年くるる今日のゆきげのうすぐもりあすの霞やさきだちぬらむ

千鳥

河千鳥なきていづちかうかれゆくわれも友なしの夜の寐覺に

落葉

庭のおもにきりの枯葉はおとづれて梢は風のこゑもとまらず
山風のはげしく吹けば神無月木の葉のあめぞふりまさりける

冬夜獸

里つづきあまたの犬のこゑさえて山しづかなる冬のつきの夜

落葉

木がらしの吹くにきほひて足引の山の紅葉は雨とふるなり

冬

見しままの少女の姿へだてきてわが身はよその雲のかよひ路
星きよき夜半のうすゆき空はれて吹きとほす風を梢にぞきく

朝庭

山かげや人は拂はぬ庭の面の木の葉をよする朝あらしかな

夕野

夕日影尾花がすゑにうつりきえて野邊ものさむき冬枯の色

五節のころ

このころの雲井の夜はの月影にあまつ少女が袖かへすらし

後伏見院御集拾遺

早春のころを下葉集

世ははやも春にしあれや足引の山邊のどけみ霞たなびく

ねの日を臨永集

諸人の千代のかざしのためとてや今日の子の日に相生の松

春雪をよませ給うける續千載集

いつしかと待たるる花は咲きやらで春とも見えす雪はふりつつ

おなじ心をよませ給ひける風雅集

たまらじと嵐のつてに散る雪に霞みかねたるまきの一村

題しらす同

花鳥のなさけまでこそ思ひ籠むる夕山ふかき春のかすみ

春の御歌の中に風雅

春風は柳の絲をふきみだし庭よりはるる夕ぐれのあめ

三十首の御歌の中に新千載

春風はかすみの空にかよひきて梅が香匂ふ宿のゆふぐれ

五十番歌合に春風新拾遺

明け渡るかすみのをちはほのかにて軒の櫻に風薫るなり

三十首の歌よませ給うける時見花新後撰

九重に春はなれにし櫻花かはらぬ色を見てしのぶかな

題しらす後撰拾遺

朝な朝な外山の雲ぞにほふなる峯の櫻はさきまさるらし

花の十首の御歌の中に玉葉

花の中にいかに契りてさくらしも春にことなる名をのこしけむ

遠村花といふことを風雅

櫻さくとをちの村の夕ぐれに花をりかざし人かへるなり

春のあしたといふことを同

花の上になすや朝日のかげ晴れて囀る鳥のこゑものどけき

雨中花を同

雨しをるやよひの山の木がくれに残るともなき花の色かな

題しらす同

何となく見るにも春ぞ暮はしき芝生に交る花のいろいろ

朝花といふことをよませ給うける新拾遺

飽かずみる山櫻戸のあけぼのに猶あまりある有明のかげ

寄花春嘉元三年三月歌合

をりを得て四方の櫻も咲くなれば春は名高き時にぞありける

首夏を風雅

春くれし昨日も同じ淺みどり今日やはかはる夏山のいろ

夏の御歌に集風雅

小山田や早苗の末に風みえてゆくて涼しきすぎの下みち
水鶏を同

心ある夏のけしきの今宵かな木の間の月にくひな聲して
夏草をよませ給うける續千載集

今は身のことしげからぬ宿にしも猶みちとづる庭の夏草
螢をよませ給ひける同

風そよぐあしまの螢ほの見えて浪のよるまつほどぞ涼しき
三首の歌合に夏夜新拾遺集

草深きまがきの露を月に見て秋のころぞかねておぼゆる
夏雨仙傳五十香歌合

夏草のみどりの若葉あめをうけてなびく姿は見るもすすしき
鵜河を集水

とほつ川鵜舟にともす篝火の消えぬとみればまたぞほのめく
夕立を同

過ぎぬれどなほ雲のこる夕立の名残ばかりの宵のいなづま
初秋のころをよませ給うける同

初秋の天つ星合のさよふけて吹きたつ風ぞ袖にすすしき
七夕を新後撰集

秋風も空に涼しくかよふなり天つ星合のよや更けぬらむ
題しらす新千載集

待ちわたる絶間は遠き月日にてけふのみ通ふかささぎの橋
七夕のいははた衣まれにきてかさねもあへぬ妻や恨みむ
同後撰集

たなばたの五百機衣をりしもあれなどかは秋を契りそめけむ
正和元年八月十五夜五首の歌講せられける時

秋朝といへることをよませ給ひける新集千載

けさの朝け袂すすしき風たちていとはや秋のしられぬる哉

風後草花といふ事をよませ給うける玉葉集

夜すがらの野分の風の跡みれば末ふす萩に花ぞまれなる

秋露仙洞五十番歌合

霧うすきあしたの原の草の上におきわたす露の色ぞきよけき

三十首の歌よませ給ひけるとき草花露新集後撰

夕暮は尾花が末に露おちてなびくともなく秋かせぞ吹く

露をよませ給ひける玉葉集

秋さればわが袖ぬらす涙より草木の露もおくにやあるらむ

閑庭露といへる事をよませ給うける新集千載

浅茅原はらはぬ庭の露のうへにこころのままに宿る月かな

秋の御歌の中に同

鹿の音も遠里小野の萩が花そでにうつしてかへるかり人

秋の御歌の中に玉葉集

野山にも秋の憂やひとつならし男鹿妻とひ蟲もなくなり

秋ふかき山より山に分けいれば猶いろそへる紅葉をぞ見る

霧中雁を風雅集

天つ雁霧のあなたに聲はして門田のすゑぞ霜にあけゆく

待月といふことを同

聲たつる軒の松風庭のむし夕ぐれかけて月やもよほす

月をよませ給うける臨永集

月のこる沙干のかたはたづ鳴きて秋はふけひの浦路かなしも

秋霜をよませ給ひける風雅集

夕霜の古枝の萩の下葉より枯れゆく秋の色は見えけり

九月盡同

月も見す風も音せぬ窓のうちに秋をおくりてむかふ燈火

暮秋のころをよませ給うける

集部水

山風に木の葉うつろふ庭の面のいり日の色も秋ふかきころ

三十首の歌よませ給うけるとき

載續千

今日よりの時雨よ何のためならむ木の葉は秋にそめ盡してき

山時雨 同

いつしかと今朝は時雨の音羽山秋をのこさず散る紅葉かな

題しらす 同

都には嵐ばかりのさゆる日も外山を見れば雪ふりにけり

同 遺集後拾

友千鳥月にしばなく聲近しうきねの波のよはのまくらに

冬庭をよませ給ひける

集風雅

しぐるとも知られぬ庭は木の葉ぬれて寒き夕日は影おちにけり

題しらす 同

鐘の音にあくるか空とおきて見れば霜夜の月ぞ庭しづかなる

朝雪といふことを 同

岡のべや寒き朝日のさしそめておのれと落つる松の白雪

嘉元元年三十首の歌めしけるついでに夜神樂

といへることをよませ給うける

集種葉

霜にきゆる庭火の前の笛のこゑ雲むにききし夜半ぞ忘れぬ

冬の御歌の中に

遺集拾

見しやいつぞ豊のあかりのそのかみも面影とほき雲の上の月

冬 雲

仙山五十

竹はらふあらしの音ははげしくて雪げにむかふ雲ぞこほれる

題しらす

遺集後

待ちなれし契はよその夕暮にひとりかなしきいりあひの鐘

後伏見院御集拾遺

三十首の御歌の中に待戀を集玉葉
更けざらむその嬉しさのあすよりも今宵の内の時のまもがな
題しらす同

君ゆるにたへずなりにし身ぞとだに知らじと思ふもかねて悲しき
うきことも我が身にむけてことわりと思ひなすには恨しもなし
三十首の歌めされし時恨戀を同

よしさらば恨みはてなむと思ふ際に日頃覚えぬ哀さぞそふ
戀の御歌の中に同

今更にその夜もよほす雲の色よ忘れてただに過ぎしゆふべを
戀の心をよませ給うける續千載集

うき中はあすの契も白玉のをだえの橋はよしやふみみじ
夜戀を同

夏引の手びきの絲のうちにはへて苦しき戀はよるぞまさされる

遇不逢戀同

一夜だになほへだてじと思ひしにうき年月のつもりぬるかな

恨戀の心をよませ給うける同

名もつらしまたもみぬめの浦波の朝夕そでにかかるばかりは

戀の歌とてよませ給うける續後拾遺集

獨寢の涙かたしく袖の上にやどりなれたる月もうらめし
かこつべき鳥よりさきの別路は身のとがならで何を恨みむ

忍戀の心を集玉葉

味氣なや人のうきなを立てし故わが思をばなきになしつる

契明日戀といふことを同

いくゆふべむなしき空に飛ぶ鳥のあす必ずと又やたのまむ

別戀の心をよませ給ひける同

別路をいそがぬ鳥の聲よりもまだ空たかき月ぞうれしき

またやみむ又や見ざらむとばかりに面影くるる今朝の別路

題しらす風雅集

暮ふ方のすすむにつけて厭ひまさる人とわれとの中ぞ遙けき

寄七夕戀といふことを同

更にこそ忘れしことの思ほゆれ今日星合のそらにながめて

題しらす新千載集

あやにくに消えぬ浮名やとどまらむ跡なき空に身はたぐふとも

戀の歌とてよませ給うける同

須磨の蜚のしほやき衣それよりも恨むる袖は猶ぞかわかぬ

人ごころ何にたとへて恨みまし昨日にかはる人のつらさを

同新拾遺集

逢ふことも身にはなぎさに寄る浪のよその見る目にねこそ泣かるれ

忍戀の心を水

わぎも子がその黒髪のむすぼほれいはでややまむ思ふ心を
思ひつく心ひとつのあらましも道なき戀に我れぞくだくる

不逢戀を同

あふことも身には渚による波のよそのみるめにねこそなかるれ

戀の歌とて同

わが思ふ人をしさそふ月ならばながむる空もうれしからまし

うきにこりぬ習もさすが恨あれば今はと思ふほどぞ悲しき

題しらす同

うきをみるこのごろしもぞ哀なるありはつまじき命と思ふに

絶戀乾元二年五月歌合

をりをりのわがわびはてし心をば人もやさすが思ひいづらむ

寄月戀嘉元三年三月歌合

待つ人はむなしき床のひとりねに頼めぬ月の影のみぞさす

みこの宮と聞えける時基久の女に賜はせける記太平
思ひかねいはむとすればかきくれて涙の外は言のはもなし

雑の御歌の中に風雅

尋ねいる山路のすゑは人も逢はず入相の鐘に嵐こそふけ
飛ぶ鳥のながめの末も見えぬまで都の空をおもひこそやれ

風前落葉といふことをよませ給ひける同

山嵐にもろく落ちゆくもみぢ葉のとどまらぬ世は斯くこそありけれ

夕山といふことを同

夕山や麓の檜原いろさめてのこる日かげぞ峯にすくなき

題しらす同

鳥の行くゆふべのそらのはるばるとながめの末に山ぞ色こき

寄雲雜嘉元三年
三月歌合年

見るままに星のひかりもきよくなりて雲ぞ晴れゆく曉の空

月を風雅

一筋に思ひも果てじ猶もこの浮世の友は月こそありけれ

旅の歌とてよめる新千載

都おもふ涙の玉もとどまらず夕露もろき野邊のあらしに

海路の歌とてよませ給うける同

うなばらや風にたゆたふ蜚小舟ゆくへ危き波のうへかな

題しらす後拾遺集

都おもふなみだのうへは旅ごろも野山のつゆをまた重ねらむ

嘉元元年伏見院に三十首の歌めされける新古今

でに羈中煙といふことをよませ給うける今集

真柴たく煙の末をたづねきて宿とふ山のくれぞさびしき

後西園寺入道前太政大臣なくなりて後北山の

家に御幸ありて題を探りて人人歌よみ侍りけ

るに山家水を集風雅

山里のなきかけ慕ふ池水にむなしき舟ぞさしてものうき

庭 松乾元二年
五月歌合年

雨の中にしをれてたてる庭の面の松の姿をみればさびしも

萬葉集の詞一句を題にて人人に歌よませさせ

給ひけるに「ひかりはきよく」といふことを玉葉集

天つ日のひかりは清くてらす世に人の心のなか曇れる

題しらす同

山かせはふけど聞えず岩がねやたぎりて落つる瀧の響に

その世こそ猶こひしけれ百しきやわが友と見し庭の吳竹

名所の御歌の中にあらち山同

あらち山夕こえくれて矢田の野の淺茅かりしき今宵かもねむ

みこの宮と申しける時神無月のはじめつかた

まで紅葉し侍らざりける年櫻の咲きたる枝を

人の奉りて侍りけるを御覽じて大納言三位に

賜はせける同

しぐるべき梢の色はつれなくて花をや時の物とながめむ

述懐のこころを千載集

賤がやにかこふや柴の假の世はすみうしとてもあはれいつまで

雨夜思といふことを風雅集

獨あかす四方の思は聞きこめぬただつくづくと更くる夜の雨

雑の御歌の中に同

仰ぎ見てわが身を問へば天の原すめる緑のいふこともなし

建武のころ同じ御歌の中に同

沈みぬる身は木隠の石清水さても流の世にし絶えずば

題しらす新千載集

教へおくそのしなじなの法の門ひらくる道は一つなりけり

題しらす集水

やはらぐる光くもらず諸神のうけまもるべき國はたのもし
こととはむふるき軒端の松の風たがうるそめし宿のなさけぞ

巴猿三叫曉雷行人裳といふことをよませ給う

ける同

さよふかみ深山の猿のみさけびに旅ゆく人も袖やうるほす

寄月述懐といふことをよませ給うける同

身こそ今雲のかよひち隔つともなれにし月よ昔わするな

題しらす同

むば玉の夢てふものは哀なりみぬ昔にもかよふと思へば

同類増

いろいろに都は春のときにあへどわが住む山は花もひらけす

雑の御歌の中に新集千

わかぬ浦やうき人なみの身もつらしみがきし玉の跡の藻屑は

神祇を風雅

神路山内外の宮のみやばしらは身は朽ちぬとも末をばたてよ

花園院位におはしましける時大なるたかむな

を奉らせ給ふとて包紙に書きつけさせ給うけ

る新後拾

百敷にみどり添ふべき吳竹のかはらぬかげは代代ひさしかれ

爲定の中納言の時にあはずして籠り居たりけ

るころ祖父の大納言爲世「和歌の浦に八十ちあ

まりの夜の鶴の子をおもふ聲のなか聞えぬ」

と奏しける御返し類増

雲の上に聞えざらめや和歌の浦においぬる鶴の子を思ふ聲

伏見院の御忌のころ花園院いまだ位におはし
 ましけるに紅葉につけて奉らせ給うける新拾遺集
 かきくらす袖の涙にせきかねて言の葉だにも書きもやられず
 御ぐしおろさせ給ひて秋の初つ方永福門院に
 奉らせ給ひける風雅集

秋をまたで思ひたちにし苔衣今より露をいかで干さまし

伏見院かくれさせ給うてのころ時雨のしけれ

ばよませ給うける後拾遺集

露かけしきのふの秋の藤衣ほしあへぬ袖もまたしぐれけり

院後二條 愚 藻

春

花

春ごとになるるあらしの山ざくらあかぬ心にまかせてぞ見る

庭落花

庭の面は水なき波と見ゆるまで散る花よするはるのゆふかせ

春 月

浮雲は晴れての後も春の夜のかすみをいでぬつきのかけかな

江 霞

ゆくかたはそことも知らず難波舟わくるあし間も深き霞に

雪中梅

降る雪に色はまがひぬしかはあれど匂ふや梅はなのしるしなるらむ

人家梅

とがむなよ誰が垣根とは知らねどもあかぬ餘に手折る梅が枝

曙歸雁

かへる雁おのがこし路のとほければまだ曙のみやこ出づなり

残花

吹く風もいとふひとなき山陰にこころと残るはなのひともと

吹く風に知られぬ山のさくら花こころづからの色やのこれる

暮春鶯

をしむにはなとかとまらぬ鶯のおのがねにこそ春もたちしか

花本

山ざくらくれなばなげと思ふより宿をば花のかけはなをしめてき

暮春雲

あかなくに散りにし花の面影をなほみよし野の山の端のくも

霞

物ごとに改まるてふ春なれどいづらかすみの去年にかはれる

花間鶯

谷を出でし頃にぞ似たるうぐひすのおのが羽風の花のしら雪

春夕

すがの根の長き春日もかぎりあれば夕ぐれ告ぐるいり相の鐘

折花

あかなくにをりはつくさじ山櫻またこむ春をはなにちぎりて

山花

朝日影うつろふみねに白雪のきえぬぞ花のしるしなりける

花下送日

散るまでもながめすてじと山櫻ひと木のかげに日數へにけり

閑庭落花

人はこずさそふ風だに音たえて心とにはにちるさくらかな

禁中花

昨日今日みはしの春の花ざかり散らぬまゆるす朝ぎよめかな

夏

雨後郭公

村雨のなごりのこずゑはれそめてみね高くなほととぎす哉

山家郭公

龜山殿
當座

昨日までみやこに待ちしほととぎすけふこの宿に初音きよきくしききつる

江 笠

あしの葉におく白露の玉江にはいとどほたるの影ぞみだるる

郭公遅

つれなさもなほうかるべし郭公ききつと告ぐる人なからなむ

河五月雨

あすか河昨日のふちは今日もなほ瀬になりがたき五月雨の頃

夏 月

うたた寐はしばしと思ふかたしきの袖にあやなくあくる月影

雨後蟬

村雨のはるる梢のやまたかみ涼しきつゆにせみぞなくなる

秋

二星待契

心あらば河浪たつな天の川ふなでまつせまじのあきのゆふかせ

二星逢

七夕のころとまれに逢ふ夜半はつもる月日を恨みしもせじ
二星別

袖ふるはほのかに見えてたなばたの歸る八十瀬の浪ぞあけゆく
萩風

うゑおきて待たれし秋の萩の葉にくやしきまでの風の音かな
萩露

散らざらば折りてゆかまし萩が花うつろふ露を見ぬ人のため
夕霧

心あらば月まつかたのそらばかり山の端はれよあきのゆふ霧
河霧

立ちかくすそがの河原のかは霧にますげも見えぬ秋のゆふ暮
月

秋風に夜寒のつきはかげもりて床あらはなるあさちふのやど

長月のあきのしぐれは久方のつきのかつらをそむるなりけり
さやかなる絶間ばかりはすくなくて浮雲つたふあきの夜の月

潯陽江月

波の音も夜はふけぬらし舟とむる月の入江のあきのうらかせ
山月

あしびきの山より月は出でにけり松にかつらの枝をまじへて
曉惜月

いるほどをいかでとめまし山の端に待つはたのみも有明の月
栽菊

栽ゑてみるわれも千年をへぬべきは老いせぬきくの花の上の露
擣衣

見る人のねぬよのころも音すなりたよりも月になほやうつらむ
暮秋月

なにせむに月になれける我が身ぞとくやしきまでにをしき秋哉

秋殘二夜

をしみかねこよひの秋はあけぬとも明日のわかれの曉のそら

海邊雁

あま小舟こぎゆく波のをちかたに聲をほにあげて雁もなくなり

終夜擣衣

夜もすがら音ぞたゆまぬ月かげ（ついで）にあくるまでとや衣うつらむ

深山鹿

み山にもすめば住まるる秋なれやあはれにたへで鹿のなくなる

秋時雨

長月のありあけの月のなごりをも今はしぐれに誰れながむらむ

暮秋時雨

今よりは夜寒のしぐれふりそめて秋の日數もあらし吹くなり

萩 露

枝ながら見むよりはなほ白露のけぬとも折らむ秋はぎの花

野徑月

ほしわびぬささわくる野の白露にぬれての後のそでの月かげ

曉月聞鹿

あけがた（はのかさき）の影したふらし月かげも有明のみねのさをしかの聲

栽 菊

おなじくば千年もゆづれ山路よりねこじてうゑしやどの白菊

秋 獸

さをしかは妻こひわびぬ草がれの小野の夜さむの秋風のころ

瀧 月

たきつせの音こそたえね吉野川月のむすべるあきのこほりに

月前擣衣

われならぬ人もねぬ夜やふけぬらむ惜しと思ふ月に衣うつなり

月前厭雲

月にそふ秋風もがなあまの原あたりもつらき雲やはるると

古寺紅葉

初時雨ふりぬる寺の鐘のおととくれて色そふ山のもみぢば

冬

河千鳥

さよ千鳥友よびかはす清き瀬にますげみだるるそがの河かせ

時雨

み吉野の雪氣のあらしさむからしきさの中山しぐれ降るころ

和田の原夕日のすゑの波の上にくもりてわたる村しぐれかな

落葉混雨

峯の雲ふもとの紅葉吹きませてあらしより降る村しぐれかな

寒草

おく露はあだのおほ野とみし秋の霜のまくすに嵐吹くなり

夕されば寒き野風の霜のしたに枯れても残る萩のおとかな

月前雪

吹く風にちりかひくもる冬の夜の月のかつらの花のしらゆき

海邊雪

夕しほのさしける跡と見ゆるかなみぎはをおきてつもる白雪

山家夜霜

たまぐらの間のすき間の山嵐に袖までさゆる夜半のしもかな

浦冬月

住吉の松のいはねのおきつなみこほりを月によするうらかせ

野霰

白露の玉ぬきかけし面影のあられにのこる眞野のはぎはら

山雪

花ならばたづぬる人もありなまし雪ふりつもるみ吉野の山

朝雪

白雪のふるかは野邊の朝ぼらけいづこなるらむ二本のすぎ

名所雪

時しらぬ名もふりにける富士の峯の雪にかさねてふれる白雪

野深雪

うちなびく末葉ながらにやだの野の浅茅かくるる今朝の白雪

寒夜千鳥

鳴く千鳥友よぶこゑもふけはてぬ霜夜の月のすまのうらなみ

嵐前落葉

あらし吹くひと村雲の山めぐり残る木の葉やしぐれそふらむ

戀

忍不逢戀

今は早うらみはつべきつれなさをしのぶにゆるす我が心かな

不逢戀

ながらへてあらばあふ世と頼む身のいかがはすべき憂にたへずば

絶後逢戀

命こそ契なりけれこひしなばありしながらやへだてはてまし

命あればまたもあふ世にめぐりきてふたたび鶏の音をぞ恨むる

思はずよねくたれ髪の手枕（まい）にまたかきやらむちぎりありとは

忍久戀

年ふとも人にかたるな知るといへば袖ばかりにはゆるす涙を

寄月戀

忘らるる身をこそ月にかこちつれ人をうらみぬ心よわさに
戀しさのなぐさめ難き光かな見しおなじよに月はかはらで
誰が袖にかげかよふとも夜半の月涙ありとはひとに語るな
うき人の同じながめの月なればつらし我が身の袖にやどさじ
初尋縁戀

色に出でむたよりをぞ待つむらさきの一本ゆゑを尋ねそめつつ

疑眞僞戀

ちぎれどもまたいかならむとばかりに頼めもはてぬ夕暮の空

顯戀

顯ればこの世にだにも生けらじと誓ひてし身もながらへにけり

寄草絶戀

あはれにも道の芝草しげるかなつゆうちはらひ通ひしものを

寄枕戀

せく涙たのむ枕のそれさへや袖よりほかにまたも朽ちなむ

寄琴戀

音にたてて戀ひぞわびぬる唐琴のおのづからだにあふ夜なければ

不逢戀

をしからず思ひよわらぬわが命今日逢ふこととかへて捨てむは

忍戀

玉章の道さへたゆる關守はまして逢ふ夜をえこそゆるさね

顯疑人戀

人傳も今ぞくやしきもりし名はそれゆるとのみかこちなされて

忍絶戀

よしさらばたえぬるかたは歎かじよ忍びはてしを情にはして

契戀

かはらむにいけらばこそは契りしをよし恨みむと後も頼まめ

夢中戀

戀しさのねてや忘ると思へどもまた名残そふ夢のおもかけ

忍似疎戀

忘るやと思ふとだえも歎かれずさぞせきもりのぬる夜なからむ

欲絶戀

日にそへて勝る夜がれのつらさにぞこれよりたえむ後は知らるる

一夜逢絶戀

ほのかにもまだ見ざりしを夢になしていかにぬる夜と猶や恨みむ

別戀

忍ぶれば名残おほくていづる夜をいそぐわかれと人や恨みむ

欲言出戀

うち出でてしらせやせまし沖つ波かかる思のしたにありとし

忍戀

いかにせむわが心なる涙だに忍ばばともにうき名もらすな

忍不逢戀

いかにせむ逢ふ夜もなみのみをつくしよそに忍ぶのうらみだにせず

祈戀

神垣にゆふしでかくる榊葉のかはらぬ中になびけとぞおもふ

不逢戀

つれなくて年ふるなかのしるしとは祈りやはせし三輪の神杉

忍待戀

まちわぶる心ひとつのくるしさもいはぬながめの夕ぐれの空

夢中逢戀

見るほどは夢とも知らぬ面影のさめてかなしきうたたねの床

契待戀

頼めつつこの夜の床にこひしねとするわざならし君がつれなさ

絶戀

あふことを猶まつ身とや思ふらむ命ばかりのさてもたえすば
絶後待戀

待ちなれし心ばかりはかはらねど人こそあらね夕ぐれのそら

寄篠戀

契あれやいなの小篠のかりまくらそのひとふしは忘れしもせず

寄山戀

うかりける契はすゑの松山にあだしこころのなみこえにけり

毎夕待戀

おのづからまたぬ夕もありなまし入相のかねの驚かさずば

寄月戀

曇らぬもくもるも同じなみだにてうき身にわかぬ袖の月かげ
つれなくて命もあらばありあけの月をふたたび別にや見む

思ひいでて同じ心にみる人はありやなしやと月にしるむはとはばや

夢中別戀

かこつべき鶏の音もなしうたたねの夢にあふ夜のさむる別は

いつはりの夕

待ちわびて夕ぐれつもあるいつはりは我が身やこりぬ人やつれなき

月前待戀

偽にふけゆくほどの知らるれば待つ夜のつゝは月の影をながめじ

寄月忍戀

人目にはいかにもらさむ月にこそ心よわさのなみだなりとも

契戀

わすれじと行末ちぎることの葉をおもひあはせむ命ともがな

憑契戀

偽とおもふともなほながらへむ命のためにたのみこそせめ

絶戀

いつはりの言の葉だにもなき時ぞげに絶えはつる契とは知る

曉戀

誰れかいとふ獨ぬる夜のねざめにはつらからで聞く鶏の八聲を

寄月待戀

ふけにけりたれに契りて出でぬらむ人はつれなき山のはのつき

夢逢戀

さめてなほ歎かむためか逢ふと見て人なきとこの夢の名残は

恨戀

いかにせむつらき心のはながたみめならぶ人にうつる契を

近戀

かひぞなき思はぬ中のあし垣は近きも遠きへだてとおもへば

雜

窓竹

窓はらふ竹の葉風の夜な夜なは心とさむる夢ぞすくなき

松上鶴

松の葉の雪かともればしろたへに千年もきえぬつるの毛衣

山路旅行

とまるべき宿をあらしにこと問へばなほ山深しいりあひの鐘

野旅行

はるかなる野原の末の夕けぶり立つをしるしに宿やかからまし

曉旅行

みやこをば鳥の音またでいでつるを山路の末の横雲の空

祝龜山殿

愚藻

さき草のみつ葉よつばに龜の尾やさかゆく宿と君は千世ませ

寄鶴祝

あしたづの聲ものどけし住の江のまつ程ひさに萬代やへむ

暮林鳥

夕嵐のさむき林のむらすずめやどりあらそふこゑ聞ゆなり

船

あけぬればこぎわかれ行くとまり舟一夜の波の契をぞおもふ

樵客歸里

谷ふかきつま木のみちの夕嵐もたもとにさむくかへる山人

松顯千年瑞萬里小路殿曆自然相生時御歌也

行末のちとせをとものにさかゆべき宿のしるしの軒のまつが枝

竹遐年友

萬代もかくて經ぬべし竹の葉にかせおとづる春ののどけさ

後二條院御百首

現存七十四首

春

立春氷

あらたまの春くさたつかたの谷風にとくるこほりの水のしらなみ

雪中若菜

あすもなほ雪は消えじとあづさ弓おして若菜を今日や摘ままし

門柳

おもひやるむかしの門の春雨にくる人たゆぞなきたまのをやなぎ

二月餘寒

み吉野はなほ山寒しきさらぎの春はるも雪氣ののこるあらしに

故郷春月

人すまぬ庭はよもぎに埋もれて軒端にかすむはるの月かげ
見花

花ならし雲にはあらぬ白雲のかすみて白くはるはたなびくみよし野の山
惜花

やよやまで風のまにまにちる櫻ことしあだなるならひ忘れて
落花

さくら花ちりてうつろふ庭もせに吹くは色あるはるの夕風
春

年をへて同じ春立つ今日なれどあらたまるとは誰れかいひけむ
あしびたくけぶりなそへそ難波人わが住む里もたどるかすみ
梅の花ゆくへも知らずにはふらしあまつ嵐のかよふかざりは
かつらぎやたかまの空の朝ぼらけ花よりうへはよくものもなし

霞

わたの原行方も知らずはてもなし沖つかすみの春のあけぼの

若菜

白妙に袖ふりはへてこよろぎやめざしもはると磯菜摘むなり

梅

梅が香をしるべにはして知りしらす何かあやなく宿はわくべき

花

色まがふ雲なへだてそ花のあたり見つつくらさむ三吉野の山

夏

待郭公

われならぬ人も待ちけり郭公としにまれなる初音とおもへば

寐覺郭公

よしさらばつれなかれとて郭公またぬ寐覺にさすがなくなり

里 螢

飛ぶほたるすくも焚く火に數そひぬあしやの里の夕やみの頃

夏

わが宿の花たちばなに降る雨のかをる雫にたちやぬれまし

郭 公

ほととぎす幾聲なきつ大原やをしほの山のむらさめのそら
白雲のみちゆきぶりの郭公たがことづてのことかたるらむ
五月雨の晴間まち出でて山の端に雲より高くなきほととぎす

夏 月

しろたへのいさごの霜のおきゐつつ月見る程は涼しかりけり
にはかにも入日に雲のかかるかないまやとをちの夕立のそら

夕 立

なる神のこゑのとをちになるままにふりすぎてゆく夕立の雨

秋

秋 夕

やどごとの夕ぐれとはむ秋といへば我れにかぎらず物や思ふと

山 初 雁

ながめわびぬなきすててゆく初雁の翅にうすき山の端の雲

谷 月

中空にすまぬかぎりは枝しげき谷には月のかげぞもりこぬ

秋

けふくれぬやどやからまし草枕たごのいり野は蟲もなくなり
秋の嵐さむきあさけの梢には木の葉すくなくなりまさるなり

萩

とふ人を待つとせしまに日數へて下葉もみづる秋はぎの花

白露のをかべのすすき初尾花ほのかになびくときはきにけり

秋かせの寒きあさけにきにけらし雲雲にきこゆるはつかりの聲

秋風は尾上の松におとづれてゆふべの山をいづるつきかげ
いとどなほ月すめとのあらしかな残る雲なきあきの大空
さらしなや姨捨山もさもあらばあれただ我が宿の雲の上の月

誰れならむさきだつ駒のおとはして霧にへだつる瀬田の長橋

流れゆく末はそまらず立田川もみちのかげをあらふしら波

しぐるらし紅葉の錦しきしまの山どりのをのなが月のそら

いかでなほ立田の紅葉しぐるらむこれより深き色はあらしを

あかつきの鐘まつ程のときのまを秋と思ふぞかなしかりける

冬

初冬時雨

今朝よりはまなく時雨のちはやぶる神無月とはむべもいひけり

日かげとほき垣根がくれの夕霜もむすばほれたる花薄かな

夜もすがら聞へもいらぬわが袖になれて有明の月ぞこほれる

冬すゑ吹きよせて木の葉のしたに冬草の残るを見する山おろしの風
霰

あらし吹くならのひろ葉の冬枯にたまらぬ玉は霰なりけり
雪

かきくらし降りつる雪のはるる夜に千さとを見せてみがく月影
歳暮

むかしへとなりゆく年の惜しきこそ花もみちにも猶まさりけれ
雪

さゆる日のかさなる雲にこの夕雪ふりきたる山おろしのかせ

戀

寄月戀

たのめすばねなまし月とながめてもうき僞にふくるそらかな

寄山戀

わが戀はなほやましなのおとは川あふさか山をこえむかぎりは

寄草戀

つれうかりけさもなき人の心のたねしあれば植ゑぬもいにおふるこひ忘れ草

戀

涙をやあやしと月はやどるらし物おもふころの袖と知らずば
時雨には松ももみづる世ともがなつれなき人を今こころみむ
あふことをわが心にもまかせねば戀てふものぞくるしかりける
よしさらば戀ひ死ぬとだにかこたれず惜まれぬ身はいふかひもなし

忍戀

あらはれむものゆるやがて忘ればと疑ふかたにしのぶ年月

不逢戀

わびぬればまたぞ戀しきつれもなき人をねたしと思ひすつれど
こひ死なむ命のさきにあふといふなき名をだにもたつと聞かばや
待 戀

いつはりにならむ夕のわが命あすまでありといかがきかれむ
遇不逢戀

つれなしとこひられし世は昔にてこころよわさの身をぞ恨むる
忘 戀

はかなくぞ一夜二夜の（たぐひ）よかれをも身にならはずと昔うらみし
雜

名所松

いまの世を昔かはらぬ高砂のまつのこころにいかが見るらむ
海邊夕

見渡せば入日（たぐひ）は波にいりはてて下かげくるるいさり火のかけ

神 祇

人よりはあはれと思へかすが山しかもたのみをかくる年月

釋 教

いつかすまむ心の水に風たちてやどりさだめぬ月のすがたは

竹

おなじくば八百萬代をゆづらなむわが九重の庭のくれたけ

山

春は花秋はもみちのからにしき立田の山の名にこそありけれ

述 懐

人としていかでか世にもありふべき五の常のみちはなれては
住吉の神もあはれと思はなむこころにかくる和歌のうらなみ

夢

いかにしていにしへ今の見えつらむ夢のただちはまだ悟り得ず

神 祇

神風やいほすすの川いまもかもきよき流をたのむわれなり

釋 教

さとりべきその源はひとつにてさまざまにとく道やかはれる

後二條院御集拾遺

嘉元元年百首の歌よませ給うけるに立春の心

を 集 補 葉

春たつと思ひあへぬにのどけきは出づる朝日や空にしるらむ

人人に百首の歌めされしついでに簷梅新後 集

木の本はやがて軒端に近ければ風のさそはぬ梅が香ぞする

谷 鶯後集 拾遺

山ふかき谷のうぐひす出でにけりみやこの人に春や告ぐらむ

題しらす新千 載集

春霞たなびく谷にかへるなり雪より出でしうぐひすの聲

夕柳玉葉 集

のどかなるゆふべの山はみどりにて霞になびく青柳の絲

春雨を續千載集

淺みどりあまねき恵いろに出でて野なる草木に春雨ぞふる

山花をよませ給うける新後集

吉野山そらもひとつに匂ふなり霞の上のはなのしらくも

後宇多院正安三年二月二十七日日吉社に御幸

ありて次の日志賀の山の櫻につけて「君ゆゑと

今日こそ見つれ志賀の山かひある春に匂ふ櫻

を」と奉らせ給うける御返し新拾遺集

志賀の山風をさまれる春に逢ひて君が行幸を花もまちけり

折花といふことを詠ませ給うける同

悔しくぞ移ろふ花をたをりつるあやなく袖の雪とふりけり

正安三年の春良助法親王櫻の枝につけて「九重

に色をかさねて匂ふらし花も時しる御世にあ

ひつつ」と奏しける御返し新後集

今ぞみる君がころもをりをえて春の時しる花のひとえだ

浦春月といへるころを續後拾遺集

葦火たく難波の浦の春の月けぶりのほかにかすむなりけり

春の御歌の中に風雅集

雲雀あがる山の裾野の夕暮にわかばのしばふ春風ぞふく

里山吹を新後集

くちなしのいはでの里は山吹の花さくよりや名づけそめけむ

百首の御歌の中に更衣を風雅集

櫻色の衣はうへにかふれども心に春をわすれぬものを

題しらす新拾遺集

山かげや田子の小笠をふく風もすすしき暮に早苗とるなり

題しらす新後拾遺集

鳴きぬべき頃と思へば時鳥ねざめに待たぬあかつきぞなき

郭公の歌とてよめる新千載集

初音まつ我れにてしれば時鳥人よりさきとえこそうらみね

百首の歌よませ給うける中續後拾遺集

時鳥その神山のそのかみもかばかり待ちし人はありきや

杜郭公といふことをよませ給うける新千載集

時鳥たれにつげてかつれなしといはせの森の村さめの空

夏月をよませ給うける新後拾遺集

月のゆく波のしがらみかけとめよ天の河原のみじか夜の空

水邊納涼續千載集

涼しさは夕暮かけてむすぶ手の袖にせかるる山のした水

正安三年七月七日七首の歌めしけるついでに

よませ給うける新千載集

別路のかたみもとめす夕月夜あかつきやみの星合のそら

題しらす新後拾遺集

幾秋かわたし來ぬらむ天の河おのがよりはのかささぎの橋

七夕露をよませ給うける新後拾遺集

たなばたのちぎり待つ間の涙より露はゆふべの物とやはおく

秋の御歌の中に續千載集

いつしかと初秋風のふきしより袖にたまらぬ露のしら玉

同新千載集

山本の稻葉の末の秋の露いくよつもりて夜寒そはまし

月の御歌の中に玉葉集

更けぬれどゆくとも見えぬ月影のさすがに松の西になりぬる

題しらす新後拾遺集

後二條院御集拾遺

鶉なく野原の淺茅うちなびき夕露もろくあきかせぞふく

海月といふことをよませ給ひける新集後

藻しほやく煙もたえて松島やをじまの浪にはるる月かげ

百首の歌めされしついでに聞蟲といへるこころを同

きりぎりすすることも見えぬ庭の面の暮れゆく草の蔭になくなり

題しらす新千載集

ながめわびぬ秋も名残と夕日さす雲の旗手はうちしぐれつつ

秋風も夜さむに吹きぬさを鹿の妻とふ萩の花やさくらむ

百首の歌めしけるついでに秋田といふことを

よませ給うける同

月残る門田の面のあけがたに霧のうちなる鳴のはねがき

隣搦衣といふことを新集後

よそよりは同じ宿とぞ聞ゆるらむ垣根へだてて衣うつこゑ

百首の御歌の中に玉葉集

今よりは衣うつなり秋風のさむきゆふべの岡のへのさと

題しらす續千載集

いかがまたおもひすてては過すべきとまらぬ秋の別なりとも

百首の御歌の中に風雅集

もみぢ葉のみ山に深くちりしくは秋のかへりし道にやあるらむ

正安四年九月のころ遊義門院紅葉を折りて内

に奉らせ給ふとて「知るらめやしぐれぬさきの

もみぢ葉は心の色の染むるちしほを」と聞えた

まひける御返し新千載集

見てぞしる時雨にはあらで染むときく心の色の深き紅葉ば

冬の御歌に風雅集

神なびの山下風のさむけくにちりかひ曇る四方のもみち葉

題しらす新後撰集

萩が花ちりにし小野の冬枯に霜のふる枝の色ぞさびしき

詩歌を合せられける時九月十三夜をよませ給

うける新後撰集

名にしおふ秋の半はすぎぬれど今宵も月はためしなりけり

江月といへるころを新後撰集

ほにいづる萩の上風うちそよぎ入江夜さむにすめる月影

題しらす同

草も木も冬枯さむく霜ふりて野山あらはに晴るる月かげ

千鳥をよませ給うける新後撰集

關の戸はまだあけやらで清見瀉そらより通ふさよ千鳥かな

曉千鳥といふことをよませ給うける新後撰集

浦遠くわたる千鳥もこゑさむし霜のしらすのありあけの空

氷初結といふことを新後撰集

網代木にいざよふ浪をたよりにて八十字治河はまづ氷りつつ

冬の歌とてよませ給ひける新後撰集

さらでだにふみからしてし道のべの草を冬野に結ぶ朝霜

湖水を新後撰集

さざなみや比良の山かせさゆる日は汀こほりてよる舟もなし

冬の歌の中に新後撰集

いとどまた冬ごもりせるみよし野の吉野の奥の雪のふる郷

題しらす新後撰集

天の河月はよどまぬ影ながら雲のみをこそまづ氷りけれ

ひとびとに百首の歌めされけるついでに海邊

雪新後撰集

磯邊なる松の下枝にふる雪のけぬとも見えすかかる白浪

依雪待人といへることを新集後撰

跡つけぬほどをも見せむ庭の雪人のとふまで消えずもあらなむ

夢中逢戀といへることを同

現には逢ふよもしらず見る夢をはかなしとては頼みこそせめ

寄山戀といへる心をよませ給ひける同

關なくてただ逢坂の山ならばへだつる中に物はおもはじ

忍契戀といふことをよませ給ひける同

誠かとまたおしかへし問ふほどの人目のひまもなき契かな

百首の歌めされしついでに人傳恨戀同

人傳にいへどもいとどつれなきは我が思ふ程や恨みざるらむ

題しらす續千載集

戀ひ死なむ命のさきにあふといふ無き名をだにも立つと聞かばや

戀の歌の中に同

限あれば今ぞ重ぬるせきかへし涙にくちし夜はの衣手

正安四年六月五首の歌合に忍別戀といへる心をよませ給ひける同

關守はあかつきばかり打ちもねよ我が通路をしのぶ別に

戀の御歌の中に風雅集

言ひいでむ言の葉もなほ忍ばれて心にこむる我が思かな

題しらす同

いかにせむ世に偽のあるままに我がかねごとを人の頼まぬ

正安三年六月八日うへのをのことも題を探り

て詩歌をつかうまつりける時契戀のころを

よませ給うける新集千載

聞きたびにこりず猶も頼まるる憂きにはなれし契なれども

題しらす新千載集

顯はればいかにせむとか人しれぬ我が通路の數つもるらむ

戀の歌の中に新後拾遺集

いとど猶なげかむ爲か逢ふと見て人なきとこの夢の名残は

忍絶戀を同

しばしこそ人目思ひし宵宵の忍ぶかたより絶えや果つべき

忍不逢戀といふことを詠ませ給うける新續古今集

恨むなよ人目をなげく折折は我が心なる夜がれならぬを

契行末戀正安四年六月歌合

忘れじよ今日や明日やと知らねどもいきて命のあらむかぎりは

顯後絶戀同

今しばし忍びもはてぬくやしきもみじかかりける契にぞしる

海邊夕といふことを新後拾遺集

蟬のすむ里のしるべやこれならむくるれば見ゆる漁火の影

湖月のころを新後拾遺集

志賀の浦や氷くだけで秋風の吹きしく浪にうかぶ月かけ

雜の御歌の中に風雅集

浦の松木の間に見えて沈む日の名残の波ぞしばしうつろふ

旅泊の心をよませ給うける續千載集

なごの浦にとまりをすればしきたへの枕に高き沖つしら浪

神祇のころを詠ませ給ひける同

世のためもあふぐとをしれ男山むかしは神の國ならずやは

題しらす同

難波潟あしべはるかに晴るる日は聲ものどかにたづぞ鳴くなる

雜の御歌の中に新後拾遺集

高砂の尾上にたてる松が枝の色にや經べき君がちとせは

ひとびとに百首の歌めされけるついでに神祇
を新千載集

ちはやぶる神のすごもに霜さえしその曉はいまもわすれず
御歌ども書きおかれたる巻物のおくに新千載集

我が身世になからむ後にあはれとはたれかいはまの水莖の跡
一條内大臣大將辭し申しける時表の箱を後二
條院に參らせおきけるをみまかりて後返し給
はりてければ權大納言内經「みるからにおつる
涙の玉匣みにつたふべき形見なりけり」とよみ
て奉りける御返し玉葉集

形見とて返すも世世の家の風ふきつたへよと思ふとをしれ
位におましましける時七月七日人人題をさぐ
りて百首の歌よみ侍りけるついでに對月忍昔

ながめつつ猶もむかしを忍ぶべき月をへだつるわが涙かな
といふことをよませ給うける續千載集

五月五日爲道朝臣みまかりて後三年めぐりぬ
る同じ日數もあはれにて前大納言爲世につか
はさせ給ひける風雅集

今日といへば別れし人の名殘よりあやめもつらきものをこそ思へ
龜山院へ行幸ありて歸らせ給へるに仙洞より
「したはるる名殘にたへす月を見れば雲の上に
ぞ影はなりぬる」と聞えさせ給ひける御返し鏡增
君はよし千歳の齡たもてればあひ見むことの數もしられず

花園院御集

春

百首御歌の中に春

身につもる數こそかはれたちかへり今年も同じ春はきにけり

霞

あまの原おほふ霞ののどけきに春なるいろのこもるなりけり

四方のこする霞むを見ればまだきより花の心ぞはや匂ひける

鶯

春を經ていかなる聲になくなれば初鶯のいやめづらなる

雪中鶯

花園院御集

鶯のおのがなく音は春なれどねぐらの竹をうづむしらゆき

春

まだ咲かぬ梅の梢にうぐひすのどけきこゑは今ぞきこゆる
春の日ののどけきそらはくれがたみいたづらに聞く鶯のこゑ

梅

わがながめ何にゆづりて梅の花さくらもまたでちらむとすらむ

柳

夕ぐれの春風ゆるみしだりそむる柳がすゑはうごくともなし

春 雨

のどかなる睦月の今日の雨の音に春の心ぞふかくなりぬる
浅みどりみじかき草の色ぬれてふるとしもなき庭の春さめ
夕がすみ霞みまさると見るままに雨になりゆくいり相の空
何事をうれふとなしにのどかなる春の雨夜は物ぞわびしき

花も見す鳥をもきかぬ雨の中のこよひの心なにぞはるなる

春

野邊しくしにして草のみどりのすゑとほみ霞をわけて雲雀おつなり

つばくらめ簾のほかにあまた見えて春日のどけみ人影もせず

花

散ることは早しと思ふを櫻花ひらくるほどのあやにひさしき

かをりにほひのどけき色を花にもて春にかなへる櫻なりけり

軒深き花のかをりに霞まれてしらみもやらぬやどのあけぼの
くれかかる花の匂をしたひ顔にさらにうつろふ夕日かげかな
春風は吹くとしもなき夕ぐれにこすゑの花ものどかにぞちる

春

水底のかはづの聲もものふりてこぶかき池のはるのくれがた

このごろの藤山吹の花ざかりわかるるはるもおもひおくらむ

夏

百首御歌の中に

立ちかふる今日ともいさやしら重昨日の花もそめぬ袂は

時鳥

なれもまたこの夕暮をまちけりな初音うれしきやまほととぎす
思ふことありあけの空のほととぎすわが爲とてや今きなくらむ

百首御歌の中に

待ち出づる雲間の月にほととぎすをしむ初音もえやは忍ばぬ
都人さこそまつともほととぎすおなじみ山のともなわすれそ
夏山や木立すすしきむらさめのゆふべを時となくほととぎす

風わたる田の面の早苗色さめて入日のこれるをかのまつばら

五月雨ははれむとやする山の端にかかれる雲の薄くなりゆく

夏夜

秋の夜をさびしきものと何か思ふ水鶏こゑする宵のつきかけ

夏月

ふくる夜にはの真砂は月しろし木蔭のきに水鶏こゑして

照射

ともしするほぐしの松のつきもあへずは山が嶺は雲あけぬなり

螢

とぶ螢ともし火のごともゆれども光を見ればすすしくもあるか

夏晝

庭の上の真砂にみちて照れる日の影みるなべにあつさまさりぬ

夏夕

蚊遣火の煙まさると見るほどにくれぬるならしいりあひの聲

夕立

吹き過ぐる梢の風のひとはらひこゑまで涼しよそのゆふだち
遠近夕立

とほつ空に夕だつ雲を見るなべにはやこの里も風きほふなり
六月祓

みそぎ川流れて早くすぐる日のけふ六月は夜もふけにけり

秋

初秋

花もまだき草のまがきの朝ぼらけ露のけしきに秋はきにけり
夕日さす梢のいろに秋見えてそともものもりにひぐらしのこゑ
秋はまだあさけの庭の池の面にはやすさまじき水のいろかな
時わかぬ竹の小枝にふく風のおとしもあきになりけるかな
いとはやも風すさまじみそれとなき蟲も籬にややなきたちぬ

七夕

更けぬなり星合の空に月はいりて秋風うごく庭のともし火

目にかき面影ながら年もへぬ雲井のにはのほしあひのあき
鵲の渡せる橋のひまをとほみあはぬ絶間のおほくもあるかな
大方の秋てふ秋のながき夜をこよひともがなほしあひのそら

元徳二年七夕七首講せられける時七夕草

更けぬるか水かげぐさのうち靡き涼しくなりぬあまの川かせ

七夕船

あまの川かはべの霧のふかき夜につまむかへ船今か出づらし

秋

世の色のあはれは深くなりけり秋は幾日も未だあらくなくに

川とほき夕日のやなぎ岸くれて鷺のつばさにあきかぜぞ吹く
ぬれて落つる桐の枯葉は音をおもみあらしはかるき秋の村雨

萩

秋風の軒端の萩よ何ぞこのうれへのたねをうゑおきにける

萩

身こそあらめ花は昔をわするなよなれし戸口の庭のあきはぎ

薄

穂に出でてわれのみ招く絲すすきくる人あれなふるさとの秋

秋夕

物ごとにわれをいたむるゆゑはあらし心なりけり秋の夕ぐれ

沈む日のよわきひかりはかべに消えて庭すさまじき秋風の音

秋

秋かせによわき尾花は動けども月にのどけみ更けすめる夜半

秋になる寐覺ぞいとどうれはしき物思ふ身にはありもあらずも

蟲

夜を寒みいねすてあれば月影のくだれるかべにきりぎりすなく

月前蟲

月すみて風はたさむき秋の夜のまがきの草にむしのこゑごゑ

秋

草むらの蟲のこゑよりくれそめて眞砂の上ぞ月になりぬる

きりぎりす聲かすかなり曉のかべにすくなきありあけの影

駒牽

昔みし雲井はとほくへだつれど面影ちかきもちづきのこま

月

風の音も身にしむ夜半の秋の月ふけてひかりぞなほまさりゆく

くるる空にまちつるままの眺よりすだれおろさぬ月の夜すがら

照すらむ千里の人の秋のおもひ月にやうつすかげのかなしき

菊

咲きやらでしばしもあれな庭の菊待つべき花のまたもあらなくに

秋

ちりつもる庭の紅葉ばのこるとも秋の日數はとどまりしもせじ

九月盡に菊を御覽じて

うつろはで庭の白菊のこらなむ秋のかたみとあすよりは見む

冬

時雨

夕日さす落葉がうへにしぐれきて庭にみだるるうきぐものかけ

木の葉ぬれてそそぐともなき村時雨さすや夕日の影もさながら

落葉

木の葉こそろくもならめ夕あらしわが涙さへたえずもある哉
散りまがふ木の葉にもろき音よりも枯木吹きとほす風ぞ淋しき

冬

冬をあさみまだこほらねど風さえて漣さむきいけの面かな
この夜半やふけやしぬらむ霜深きかねの音して床さえ勝る
空はしも曇ると見えぬあさあけの霜にうすぎる世の氣色哉

冬草

それと見し霜の朽葉もなほ落ちて古枝ばかりの庭のはぎはら
雪はまだき唯冬枯の草のいろのおもがはりせぬ庭ぞさびしき

冬曉

あかしかぬる時雨のねやのいく寐覺さすがに鐘の聲ぞきこゆる
影うすき有明のつきになくとりの聲さへしづむ霜のをちかた
霜にとほる鐘のひびきを聞くなべに寐覺のまくらさえ勝るなり
霜にくもる有明がたのつきかげにとをちの鐘もこゑしづむなり

冬曙

ひびき残るとをちの鐘はかすかにて霜にうすぎる曙のそら

冬 朝

おきてみねど霜深からし人の聲の寒してふ聞くも寒き朝あけ
夜もすがら雪やと思ふ風の音に霜だにふらぬ今朝のさむけさ

冬 夕

あらし吹き霰こぼるる今日のくれ雪のこころや近づきぬらし
霜がれの尾花がにはに風ふれてさむきゆふ日は影さしぬなり

冬 夜

霜のおくねぐらの梢寒からしそともものもりに夜がらすのなく
星きよきこすゑの嵐くもはれて軒のみしろきうすゆきの夜半
夜半さむみ嵐の音はせぬにしもかくてや雪のふらむとすらむ

冬 月

空の海雲の波もやこほるらむ夜わたる月のかげのさむけさ

雲こほるこすゑの空の夕月夜あらしにみがく影もさむけし

百首御歌の中に

むらむらにこほれる雲は空さえて月影みがく木木の白雪

霰

さえくらす嵐に雪やちかからしさきだつあられ軒におつなり

雪

野山みな草木もわかす花のさくゆきこそ冬のかざりなりけれ
冬がれの草木のときをあはれとや花をあまねくふれるしら雪
雲のゆふべ嵐のこよひふりそめぬ明けなば重の幾重かも見む
朝日さす松のうれよりおつる雪に消えがたにしも積る木の本

曉 雪

降りうづむ雪の野山は夜ふかきにあくるか鳥の遠里のこゑ

曙 雪

目に近き軒の上より白みそめてこずゑかをれる雪のあけぼの

うつりにほふ雪の梢のあさ日かげいまこそ花の春はおぼゆれ
夜雪

軒の上はうす雪しろし降りはるる空には星の影きよくして
風前雪

吹きみだしはらひもあへぬ竹の葉のあらしの上につもる白雪
雨後雪

今朝の雨のなごりの雲やこほるらむくれゆく空の雪になりぬる
山雪

岩も木も姿はさすが見えながらおのがいろなき雪のみ山邊
野雪

ながめやるかぎりも見えず霞みゆく野原がすゑは雪としもなし

浦雪

波の上はあまざる雪にかきくれて松のみ白き浦のをちかた
杜雪

雪にだにつれなくてやは山城のときはの森も色かはるなり
山家雪

人はとはぬみ山の庵にあはれなほところもわかす降れる白雪
田家雪

末とほき蒨田の面の雪の中にたてるや庵のみるもさびしき
閑居雪

軒の松通ふあらしの音だにもたえて幾日のゆきのふるさと
社頭雪

たのむゆるゑの深き心はへだてぬをいつかみかさの山のしら雪
松雪

常磐木のその色となき雪の中も松はまつなる本ノマツすがたぞみゆる

雪中鳥

降りつもる雪のこすゑにゐる鳥の羽風もをしき庭のあさあけ

雪中獸

おき出でぬねやながら聞くいぬの聲の雪におぼゆる雪の朝明

雪中述懐

いたづらにふる白雪を集めもたぬわが光なみ世さへくもれる

冬

さむからし民のわらやを思ふにはふすまのうちの我れもはづかし

雪中懷舊

昔をばうづみやのこす白雪のふりにし世のみうかぶ面影

炭 竈

立ちのぼる煙のすゑをあはれとも誰れかはとはむ小野の炭竈

歳 暮

わきてしも惜むとなしに哀なり今年もかくて暮れぬと思へば

除 夜

年くると世はいそぎたつ今宵しものどかに物のあはれなる哉

戀

初 戀

知らざりし眺やなにぞよしなしに物思ふ身にはならじと思ふを

忍 戀

人まなみ唯にはいはぬその色を見知らぬにして過ぎむとやする

戀

いふきはほおよばぬうさのそこ深みあまる涙を言の葉にして

わが心われに随ふものならばつらき人をば戀ひすもあらまし

むば玉の夜渡る月のよそにのみ影ばかり見てやまむとやする
不逢戀

われはおもひ人にはしひて厭はるるこれをこの世の契なれとや

夕戀

思ひたえてまたぬも悲し待つもくるし忘れつつある夕暮もがな
待戀

あすのうさも我が心から悲しきに今宵よこよひとへやとぞ思ふ
互忍待戀

待つもとふもつつむにふくる時のまよあぢきなからぬ一夜ともがな
戀

頼めしも忘れむと思ふけふの日をくるとなつげそ入相のかね
わが思なぐさまなくに何しかもこぬものゆゑに頼めおきけむ

たまさかの夜をさへわくるかたのあれや鳥の音をだに聞かぬ別路

あかなくの今朝の名残のなぐさめに知らぬ人をもまた頼めぬる
別戀

これほどもまたはいつかの別路をくれよのちよのやすの頼めや
戀

うしと見し一夜の夢の名残よりこころにさめぬ物をこそ思へ
偽戀

いまぞ思ふたのみしうちのいくあはれかざるが上の情なりける
誓戀

うきがうへに歎くぞなほもあはれなる誓ひし末を人のためとて
恨戀

うきにたへず恨むればまた人も恨む契のはてよただかくしこそ
かひあらじいはじよしとは思へども今一たびは恨みてもみむ
ひとすぢに思ひしらぬになしやするいはぬ恨も同じつらさを

をしやわれもあはれかなしのいくふしを一つ恨のうちになしぬる

絶 戀

われやたそ怪しやつひにたえはてばあらしと思ふ今日までの身よ
まちすぐす月日の程はあぢきなみ絶えなむとてもたけからじ身を

戀 契

うしとすつる身を思ふにもさらになほあはれなりける人の契よ

戀 恨

あさくしもなぐさむるかなと聞くからに恨の底ぞなほ深くなる

戀 涙

こひあまりわがなく涙雨とふるやこのくれしもの雲とづる空

戀

思ひつくす思のゆくへつくづくと涙ぞおつるともし火のかけ
思ひつくしあはれに物のなりたちてすべて涙の落ちもとまらぬ

世世のちぎりいかが結びしと思ふたびに始めて更に人の悲しき

戀 獸

里の犬のこゑをきくにも人知れすつつみし道の夜半ぞこひしき

寄 春 戀

色音にもうれへのすすむ種としてわれにもものうき花鳥のはる

寄 冬 戀

とちつもるこほりも雪も冬のみをとけむごもなき我が思かな

寄 曉 戀

いまもこの有明の空に鳥はなけど別れし人に又もあはぬかな

寄 朝 戀

いかななる今朝のながめぞ今宵わが見るとしもなき夢の名残に

寄 夕 戀

西の山にくだる夕日の影みれば今日はたくれぬいもを見なくに

寄月戀

照る月はわが思ふ人のなになれや影をし見れば物のかなしき

寄風戀

なにぞこのうはの空より吹く風の身にあたるさへ物の悲しき

寄雨戀

妹が上に思ひうらぶれねすてあかすこの夜すがらの雨の音はも

寄霜戀

朝霜のむすびもはてぬ契ゆるさてこそけなめ知る人をなみ

寄煙戀

あま人のもしほの煙なびくやとおもふかたより風も吹かなむ

寄山戀

わが戀よ煙もせめてたちななむなびかぬまでも君にみゆべく

あはれいまはかくて契やつくばやましげき恨のわれもそふ頃

寄庭戀

妹まつと時ぞともなきながめしてよもぎが庭も霜がれにけり

寄松戀

人やうきさも岩代のむすび松むすばぬ世世の身のちぎりこそ

寄苔戀

そのままに拂はぬ庭の苔の色にたえにし人の跡もみえけり

戀

それまでも思ひいらすやと思ふ人の恨むるふしぞきては戀しき
こひしとも何か今はと思へどもただこの暮を知らせてしがな

寄鶏戀

わかれましたつらからましと聞くもつらし八聲の鶏の明方の聲

寄鳥戀

月になくやもめがらすはわが如くひとり寐がたみ妻やこひしき

寄犬戀

人知れずわがたちすまむ宿のあたりとがむる犬もせめてなつかし

寄人戀

思ひとりしその偽のならひゆる人にもひとのなほ頼まれぬ

寄夢戀

ゆきて通ふ夢てふもののあるならば今宵の心見えざらめやも

寄心戀

うきはさぞなあはれなるさへくるしきよ人に心のなべてならなむ

寄言戀

人を思ふ世にふりざらむ言の葉の君にはじめていはまほしきを

寄鏡戀

思ふ色のいはれぬきはをうつし見せむ鏡もがなや君が心に

寄衣戀

戀しとてかへさむとはたおもほえず重ねしままの夜の衣を

寄燈戀

さぞやげに我れぞつれなきまちよわる明方の窓にきゆるともし火

寄書戀

見しぞかしかかる言の葉そのふしと更になみだもふるき玉章

戀雜物

いとせめて忍ぶる中の玉章は思ふかぎりをかきもつくさず

戀

つらきをもげに思ひ知る中ならばいとかく人をしたはざらまし

戀しきは忍びがたきをいかげせむうきは身を知る慰もあり

ながれてのその世がたりの名取川かりの逢瀬に身をば沈めじ

知らざりし深きちぎりは移りはつる人にて人の見えける物を

戀といふ名のみはなべてふりぬめり我が思をばいかがいはまし

雑

雑地儀

足引の山をうき世のへだてにて塵のさかひにあとは絶えにき

曉

夜鳥はたかきこすゑになきおちてつき静なるあかつきのやま

雲の色ほしの光もおなじ空ののどかになるやあかつきになる

竹

風になびく竹のむらむら末見えて夕日にはる遠のやまもと
ももしきや庭に見なれしくれ竹の短き世こそなほあはれなれ

山

山松の梢をわたる夕あらし軒のひはらにこゑおちぬなり

河

よどみしもまたたちかへる五十鈴川ながれの末は神のまにまに

橋

とまる名は長柄の橋の橋ばしらくちてのちしもなほ残りける
曆應二年の春西園寺の花につけて永福門院よ
り奉らせ給ひける「咲きちるも知る人もなき宿
の花いつの春までみゆき待ちけむ」といふ御歌
の御かへし

雑

世世を経てみゆきふりにし宿の花かはらぬ色も昔こふらし
いつとてもおなじ空ゆく月のなど春はおぼろに秋はさやけき
今は身のよそにへだつる秋霧のたち野の駒はけふかひくらむ
位におはしましける時十月ばかり持明院殿へ
行幸あるべかりけるまへの日伏見院より紅葉

を籠のふたに置いて色そへむ御幸をぞまつも
 みち葉もふりぬる宿の庭のけしきに」といふ御
 歌をたてまつらせたまひけるに御返し
 尋ぬべき程こそいとど急がるれかつがつ見する庭のもみちば

雑 曉

鐘の音にゆめはさめぬる後にしもさらにさびしき曉の床

雑 夕

鳥かへるそともの森のかげくれて夕のそらは雲ぞのとけき

雑

さ夜ふくる窓のともし火つくづくと影も静けし我れもしづけし
 過ぎにし世今ゆく先と思ひうつる心よいづらともし火のもと
 むかひなす心に物やあはれなるあはれにもあらし燈火のかげ
 更くる夜の燈火の影をおのづから物のあはれに向ひなしぬる

心とてよもにうつるよ何ぞこれただこの向ふともし火のかげ

あつき

庭の日は木蔭も見えずてりみちて風さへぬるみくれ難きころ

はかなき

我れもさぞあすともなしの今日の世にあればあるてふささがにの露

おもしろき

時にふるるなさけのうちも心すむは月にしらぶる絲竹のこゑ

紅葉の賀物名

をりみだれ四方の山邊に雲もみちのかせはげしみ雨になる暮

ほたる回

降りうづむ雪に日数はすぎのいほたるひぞしげき山かげの軒

ふちばかま折句

ふる里やちぐさが庭のはなのあき垣根の露にまつむしのこゑ

たけがは物名

今年またはかなく過ぎて秋もたけかはる草木の色もすさまじ
やどりぎ同

月影はまだ中空にのどけきをはやとりきこゆ明けぬこの夜は
遠近

雲かかる遠山松は見えずなりてまがきの竹に雨こぼるなり
雑

夕日影田の面はるかにとぶ鷺のつばさのほか山ぞくれぬる

難波がた波路はれゆく夕なぎに入日まぢかきあはぢしまやま
旅

こゆれども同じ山のみかさなりて過ぎゆく旅の道ぞはるけき
太山路をゆふこえくれて宿もなし雲ゐる峯にこよひかもねむ
旅にして妹をこひしみ眺め居れば都のかたにくもたなびけり

かへり見る都やいづこ和田の原くもの波路ははても知られず

山家

尋ねくる人も音せぬ柴の戸にあけくれきくはみねのまつかせ
有明の月こそありけれみ山邊にわれのみ獨すむかとおもへば
聞き侘びぬ枕の山の夜のあらし世のうきよりは住みよけれど
常磐木のしげき緑の下にして日かげも見えぬたにかげのやど
軒につづく檜原が山に雲おりてくるるこずゑに雨おちそめぬ
おのづから人にそむける心にてつひに憂世のちりをいでぬる

田家

伏見山かど田のすゑは明けやらで松のこなたの空ぞしらめる

述懐

ただしきをうけつたふべき跡にしもうたても迷ふ敷島のみち
舟もなく筏も見えぬおほかはにわれわたり得ぬ道ぞくるしき

曉述懷

夜をのこすまくらの上の鐘の音に五十ちの夢ぞあはれみじかき

雜

照りくもり寒きあつきも時として民に心のやすむまもなし

蘆原やみだれし國の風をかへて民の草葉もいまなびくなり
年ふりて世をうみ渡る葦田鶴のなほたちまじる和歌の浦波
今はわがむなしきふねのつながれぬ心にのこす心ともなし

治まらぬ世の爲のみぞ愁はしき身の爲の世はさもあらばあれ

懷 舊

忍ぶべき昔はさりななにとなく過ぎにし事のなぞあはれなる
何となく過ぎにし方ぞあはれなる昔もおなじゆめの世なれど

夢

花のうちに遊ぶ胡蝶の百年よさむるうつつはなほやみじかき

雜

朝顔の花はまがきにうゑて見む常ならぬ世をおもひ知るやと

伏見院御忌のころいまだ位におはしましける
に新院より紅葉につけて「かきくらす袖のなみ
だにせきかねて言の葉だにもかきもやられず」
といふ御歌をたてまつらせ給ひけるに御かへ
し

色深き袖の涙にならふらしちしほやちしほそむるもみぢ葉

萬葉の詞にてよませ給ひける御歌の中に「また

もあはめやも」といへることを

いたづらに苦しき海にしづみなば法の浮木にまたもあはめやも
此身何足厭一聚虚空塵

いとふとも惜むともなにかりそめの憂世にやどる我が身と思へば

頼むまことふたつなければ石清水ひとつ流にすむかと思ふ
祈る心わたくしにては石清水にこりゆく世をすませとぞ思ふ

位におはしましける時新院よりおほきなるた
かむなをたてまつらせ給ふとて「百敷にみどり
そふべき吳竹のかはらぬかげは世にひさしか
れ」とつつみ紙にかきつけさせ給へる御歌の御
かへし

百敷にうつしうゑてぞ色そはむはこやの山の千世のくれたけ
祝

色かへぬ尾上の松に吹く風は萬代よばふこゑにぞありける

圖書寮本奥書

此御集以甘露寺亞相之本於灯下馳秃筆校合畢

天文八年九月二十二日

左衛門督藤言繼

花園院御集拾遺

春山といへるこころを集種業

山ふかみ霞のそこのあさぼらけみやこの春をふもとにぞみる

遠山霞といふことをよませ給ひける集風雅

霞にほふ夕日の空はのどかにて雲にいろある山の端の松

春の御歌の中に同

我が心春にむかへる夕ぐれのながめの末も山ぞかすめる

題しらす同

たが里ぞ霞のしたの梅柳おのれいろなるをちかたのはる

百首の御歌の中に同

みどりこき霞のしたの山の端にうすき柳の色ぞこもれる

花園院御集拾遺

三十首の歌よませたまひけると集きふけぬるか霞にしづむ月影のそこともみえでかたぶきにけり

花の御歌の中に集木

故郷の浅茅が庭のさくら花あたらさかりとみる人やなき
題しらす同

そことなき霞の底にかたぶきて花にかけもるありあけの月

位におはしましける時南殿の花の頃入らせ給

ふべかりけるをさはる事ありて程へければ花

の散りがたに顯親門院の「恨みばや頼めしほど

の日數をもまたで移ろふ花の心を」とよみて奉

られける御返し集風雅

あだなれど咲き散るほどはあるものをとはれぬ花や猶恨むらむ

曆應二年の春花につけて「時知らぬ宿の軒端の

花ざかり君だにとへな又たれをかは」と永福門

院の奉らせ給ひける御返し同

春うとき深山がくれのながめゆゑとふべき花の頃も忘れて

百首の御歌の中に同

梢より落ちくる花ものどかにて霞におもきいりあひの鐘

やぶしわかぬ春とやなれも花の咲くその名もしらぬ山の下草

四月の初によませ給ひける同

花鳥の春におくるるなぐさめにまづまちすさぶ山郭公

三十首の歌めされしついでに里時鳥といふこ

とをよませ給うける集藤葉

あしびきの山ほととぎすなれを待つ里をばかれずこととひやせぬ

おなじついでに江笠を同

蘆しげる入江のみづのくらき夜におのれまがはずとぶ笠かな

おなじついでに集補

夏山のしげきみとりをへだてにて照る日およばぬかげぞ涼しき
照射をよませ給うける集補永

ともしする今だにくらき夏山にまよはむ後の闇はしらすや
題しらす同

葵草かざすや今日の神まつりたてし使もおもかげに見ゆ
百首の御歌の中に集風雅

夕立の雲とびわくる白鷺のつばさにかけて晴るる日のかげ
空はれて梢いろこき月の夜の風におどろくせみのひと聲

題しらす集臨永

ながめつる夕の空はくれはてて萩の葉かせの音のみぞする

秋の御歌あまた詠ませ給ひける中に集風雅

村雨のなかば晴れゆく雲霧に秋の日きよき松ばらのやま

百首の御歌の中に集新拾遺

夕日さす田の面の稲葉末遠みなびきも果てすよわる秋風

同集風雅

吹きうつりなびく薄の末末を長閑にわたる野邊のゆふ風
雲遠き夕日のあとの山際にゆくともみえぬ雁のひとつら
暮れもあへず今さしのぼる山の端の月のこなたの松の一本
見月といふことを同

我が心すめるばかりに更けはてて月を忘れて向ふよの月

仁和寺よりあからさまに京へ御幸ありて九月

十三夜山家月を同

み山いでし秋の旅ねの夜ごろへて宿もる月や主人まつらむ

月前草花を同

風になびく尾花が末にかけろひて月遠くなる有明の庭

秋 木集風雅

吳竹のめぐれるさとを麓にて煙にまじるやまのみぢ葉
ひとびとに三十首の歌召されけるついでに秋

山を同

霧はるる田の面の末に山みえて稻葉につづく木木のもみぢ葉
題しらす集臨水

村時雨くも吹きはらふ朝風に木木のこのはぞ降りかはりぬる
冬夕の心をよませ給ひける集風雅

暮れやらぬ庭の光は雪にして奥くらくなる埋火のもと
冬 風集風雅

おきて見る朝けの軒端しも白しおとせぬ風は身にさむくして
冬山といふことをよませたまうける同

冬枯の木の葉さはらぬ高嶺よりこほりて出づる月ぞまちかき

松雪といへることを同

ふりをやむ雲間の夕日やまはれて雪やいたたく松のかずかす

六首の歌合に戀始といふことを集風雅

うちつけに哀なるこそあはれなれ契ならではかくやと思へば

夜戀を同

更けぬなり又とはれてと向ふ夜の涙に匂ふともし火の影

戀の御歌の中に同

人よまして心の底のあはれをば我れにて知らぬ奥も残るを
うきながらさすがに絶えぬ契をば猶もあはれになしこそはせめ
常はただ獨ながめて大方の人にさへこそうとくなりゆけ

寄人戀といふことを同

さらばとて頼むになれば人心およばぬ際のおほくもあるかな

寄雲戀同

戀ひあまるながめを人は知りもせじ我れとそめなす雲の夕暮

日増戀といふことを風雅

聞きそふる昨日に今日のうきふしに覺めぬ哀もあやにくにして

五十番歌合に漸變戀を同

そことなき恨ぞ常に思ほゆるいかにぞ人のあらずなる頃

五首の歌合に戀憂喜といふことを同

かはりたつすべて恨のその上に憂さ哀さはかりのふしぶし

戀餘波といふことをよませ給ひける同

人こそあれ我れさへしひて忘れなば名殘なからむそれも悲しき

康永二年歌合に戀終を同

人しれず我れのみ弱き哀かなこの一節ぞかぎりとおもふに

百首の御歌の中に新千載集

引くかたの心にまけて頼むかなしらぬ契のよよのかねごと

戀の歌の中に新拾遺集

おのづから人まありともつげてまし誠に通ふこころと思はば

偽戀といふことを同

ありし世の契よせめて夢ならばおもひねをだに待たまし物を

戀の歌とて臨水集

我が袖の涙にやどる夜はの月おなじ影をも人やいとほむ

題しらす同

待たぬよも猶いねがての横の戸に音する風や吹きもやまなむ

三十首の歌めされしとき臨葉集

あはれをもちかはさぬ君がながめには夕の雲もなにとかは見む

夕旅行を風雅

雲霧にわけいる谷は末くれて夕日のこれる峯のかけはし

永福門院内侍都の外に住み侍りけるころ宣光

花園院御集拾遺

門院新右衛門督の許へ「またはよも身は七十ち
の春ふりて花も今年や限とぞ見る」と申し遣は
しけるを御覽じて御返し集風雅

人も身も又こむ春も知らぬ世に霞む雲路をへだてずもがな
寄月雜といふことをよませ給ひける同

雲ふかきみどりの洞にすむ月のうき世の中にかげはたえにき
百首の御歌の中に同

羽音して渡る鳥のひとこゑに軒端のそらは雲あけぬなり
跡たえてへだつる山の雲深しゆききは近きみやこなれども
里里の明けゆくおとは急げども長閑にしらむ山のはの空
もとよりのさながら夢とみる上はよしや必ずさめも覺めずも
題しらす同

あともなき賤が家居の竹の垣犬のこゑのみおくぶかくして

世の中騒しかりけるころ東坂本におはしまし
ける程の御歌どもを後に見て權大納言公蔭が

「さこそはと思ひやられしその折の旅の哀をさ
ながらぞ見る」とよみて奉りける御返し同

言の葉に色はなけれど思ひやる心を添へてあはれとや見る

顯親門院御忌の頃「今年しもあらぬ方にやした

ひまさるつらき別の花鳥の春」とよみて永福門

院内侍の奉りける御返し同

花の散り春の暮るらむゆくへだに知らぬ歎のもとぞ悲しき

從三位守子なくなりてける頃同

目に近き人のあはれにおどろけば世の理ぞさらに悲しき

藥王品是真精進是名眞法供養如來といへる心
をよませ給ひける同

燕なく軒端の夕日かげきえて柳にあをきにはのはるかせ

圓覺經生死涅槃猶如昨夢のころを集風雅

誰れも皆あたら色香をながむらし昨日も同じ花鳥のはる

居一切時不起妄念同

雁のとぶ高嶺の雲のひとなびき月いりかかる山のはの松

三諦一諦非三非一のころを同

窓の外にしたたる雨を聞くなべにかべに背けるよはの燈火

大梅山の別傳院に御幸侍りける時僧問雲門樹

凋葉落時如何雲門云體露全風といふ因縁を頌

せさせ給ひけるついでに同

立田川もみち葉ながるみよし野のよしのの山に櫻はなさく

眉間寶劍といふことを同

さゆる夜の空高くすむ月よりも置きそふ霜の色はすさまじ

百首の御歌の中に同

世をてらす光をいかでかかげましけなばけぬべき法の燈火

神祇を同

神風にみだれし塵もをさまりぬ天照す日のあきらけき世は

百首の御歌の中に新集千載

雲をふむ峯のかけはしそれよりもうき世をわたる道ぞあやふき

同集風雅

水上の定めし末はたえもせずみもすそ河のひとつ流に

寄國祝を同

葦原やみだれし國の風をかへて民の草葉もいまなびくなり

貞和の百首の御歌の中に新集千載

葦原やただしき國の風として大和ことの葉するもみだれず

祝のころを集水

ちはやぶる神のたもてる我が國の天つ日嗣は今もたえせず

題しらす花園院
宸記

誓ひおきし心のすゑの違はずば神と人との道もみだれじ
偽りてかすむる道をあきらけき神の心にゆるししもせじ
世の爲におもふ心はおしむけぬ棄てむすてじは神のまにまに
あはれ人わがわたくしを棄てねかし世をしか住めば神もなやまむ
世の中に偽る道のたつならば正しき神をたれか仰がむ
つくりなす人の力は強くとも弱きまことを神し加へよ
あぢきなく世を思ふとて身をぞなやむ身をば安くて過ぎぬべき世に
すたれこし道を今までおこしつる誠はすてじすみよしの神
頼もしみ仰ぎぞいのる敷島の道をすてすばわれを棄てめや
今更にわが私をいのらめや世にあれば世を思ふばかりぞ
よこさまの道をしとめよ神の心ただしかれとて世をしまもらば

いやましに亂れぞゆかむ神だにも正しき道を守りたてすば
偽りてかすむる道のたつならば人も人にて世も世ならめや
正しきとまがれるとわく道なくばかすむるままに世は亂れなむ

後醍醐天皇御製

立春朝といふことをよませ給うける續後集

百敷の宿にのみ來る春かとやあくればいそぐ雲のうへ人

建武二年千首の歌に立春の歌とてよませたま

うける新千載

もろ人にたまものすらし立つ春のはじめの今日のとよのあかりは

元日の節會ふるきにかへりて宜樂の參音聲の

雙調に春庭樂奏しはべりし時よませたまうけ

る續後集

時しもあれ今日たつ春のしらべまでふるきあと見る九重の庭

澤若菜をよませ給うける續後集

後醍醐天皇御製

春浅き野澤の水とけにけりせりつむ人の袖やぬるらむ

題しらす新集

春日山をのへの雪もきえにけり麓の野への若菜つまなむ

梅の花よそのかきねの匂をも木の下風のたよりにぞしる

今はよも枝にこもれる花もあらし木のめはるさめ時をしる頃

雪中梅といへる心をよませ給うける續千載集

消えやすき梢の雪のひまごとに埋れはてぬ梅が香ぞする

鶯回

おしなべて空にしらるる春の色をおのがねのみと鶯のなく

朝鶯といへることをよませ給うける續後拾遺集

朝日影くもりなき世に出でにけり谷に残らぬうぐひすの聲

正中二年百首の歌めされけるついでに鶯をよ

ませ給うける新後拾遺集

春のくるしるべとならば咲きやらぬ花をもさそへ鶯の聲

うへのをのこども題を探りて歌つかうまつり

けるついでに雪中鶯といへることをよませ給

うける臨水集

空はなほ冬ごもりける雪のうちに我れのみ春と鶯のなく

海邊霞を同

潮風のあらし磯邊の波の上ものどかに霞む春のあけぼの

春の御歌の中に新集

いかにして霞のひまの月をみむさてだに曇る習なりやと

春月をよませ給うける續現集

ほかよりは霞もいかがはれざらむ雲の上なる春のよの月

正中の百首の歌めされしついでに新後拾遺集

みよし野の山の山守こととはむ今いくかありて花は咲きなむ

尋花といふことをよませ給うける集本

花おそき春の山路をゆきくれてさかぬ木蔭に宿やからまし

花の御歌の中に同

よそにても見るべきものを葛城やたかまの櫻雲なへだてそ

元徳三年の春西園寺に行幸侍りて庭花といふ

ことを講せられけるついでに集本

宿からは花もこころにとまるかな世世のみゆきのあとと思へば

元應元年二月のころ花につけて春宮のなれに

ける花は心やうつすらむ同じ軒端の春にあへ

どもと奉らせ給ひける御返し集本

花はげに思ひいづらむ春をへてあかぬ色香にそめし心を

河花をよませ給うける集本

吉野川波さへ花のにはほひにて影見る水にはるかせぞ吹く

みこの宮と申し侍りし時よませ給うける集本

さのみやは春のみ山の花を見むはやすみ昇れ雲の上の月

正中二年七月二十七日うへのをのことも題を

探りて百首の歌つかうまつりけるとき初花と

いへることをよませ給うける集本

おしなべて木の芽もはるとみえしより花になりゆく三吉野の山

百首の歌めしける時同

木のもとをよそにもとはで我が宿に心のどけき花のころかな

南殿の花御覽せさせ給うける折しもきさいの

宮の御方より殿上にさぶらふをのこどもの中

に宮づかさなるして一枝折らせられけるを御

前にめして仰事ありける同

九重のくもゐる春のさくら花秋の宮人いかで折るらむ

吉野の行宮におましましける時雲居の櫻とて
世尊寺のほとりにありける花のさきたるを御
覧じてよませ給うける新集

ここにても雲居の櫻さきにけりただかりそめの宿と思ふに

花を現集

いかにして散るてふ事のつらさをば忘れてだにも花をみるべき

落花の心をよませ給うける千集

あだなりと移ろふ花にかこつかなちらぬを風もさそひやはする

百首の歌めされしついでに後集拾遺

道しあればおのが越路の故郷もおなじ春とや雁のゆくらむ

春日野の若むらさきの初草もかはらぬ色にさける藤なみ

うへのをのこども三首歌つかうまつりけるつ

いでに三月盡といふことをよませ給うける富永集

あけてこそ猶つらからめ玉くしげふたよだになき春の別は

四月一日時鳥の鳴きけるをよませ給うける新集千載

忍びねもけふよりとこそ待つべきに思ひもあへぬ時鳥かな

待郭公といふことをよませ給うける後集拾遺

人傳に聞きそめしより時鳥がなく聲をまたぬ日はなし

夏の御歌の中に新集後撰

時鳥すぎつる里のこととはむおなじ寐覺のひともありやと

題しらす現集

待たれつるおのがさつきとあし引の山時鳥いまぞなくなる

河五月雨を富永集

いとどまたわたりを遠みいづみ河人もかよはぬさみだれの頃

吉野の行宮にてうへのをのことも題を探りて
歌よみ侍りけるついでに五月雨といふことを

よませ給うける新集

都だにさびしかりしを雲はれぬ吉野の奥のさみだれのころ
吉野の行宮にて五月雨晴間なかりける頃おぼ

しめしつづけさせたまうける同

この里は丹生の川上ほど近し祈らば晴れよさみだれの空

百首の歌めされけるついでに新集

民のため時ある雨を祈るともしらでや田子の早苗とるらむ

延元四年五月五日吉野にて新待賢門院いまだ

准后と申しはべりしころまた菖蒲のねにそへ

て「わきてわがたのむ心のふかき江にひけるあ

やめのねとはしらなむ」とおほせられし御返事

に季花

深き江もけふぞかひあるあやめ草君がこころにひくと思へば

後にまゐりたりしにさても菖蒲の御歌は内の御かたより

おほせられしよし御物語有りしとなり

夏の御歌の中に新集

葛城や高間の山にゐる雲のよそにもしるきゆふだちの空

夏草を新集

しげるとも庭の夏草よしさらばかくてや秋の花をまたまし

納涼新集

涼しくば行きても汲まむみくさゐる板井の清水里とほくとも

題しらす集

あぢきなくねにだにたてぬ螢かな身にあまるとは見ゆる思を

同新集

短夜の月をばめでじあぢきなくかたぶきやすき影も恨めし

初秋の心をよませ給うける集

後醍醐天皇御製

秋きぬと目に見ぬ風の音よりもまづしる物は袖のしら露

同じ心をよませたまうける遺集後拾

今朝はしも音こそかはれ吹く風のたよりにつけて秋やきぬらむ

七夕の心をよませ給ひける新集後

稀にあふ恨もあらじ棚機のたえぬ契のかぎりなければ

元亨三年七月七日の夜御遊などせさせ給ひて新集後

笛竹のこゑも雲井にきこゆらし今宵たむくる秋のしらべは

建武元年七夕七首の歌講せられけるついでに

七夕月をよませ給うける新集後

忘れぬほどは雲居の月の秋めぐりあひける星合のそら

うへのをのことも三首の歌つかうまつりしつ

いでに朝草花遺集後拾

露よりもなほことしげし萩のとのあくればいそぐ朝まつりごと

うへのをのことも三首の歌仕うまつりしとき

初秋月同

久方の月のかつらの初紅葉いろづく見れば秋はきにけり

百首の歌めされしついでに同

山鳥の尾ろのはつ尾の長き夜に月や鏡とてりまさるらむ

元亨三年八月十五夜五十首の歌めされけるつ

いでに同

ながむれば空すみわたる秋の夜の月こそ人の心なりけれ

中宮きさきに立ち給ひて西園寺におはしまし

ける頃行幸などありけるに八月十五夜月面白

かりければ永福門院「今夜しもくもゐの月の光

そふ秋のみ山を思ひこそやれ」とよみて中宮の

御方へ奉らせ給うけるに中宮にかはりて御返

し續集千

むかし見し秋のみ山の月影を思ひいでてや思ひやるらむ

題しらす新集千

曇なきためしと見てぞ秋の夜の月にもわきて心とどめし

建武二年人人題を探りて千首の歌つかうまつ

りけるついでに月を同

見る人の心のなかすまざらむ空にくもらぬ秋の夜の月

題しらす新集拾遺

風渡る門田のするゑに霧はれて稻葉の雲をいづる月かげ

元弘三年九月十三夜三首の歌めしけるついで

に月前擣衣を同

聞きわびぬ八月なが月ながき夜の月の夜さむに衣うつ聲

みこの宮と申しける時九月十三夜に月前松風

といふことををのことも仕うまつりしついで

に新集現

いとど猶秋にはあへぬ心かな月もるよはのにはの松かせ

月前露といふことをよませたまうける新集

影やとす月さへいまはなれにけり都にかはる袖のしらつゆ

みこの宮と申し侍りし時九月十三夜に月前擣

衣といふことをよませ給うける新集現

おのづから月にまどろむ里人はおどろくまでとうつ衣かな

元應元年八月のころ月のあかかりける夜春宮

の「へだてなき雲の影やかよふらむこの里ま

でもすめる月かな」とよみて奉らせ給うける御

返し同

かよひける心もやがてへだてなき雲の月のかげぞとをしれ

鹿をよませ給うける 源集

忍ばでや妻は戀ふらむよもすがら音にたててなくさを鹿の聲

建武元年八月十五夜五首の歌講せられけるつ

いでに月前秋風といふことをよませ給うける 集補

あきらけき時しあればと久方の雲の月にあきかせぞ吹く

元亨元年八月十五夜うへのをのこどもめして

歌合せさせ給ひけるついでに 源集

鐘の音もかたぶく月にかこたれて惜しと思ふ夜は今宵なりけり

十首の歌めしけるととき秋夕雨といふことをよ

ませたまうける 源集

夕づく日しぐれてのこる山の端のうつろふ雲に秋風ぞ吹く

聞蟲といへる心を 源集

露ふかき夜さむの秋のきりぎりす草の枕に恨みてぞなく

聞擣衣といへる心を 同

急ぐなる秋のきぬたの音にこそ夜寒の民のこころをも知れ

菊の枝につけて仙洞に奉らせ給うける 同

仙人の千とせの秋をゆづりおきて君が爲にとさける白菊

秋霜をよませ給うける 源集後拾

今よりの秋の色こそさびしけれ末野の尾花霜むすぶなり

位の御時三首の歌講せられけるついでに庭菊

を 源集

百しきやわが九重の秋の菊こころのままに折りてかざさむ

建武二年人人題を探りて千首の歌つかうまつ

りけるついでに秋植物といふことをよませ給

うける 源集

立田山峯の錦も中たえぬまつをのこして染むるもみぢ葉

夕月夜小倉のみねは名のみして山の下照る秋のみちば

延元三年九月十三夜うへのをのことも題を探

りて月の三十首の歌つかうまつりけるついで

に月前雲といへる心をよませ給うける新集

わきてなほ今宵ぞつらき夜はの雲月にはいとふ習なれども

おなじついでに月前蟲といふことをよませ給

うける同

ねにたてて蟲もなくなり身一つのうき世を月にかこつと思へば

題しらす同

幾秋をおくりむかへていたづらに老となるまで月をみつらむ

元弘三年九月十三夜三首の歌講せられし時月

前菊花といへることをよませ給うける同

うつろはぬ色こそみゆれ白菊の花と月とのおなじまがきに

正中二年九月盡内裏にて五首の歌講せられけ

るついでに連夜擣衣集永

あしびきの山鳥の尾の長き夜にあかていくよか衣うつらむ

初紅葉をよませ給うける同

ひとしほの峯の紅葉はたつたひめまだおりはてぬ錦なるらし

元徳二年九月十三夜三首の歌講せられけるつ

いでに月照菊といふことをよませ給うける集葉

月夜には星まれらなる雲のうへにそれかとまがふ白菊の花

笠置におはしましける頃集

うかりける身を秋風にさそはれて思はぬ山の紅葉をぞみる

いまだみこの宮と申しける時十首の歌めしけ

るついでに暮秋霜といふことをよませ給うけ

る新集拾

行く秋のすゑ野の草はうらがれて霜にのこれるありあけの月

吉野の行宮にてよませ給うける御歌の中に新集

ふしわびぬ霜寒き夜の床はあれて袖にはげしき山おろしの風

冬の御歌の中に新集

夕暮は入相の鐘のおとをさへ木の葉にそへてさそふ山風

夜時雨といふことをよませ給うける瀧水集

たえだえにしぐれて過ぐる浮雲の行くかた見ゆる冬のよの月

瀧水といへる心をよませ給うける瀧水集

谷ふかみ山風さむき瀧つせの中なる淀やまづこほるらむ

正中二年百首の歌めされけるついでに新集

冬の池の氷になるる水鳥はうは毛の霜やいとほざるらむ

禁庭雪といふことをよませ給うける同

朝な朝な仕へて急ぐ宮人のあとをのみ見る庭のしら雪

元弘三年立后の屏風に五節をよませ給うける新集

袖かへす天つ少女も思ひ出でよ吉野の宮のむかしがたりを

豊明節會をよませ給うける後拾遺集

天つ風袖さむからし少女子がかへる雲路のあけがたの空

遇不逢戀新集

人ははやいひし契もかはる世に昔ながらの身こそつられ

忍戀をよませ給うける續千載集

かよふべき道さへたえて夏草のしげき人目をなげくころかな

題しらす同

まだ知らぬ人の心をたどるまにいはで月日の積りぬるかな

顯戀を同

忍べばや思ひなすにも慰みきいかにせよとて漏れしうき名ぞ

不逢戀を同

涙川したにもかよふ心あらばながれて末の逢ふせたのまむ

みこの宮と申し侍りし時五首の歌合に契戀續集千

おのづからいひし契のままならば見はつるまでの命ともがな

戀の御歌の中に同

君まつといく夜の霜をかさぬらむ聞へもいらぬ同じ袂に

別戀を同

人はなほながらへぬべき心かと後をちぎるもうき別かな

曉逢戀といふことを同

こひこひてあふ夜もやがて別路の涙にくるる有明のつき

正和二年九月盡日十首の歌めされしついでに

希待戀 同

今更に思ひいづるもたのまねば待つともいはじ夕暮のそら

戀の御歌の中に同

思ひ出でてまたとふまでは難くとも忘れし身といかで知らせむ

顯戀をよませ給うける續後拾遺集

いつの間に亂るる色のみえつらむ忍ぶもちすりころも經ずして

百首の歌めしけるついでに同

月だにも影やとどめぬ白妙の袖の別のありあけのそら

題しらす風雅集

我が戀は初もとゆひのこむらさきいつしか深き色に見えつつ

元亨三年七月うへのをのことも三首の歌つか

うまつりけるついでに忍不逢戀といへること

をよませ給ひける新集千載

うかりけるしのぶの里のしるべかな通はぬ中にまがふ契は

元亨三年八月二十四日うへのをのことも題を

探りて歌つかうまつりける時不逢戀といへる

ことをよませ給ひける 新集千載

遂にさてつれなかるべき契かと行末をだにいかで知らまし
おなじ時立無名戀といふことをよませ給うけ

る同

水鳥のたつ名ばかりを契にてつがはぬ鴛のねこそなかるれ

元亨元年九月盡日人人三首の歌つかうまつり

ける時契經年戀といふことをよませ給ひける 同

あやむしろをになるまでの年月も朽ちぬは人の契なりけり

偽戀といへることを 同

たのますば契のすゑもつらからしなに疑はぬ心なりけむ

寄月絶戀といへることをよませ給うける 同

思はずよまためぐり逢ふ月を見て變る契をかこつべしとは

戀の御歌の中に 新集千載

おのづから慰むやとてながむれば月見ぬよりも濡るる袖かな

元弘三年九月十三夜三首の歌講せられし時月

前待戀といふことを 新集千載

いとど猶まつ夜ふけゆくつらささへ慰めかねて見つる月哉

まゐるべきよし申しける人の俄にさはる事

ありてまゐらざりければよませ給うける 同

頼めつる人の心の末の松なみこさねともうきちぎりかな

人にたまはせける 同

かきながす我が玉づさの言の葉にあらそふものは涙なりけり

月前祈戀をよませ給うける 同

面影は雲居のよそになりぬれど月にぞいのるめぐりあふよを

寄鏡戀を 同

わすられば面影かはれます鏡われぞあらぬと思ひなしてむ

戀の御歌の中に新集

我が戀は久米路の橋の中たえて契むなしきかつらぎの神
題しらす同

恨みじと思ふ心をやがて又かごとになしてぬる袖かな

元亨四年五月内裏にてうへのをのことも題を

さぐりて歌つかうまつりけるついでに不逢戀集本

いつまでと限もしらぬ逢ふことにたのみをかくる命なるらむ

題しらす同

朽ちはてて後にももらばいかがせむ袖の外なる涙ならぬを

たのまる契なりせば待つほどの更くるばかりや恨ならまし

契戀をよませ給うける同

哀とも思ひしるらむとばかりにまづ頼まるる人のことの葉

元徳二年九月十三日の夜うへのをのことも三

首の歌つかうまつりけるついでに稀逢戀とい

ふことをよませ給うける同

あはぬまも忘るるとしはなけれども又おどろかす面影ぞうき

戀の歌の中に同

ながらへてうきをも暫し恨みばやさこそはかなき命なりとも

正中二年八月十五夜五首の歌講せられけるつ

いでに寄月戀といへることをよませ給うける集本

はてはまた月にもうとくなりやせむ宿る涙を忍ぶあまりに

正中百首の歌めされけるついで同

たのめおく後の契もいさや川まつ夜むなしきとこの山風

帥宮と聞えけるころ北殿の内親王の御方へ參

り給へるが空しく歸らせ給ふとて同

おのづからながめやすらむとばかりにあくがれきつる有明の月

中宮より御琵琶奉らせ給ふついでに「思ひやれ
塵のみつもる四つの緒にはらひもあへずかか
る涙を」と聞えさせ給へる御返し録

かきたてしねをたちほてて君戀ふる涙の玉の緒とぞなりける
帥宮と聞えける時基久の女に賜はせける太平記

數ならぬみののを山の夕時雨つれなき松はふるかひもなし
羈中關を續集

故郷をへだつる關のつらければいそがでこえむ逢坂のやま
雪中旅行といふことをよませ給うける續集

雪のうちに昔の道をたづぬれば迷はぬ駒の道ぞしらるる
元弘三年立後の月次の屏風に春日の祭の儀式
あるところを新集

たちよらばつかさつかさも心せよ藤の鳥居の花のしたかげ

百首の歌めされける時同

天の戸のあけし月日も變らぬは神代ながらの光なりけり

賀茂の臨時の祭の試樂の日舞人かざしの竹折

りけるを御覽じてよませ給うける續後拾遺集

霜さむみ今日はかざしにさす竹の大宮人の袖かへすなり

題しらす同

世治り民安かれと祈るこそわが身につつきぬ思なりけれ

雑の御歌とて風集

治れる跡をぞしたふおしなべて誰が昔とはおもひわかねど

正中の百首の歌めされけるついでに新集

四方の海をさまりぬらし我が國の大和島根に波しづかなり

正中二年百首の歌めされしついでに新後拾遺集

おのづから人の心のくまもあらばさやかにてらせ秋のよの月

題しらす續後拾遺集

皆人の心もみがけ千はやぶる神のかがみのくもる時なく
中殿にて花契萬春といふことを講せられける
時よませ給うける新後拾遺集

時しらば花も常磐の色にさけ我が九重はよろづよのはる
題しらす新拾遺集

ほのかなる聲ぞ聞ゆる九重の宮のほかにはや鳥はなくらむ
達智門院后だちのころ遅櫻につけて奉らせ給
うける新千載集

待たれつる心ひらけておそ櫻にほひ久しき色ぞことなる
建武二年千首の歌よませ給うける同

九重や近き守の圓居して名のるをきけば夜はふけにけり
元弘三年立后の屏風に石清水臨時祭を新拾遺集

九重のさくらかざして今日はまた神につかふる雲の上人

河月をよませ給うける新集

照し見よみもすそ川にすむ月もにごらぬ浪のそこの心を
題しらす同

これまでにはなほも都の近ければ同じ空なるつきを見らむ(1)見れ
ながむるを同じ空ぞとしらせばや故郷人も月は見るらむ
吹く風のたより待つまをかごとにて同じ入江にとまる舟人
神祇の歌とてよませ給うける集水

三笠山さしていくよと限らねば千とせの末も神のまにまに
うへのをのことも歌合し侍りけるついでに夏
夜言志といふことをよませ給うける同

短夜ははや明方とおもふにも心にかかるあさまつりごと
前大納言爲定續後拾遺集撰みて奉りけるとき

集のさま昔にはちぬよし仰事ありしかば大納言師賢につけて「今ぞしる集めし玉の數數に身を照すべき光ありとは」と奏したりし御返し新千載集

かすかすに集むる玉の曇らねばこれもわが世の光とぞなる
建武二年人人題を探りて千首の歌つかうまつりけるついでに述懐の歌とてよませ給ひける同

身にかへて思ふとだにも知らせばや民の心のをさめ難さを
懷舊のころを新集

物思はで過ぎぬる方の年月はいかにねし夜の夢にかあるらむ
題しらす同

年をへて哀とぞみるもろかづら二葉變らぬおなじかざしは
ひきかけし契かはらであふひ草同じかざしの末ぞはるけき
秋ことの習と思ひし露しぐれ今年はそでのうへにぞありける

まだなれぬ板屋の軒の村時雨おとをきくにも濡るる袖かな
夜な夜なの慰なりし月だにもまちどほになる夕暮のそら
埋るる身をば歎かずなべて世の曇るぞつらき今朝の初霜
待ちなれし跡はよそなる山の奥に身も埋るる庭のしら雪

いかなる時にかありけむ御琵琶をめされける
を奉らせ給ふとて後京極院「思ひやれ塵のみ積
る四つの緒にはらひもあへずかかる涙を」とよ
みて奉り給へる御返し同

涙ゆるなかばの月は曇るともなれて見し世の影はわすれじ
吉野の行宮にてよませ給うける御歌の中に同
あだにちる花を思の種としてこの世にとめぬ心なりけり

吉野の行宮におましましたしけるころ御心地例な
らざりけるを御風のけなれば定めて早く怠ら

つゆの身を草の枕におきながら風にはよもとたのむはかなさ

吉田前内大臣右大辨清忠など打ち續き身まかりにける頃おぼしめしつづけさせ給うける同

こととはむ人さへ稀になりけり我が世の末の程ぞしらるる

續千載集えらばれける頃達智門院歌をかきあつめて内裏へたてまつらせ給ふとて包紙に「玉

ならぬわかぬの浦わの藻屑をも君みがかばとかき集めつととかきつけ給へる御返し集本

見るからに心うつりて和歌の浦やみがける玉をわきぞかねつる

龜山院かくれ給へるころ葛の紅葉のいたう染めたるを昭訓門院におくらせ給ふとて録増

明日よりの時雨もまたで染めてけり袖のなみだや葛のもみち葉

笠置を迷ひ出でさせ給ふ時太平記

さして行く笠置の山を出でしよりあめが下にはかくれがもなし

隠岐に遷し奉るべきよし聞しめし給ひて録増

途にかく沈みはつべき報あらば上なきみとはなに生れけむ

隠岐にいでさせ給はむとして日頃おはしまし

つる傍の障子に書きつけさせ給へる同

いさしらす猶うき方の又もあらばこの宿とても忍ばれやせむ

隠岐へ赴かせ給ふ時淀のわたりにて昔八幡の

行幸ありし時橋わたしの使なりし佐佐木の佐

渡の判官といふもの今日の御送仕うまつれる

に賜はせける同

しるべする道こそあらずなりぬとも淀のわたりは忘れしもせじ

命あればこやの軒端の月も見つまたいかならむ行末のそら
 水の泡のきえてうき世をわたる身のうらやましきは蟹の釣船
 花はなほうき世もわかす咲きてけり都も今や盛なるらむ
 あと見ゆる道のしをりの櫻花この山人のなさけをぞしる
 あはれとはなれも見らむ我が民を思ふ心は今もかはらす
 よそにのみ思ひぞやりし思ひきや民のかまどをかくて見むとは
 花の春また見むことの難きかな同じ道をばゆきかへるとも
 聞きおきし久米のさら山こえゆかむ道とはかねて思ひやはせし
 立ち歸りこえゆく關と思はばやみやこに聞きし逢坂のやま
 傳へきく昔語ぞうかりけるその名ふりぬるみかづきの森
 さもこそは月日もしらぬ我れならめ衣更せし今日にやはあらぬ
 同じ時雲清寺といふところにて花を折りて忠
 顯少將「かはらぬを形見となしてさく花の都は

なほも忍ばれにける」と奏しける御返し御

色も香も變らぬしもぞうかりけるみやこの外の花のこすゑは

隱岐の小島にてよませ給ひける同

心ざす方をとばばや浪の上にうきてただよふあまのつり船

花山院を忍びて出でさせ給ひて大和へ赴かせ

給ひける時稻荷の社の前にて吉野

ぬばたまのくらしき關路に迷ふなり我れにかさなむ三つの燈火

題しらす新集

わすれめやよるべも波の荒磯をみ舟のうへにとめし心は

この御歌は元弘三年隱岐の國より忍びていでさせ給うける時

源長年御むかへにまゐりて船上山といふ所へなし奉りけるほ

どの思ためしなかりし事などしるしおかせましましたしける物の

おくに書きそへさせ給ひけるとぞ

後醍醐天皇 中宮禧子御歌

歸雁のこころを續後集千

吉野山 峰とびこえて行く雁のつばさにかかる花のしら雲

題しらす續後集拾

茂りあふ草葉のうへの露ならで名残もとめぬ夕立のそら

後醍醐院南殿の花御覽せさせ給うける折しも

きさいの宮の御方より殿上にさぶらふをのこ

どもの中に宮づかさなるして一枝折らせられ

けるを御前にめして「九重のくもゐの春の櫻花

秋の宮人いかで折るらむ」と仰せごとありける

御返し新千載集

後醍醐天皇中宮御歌

手折らずば秋の宮人いかでかは雲居の春のはなを見るべき

四月一日時鳥の鳴きけるをよませ給うける新千載集

鳴きぬなりうづきの今日の時鳥これやまことの初音なるらむ

吹きはらふ外山の嵐おとたてて正木のかづら今や散るらむ

嘉暦四年御着帶の後祭の日朝がれひの御几帳

に葵のかけたりけるを御覽じてよませ給ひ

ける新千載集

我が袖に神はゆるさぬ葵草ころの外にかけて見るかな

歸雁のころを新千載集

歸る雁しばしやすらへ越路にも都にまさる花はあらじを

題しらす同

櫻花いま盛なりおなじくば風にまかすなはるのやまもり

難波江のこやの蘆ぶきひまをあらみさながら月の宿とぞみる
袖にだにはらひもあへぬとの守の跡のみみゆる庭のしら雪

同新千載集

迷ふべき後のうきみを思ふにもつらき契はこの世のみかは
頼めつつ待つ夜空しきうたたねをしらでや鳥の驚かすらむ
おのづから思ひいづやと頼むかなつらき心のはては見しかど

戀の歌の中に同

いかなれば見し夜の夢を現とも思ひあはせぬ契なるらむ

題しらす新千載集

もらさじと袖の涙をつつむまに逢ふ瀬もよどむ中川のみづ
又いつとしらぬも悲し今はとて起き別れつる名残のみかは

寄船戀を新千載集

逢ふことはなぎさに遠き捨舟のよるかたしらぬ物や思はむ

題しらす集臨永

かくばかりつれなかるべき心とも知らでや人を思ひそめけむ
偽のつらさになれて言の葉の身にたのまる夕暮ぞなき

おほんさまかへさせ給ひて後人の琴を弾きけ

ればよませ給ひける新千載集

人知れず心をとめし松かせの聲をきくにもぬる袖かな

後西園寺入道前太政大臣申しおきて侍りける

箏を宣政門院いまだ一品宮と申しけるころ奉

らせ給ふべきよし達智門院へ申させたまふと

て同

世世をへて住みこし山の松の風傳へむ千代の聲ぞしらるる

いかなる時にかありけむ御琵琶をめされけれ

ばうへに奉らせ給ふとて新集

思ひやれ塵のみ積る四つの緒にはらひもあへずかかる涙を

後醍醐院隠岐の國へ遷されさせ給ふに太平記

此の上の思はあらじつれなさの命よさればいつをかぎりぞ

後村上天皇御製

たつ春のこころをよませ給うける新集

出づる日に春の光はあらはれて年立ちかへるあまのかぐ山

百首の歌よませ給うける同に春雪を同

かつ消えて庭には跡もなかりけり空にみだるる松のあわ雪

竹鶯といへる心を同

おのづからながき日影もくれ竹のねぐらにうつる鶯のこゑ

百首の歌よませ給うける同中に同

この里は山澤ゑぐを摘みそめて野べの雪まもまたぬなりけり

梅薫風といふことをよませ給うける同

匂ふなり木のもとしらぬ梅が香の便となれる春の夕かせ

後村上天皇御製

なほざりに待つ身なりせば嶺の雲かかるを花とみてややみなむ
花の御歌の中に同

吉野山花も時えてさきにけり都のつとにいまやかざさむ
さきぬべき片枝にうつる心哉かつ見る花もめかれせぬまに
しばしこそ雲とも見つれ山櫻さかりになれば匂ふはる風

吉野の行宮にてよませ給うける御歌の中に同
おのづから故郷人のことづてもありけるものを花の盛は

正平八年うへのをのことも題を探りて千首の
歌つかうまつりけるついでに禁中花を同

あひ思はば見ざらむものか百しきの花も千年の春の盛を
眺望春といふことを同

朝日影さすが浪間にあらはれて霞めばきゆる淡路しま山

暮春のこころをよませ給うける同

浪こゆと見えしは花の盛にて春の日かずは末のまつやま

百首の御歌の中に五月雨を同

五月雨はみかさぞまさる山川の淺瀬しら浪たどるばかりに

夏曉月を同

夏がりの玉江の蘆のよもすがら待ちいづる月は有明のそら

百首の歌よませ給うける中に螢を同

月夜にはあらそひかねてうば玉のやみぞ螢の光なりける

水邊螢をよませ給うける同

夏草のしげみが下の埋水ありとしらせてゆくほたるかな

正平十三年七夕の七首の歌講せられし時待七

夕といふことをよませ給うける同

偽のなきためしをや契りおきて待ち習ひけむ星あひのそら

夕立をよませ給うける新集

なるかみの音は雲居にたかさごの松風ながらすぐる夕だち
秋雨をよませ給うける同

おとづる桐の落葉もまがふらし哀なそへそ秋のむらさめ
題しらす同

錦かと思見るだにあるを秋萩の花にむすべる露のしらたま
一木まづ霧のたえまに見えそめて風に数そふ浦のまつばら

萩欲散といふ心をよませ給ひける同
萩が花うつろふ色に高砂の尾上の風はふかすもあらなむ

中務卿宗良親王あづまに侍りし頃住吉の行宮
よりたまはせ侍りし同

年をふる鄙のすまひの秋はあれど月は都と思ひやらなむ
渡月をよませ給うける同

明石潟とわたる月の影ふけてくもも残らぬあきのうら風

吉野の行宮におましましける頃栽菊といふこ
とをよませ給うける同

移しうゑば山路の菊も今年よりはや九重のいろにさかなむ
百首の御歌の中に松間紅葉を同

枝かはす松はつれなき木の間より紅葉や秋の色をみすらむ
初冬の心をよませ給うける同

夜や寒き時雨やしげき曉のねざめぞ冬のはじめなりける
木の葉ふりしぐるる雲のたち迷ふ山のは見れば冬は來にけり

百首の御歌の中に同
きく度に驚かされてねぬる夜の夢をはかなみふる時雨かな

影こほる霜夜の月ぞ秋をおきて時こそあれとさやけかりける
志賀の浦や月すみ渡るささ波の夜はすがらに千鳥なくなり

谷落葉といふことをよませ給うける新集
山人のあとさへ見えすなりにけり木の葉ふりしく谷の下道
題しらす同

花に見し野べの千ぐさは霜おきて同じ枯葉になりにつらしも
古の跡みる和歌の浦千鳥およばぬかたにねをのみぞなく
たれか又こよひも友をたづぬらむ月と雪とのおなじ光に
初雪見参のこころを同

名をとへばつかさつかさも心して雲居にしるき今朝のはつ雪
雪似花といふことを同

春も見しおなじ梢となりにつらむはぬ花の雪のあけぼの
住吉の行宮におましましけるころうへのをの
こども題を探りて歌つかうまつりけるついで
に松雪といふことをよませ給うける同

年さむきためしはたれもならふらむ松につもりの浦の白雪

百首の歌よませ給うける中に豊明節會のこころを同

豊のあかり天つ少女の袖までも世世の跡をばかへしてぞ見む

三月の頃女院の御所の御庭に花の山をつくり
給ひければ上にも明日わたらせ給ひてむとの
たまはせけるにその夜風の烈しく吹きていた
づらになりにつらむはぬ花の雪のあつ
めし山の名も今朝はあらしの跡にこそあれと

辨の内侍におくりけるを御覽じて拾遺

ちはやぶる神代もきかず夜のほどに山を嵐のふきちらすとは

百首の歌よませ給うける中に寄屋戀といふこ

とを新集

人しれず物をぞ思ふ津の國のこやのしのやのひまもなきまで

戀の御歌の中に新葉

人しれぬ我が戀草の七くるま思ひみだれてやるかたもなし

百首の歌よませ給うける中に寄煙戀といふことを同

せめてわが思の煙そらにだにたたばぞ人のあはれとも見む

寄石戀といふころを同

しられじな入江がくれの玉がしは沈むばかりの思ありとも

正平二十年うへのをのこども題を探りて三百

六十首の歌つかうまつりけるついでに寄名所

戀を同

せめてそのうき名なりとも名取川あふといふせのなどなかるらむ

寄塙戀といへるころを同

へだてける心をしらで葦垣のまちかしとのみなにたのみけむ

祈不逢戀をよませ給うける同

よしさらば思ひたえねと祈らばやうきには神もつれなかりけり

寄木戀をよませ給うける同

つひにさてみきとはいはで武隈の松ならぬ身も年ぞへにける

百首の歌よませ給うける中に同

あひ見ずば思ひ絶えてもあるべきにつれなからぬもうき契かな

寄衣戀といふことをよませ給うける同

すまの蚤のしほたれ衣重ねてもまどほにしあれば濡るる袖哉

寄櫛戀といふことをよませ給うける同

つらさをばいかにまがへて櫛葉のかはらぬ色と頼みそめけむ

寄鏡戀を同

面影もかはるやいかにます鏡人のこころのよそにうつらば

久戀といふことをよませ給うける新集
くらべこし振分髪集のそのまに思ひ亂れて年ぞへにける
戀の歌の中に同

逢ふことはさて山川の淺みこそ袖のみぬれてうきよなりけれ
齋宮群行の心をよませ給うける同

別れつる袖にかけけり鈴鹿川やそ瀬の瀧におつるしら玉

中務卿宗良親王あづまにすみ侍りしころ御心

地例ならぬよしなどおほせられしついでに同

めぐり逢はむ頼ぞしらぬ命だにあらばと思ふほどのはかなさ

百首の御歌の中に同

幾日かはふじの高嶺を見てゆかむわめくさへくる裾野の道かはるとも

題しらす同

都をも同じひかりと思はずば旅寢の月をたへて見ましや

石清水同

神もまたあはれと思へ石清水こがくれてわがすめるこころを

年中行事を題にて人人百首の歌つかうまつり

けるついでに賀茂祭を同

葵草神もあはれはかけそへよよそにみあれの賀茂のみづ垣

同じついでに春日祭同

二月や雪まをわけし春日野におく霜月もかみまつるなり

正平十五年十月住吉の社に行幸ありて神主津

守國量正下の四位に叙せられける時おぼしめ

しつづけさせ給うける同

位山こえても更に思ひしれ神もひかりをそふる世ぞとは

百首の歌よませ給うける中に日吉を同

おしなべて照さぬ方やなかるらむたのむ日吉の神のひかりは

おなじ中に寄社祝を新集

行末をおもふも久し天つ社くにつやしろのあらむかぎりは

後醍醐天皇の大納言典侍さまかへて後住吉の
西林院といふ所にすみ侍りける時彼の寺の梅
の花をめされけるに奉りければ同

わが頼む西の林の梅のはなみのりの花のたねかとぞ見る

正平二十一年二月十七日莊嚴淨土寺にて御八

講行はれける日雪いたうふりて侍りければ妙

光寺内大臣のもとへつかはされける同

思ひやる嵯峨野の春の雪にもや消えける罪のほどは見ゆらむ

年中行事を題にて人人百首の歌つかうまつり
けるついでに朝拜の心を同

高御座とばかりかかけて樞原の宮の昔もしるきはるかな

おなじついでに獻醴酒といふ事をよませ給う
ける同

いかにして一よばかりの竹の葉にみきといふ名を残しそめけむ

おなじついでに牽穂坂御馬といふことをよま

せ給うける同

秋の田の穂坂の駒をひきつれて治まれる世のかひもあるかな

おなじついでに御燈を同

九月やけふ三日月も光そへて星に手向くるよはのともし火

臨時客同

春はまづくる諸人の代代をへてうたふもたえぬ青やぎの絲

うへのをのこども年中行事を題にて三百六十
首の歌よみ侍りけるついでに縣召除目といふ
ことをよませ給うける同

縣見にいでたつ人のいかなれば名國ともにと今年かふらむ

建武の頃花山院を内裏になされて侍りける時

御元服ありしことなどおぼしめしいでてよま

せ給うける新集

花山のはつもとゆひの春の庭わがたち舞ひし昔こひつつ

妙光寺内大臣右大將に侍りける時五月五日さ

うぶの根につけてたまはせける同

袖ふるる花橘のをりをえてかざすあやめは永きためしぞ

題しらす同

我が末の代代にわするな足柄や箱根のゆきをわけし心を

鳥のねに驚かされて曉のねざめしづかに世をおもふかな

龜の尾の瀧の白糸いくよへて末まですめる流なるらむ

住吉の社のかむたちに行幸ありて浦のかた御

覽せられけるに松の姿などたくひなかりけれ
ばよませ給うける同

言の葉もおよばぬ松の木かげ哉むべも心ある神やうゑけむ
名所山といふことをよませ給うける同

年ふれば思ひぞいづる吉野山まだ故郷の名やのこるらむ
百首の歌よませ給ひける中同

我が世にはさらぬ關路と思はばや明けよと告ぐる鳥はなくとも
磯の浪よせてかへれば巖にもさきたる花の散るかどぞみる
仕ふべき人やのこると山深み松の戸ざしも猶ぞたづねむ
住む人のあるとはよそにしられつつ煙ぞ靡く遠の山もと
正平二十年十二月うへのをのことも題を探り
て七百首の歌つかうまつりける時名所島を同

心あてにそことはしるし淡路島まだみぬ人は雲かとや見む

百首の歌よませ給ひて前大納言爲定の許へ遣
はされける中集新業

あはれはや浪をさまりて和歌の浦に磨ける玉を拾ふ世もがな
おろかなる言葉の花も昔よりふきつたへたる風にまかせむ
すなほなる昔にかへれ種となる人の心のやまとことの葉

正平八年うへのをのことも題を探りて千首の

歌よみ侍りけるついでに寄日述懐をよませ給

うける同

曇らじと思ふ心よおなじくばはや日の本のひかりともなれ

月前懐舊を同

その事と思はでしもぞ忍ばるる見ぬ世の秋を月やみすらむ

うへのをのことも歌合し侍りけるついでに思

往事といふ事をよませ給うける同

忘ればや忍ぶも苦しかすかすに思ひいでてもかへりこぬ世を

題しらす同

月やあらぬ花やあらぬと歎ききて忍ぶ昔ぞ身につもりぬる

懐舊非一といふことを同

我が忍ぶ同じ心の友もがなそのかすかすをいひいでて見む

新待賢門院かくれさせ給うて後三年まで諒闇

の儀にてありけるを御服はてける年の五月五

日菖蒲につけて前大納言實爲にたまはせける同

今更にねにこそ立つれ三年まであやめもしらで過ぎし悲しさ

正平十八年八月十六日莊嚴淨土寺にて御八講

など行はれける夜月くもりて侍りければよま

せ給うける同

秋をへて月やはさのみくもるべき涙かきくるるいざよひの空

妙光寺内大臣一週忌の佛事しける時つかはさ
れける集新

世の爲もあらましかばと思ふにぞいとど涙のかずはそひける
權中納言長資内よりあづかりけるよるの鶴と
いふ御琵琶を身まかりてのち返しまつりしを
そのばちに宸筆にて梵字などあそばされてか
へさせ給うける包紙に同

いける世にいか契りし四つの緒のかけはなれてもあられける哉
正平十八年正月春竹契久といふ事を講せられ
けるついでに同

九重にたえぬ流を契りきてはるも幾世のやどのかはたけ
住吉の行宮におましましける頃人人いろいろ
心ばへを盡して風流の破子ども奉りける中に

神主國量八十島のまつりのかたを作りて奉り
けるを御覽じて同

稷する八十島かけていましめや浪をさまれる時は見えけり
題しらす同

四つの海浪もをさまるしとて三つの寶を身にぞ傳ふる
九重に今もますみの鏡こそなほ世をてらすひかりなりけれ

吉野なる黒木の御所を迷ひ出でさせ給へる時
勝手の宮の前にて馬よりおりさせ給ひて太平記

頼むかひなきにつけても誓ひてし勝手の神の名こそ惜しけれ
住吉の行宮より宗良親王におほせられし李花集

いつまでか我れのみひとり住よしのはぬ恨を君にのこさむ
いたづらに今年もなかば過ぎにけり我があふ事はいつを限ぞ
芳野の行宮をよそに移さるるよし聞えしかば

先朝の御名残も猶遠ざかる心地して如何なる
 ことにかなどさまさま歎き申して宗良親王「た
 らちねの守をそふるみ吉野の山をばいづち立
 ちはなるらむ」と奏したまへる御返し集字花
 故郷となりにし山は出でぬれどおやのまもりは猶もあるらむ

御製集第三卷終

(岡田三郎助意匠) (御製本)

御製集 第參卷

〔非賣品〕

大正四年八月十日印刷
大正四年八月十三日發行

版權所有



編纂者兼

列聖全集編纂會

東京市麴町區內幸町二丁目三番地

右代表者

中塚榮次郎

東京市赤坂區青山高樹町十二番地

印刷者

井上源之丞

東京市本所區番場町四番地

印刷所

凸版印刷株式會社本所分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所

電話新橋一三二七番
振替東京二九八八番

列聖全集編纂會

2/135/1
~



328
378

終